蒼天の鈴歌（ストッページ） [乾クエ2]

群青 坊哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蒼天の鈴歌（ストッページ）［乾クエ２］

【Ｎコード】
Ｎ０５７７Ｄ

【作者名】
群青　坊哉

【あらすじ】
世界を創造した３つの巨石の一つ……魔石を蘇らせる力を秘めた『魔族の巨石』が目覚め、人間界への出入りを禁止されたはずの魔族の行動が活発化していた。事の次第を把握した天使達は密かに動き出す。一方、蜘蛛型魔族を倒し日常を取り戻したリチウム達にも新たな魔の手が迫っていた――魔石を巡り繰り広げられる異色ファンタジー第２段。

＊（前書き）

<i6546—1052<

＊

「――以上が先事件の経緯です。
キーパーソンとなる人間は四名。まず……」

厳格な気配と、流れの滞った重苦しい空気が支配する空間に、良く通る男の声が響く。
照明を落とした広い会議室には数十人の老人がロの字型に並べられた長机に等間隔に座っていた。互いの距離は、この暗がりの中、目を凝らさなければ隣に座る者の表情も判別できない程に空いている。
室内奥に一人直立している、眼鏡をかけた金髪の青年が資料から顔を上げると、同時に、彼の背後――室内正面に設置された巨大なモニターの表示が切り替わった。

映し出されたのは、銀髪の青年だ。
精密に造られた人形のように整った顔立ち。
挑戦的な切れ長の青瞳。
僅かに室内がどよめいた。
モニターの脇に立つ金髪の青年に顔が酷似していたからだ。

「――リチウム・フォルツェンド。
私の管轄下に住む人間です」

次に映し出されたのは、蒼髪の少女。
細面にルビーを思わせる赤い瞳が印象的だ。

「グレープ・コンセプト。
彼女はアイオン教会の学園のシスターですね」

切り替わった画像は、精悍な顔付きの青年だった。
黒い短髪に意思の強そうな黒瞳。

「トラン・クイロ。
……彼は警察機関――国際警視庁に所属しています。
そして、最後に――」

モニターは利発そうな顔をした、碧瞳の幼い少女を映し出す。

「リタル・ヤード。
グレープ・コンセプトの所属しているアイオン学園に通う小学生です。
この四名が先の事件に関わった――禁術封石を所持する人間達です。
特に、この男」

モニターが切り替わり、最初に映し出された長い銀髪の青年――リチウムの顔が表示された。

「蜘蛛型の魔族の狙っていた『死球』を所持しています」
「～馬鹿な」

『死球』の言葉に、入口付近の席に腰をかけていた老人のしわがれた声が上がる。

「『死球』だと？　そんなものを人間が」

暗がりでその表情まではわからない。が、老人はひどく興奮した様子だった。その老人のものと思われる影が席を立ったからだ。

直立したまま場を動かぬ影へ、静かな視線を送る青年。

「ええ。いつから所持しているのか、どのようにして手に入れたのか、経緯はまだ判明していませんが……ここ数年、私が見てきただけでもう幾度も『死球』を発動させています。

使いこなしている、という域ではありませんね。もはや身体の一部のように」

「信じられん……」

「『死球』が身体の一部だと……？」

「……」

口々に声を上げる老人達。

「また――こちらの黒髪の人間ですが。天石『炎帝』を所持し、使いこなします」

モニターが切り替わりトランが映し出されると、室内はさらにどよめいた。

「『炎帝』……だと！？」

「何故人間風情が？」

「しかも国際警視庁勤務か……所持しているのは魔石ではないが……これは」

「確かに天石は総て保管室に」

「出入り禁止のはずでは――」

「確認急げ！」

「……さらに、この少女は『転位』、それから『魔眼』を使いこなします」

騒ぎが治まらぬ内に、モニターは既にリタルの顔に切り替わって

いた。

「『死球』に『炎帝』を使いこなす人間だと……？　おまけに『転位』と『魔眼』……こいつらは一体どういう人間だ」

「現在人界で流行しているストーンハンターという職業を生業とした人間の集まりです。一味自体は寄せ集めと言ってもいいでしょう」

「しかし、所持している石はどれも尋常ではなく、それらを使いこなすなど……もはや異常の域ではないか。こんな人間達がどうして今まで野放しにされていたんだ」

「ファーレン！　一味の本拠地はおまえの管轄だろう！　今まで何をしていた？」

「申し訳ありません。魔力の暴走の気配もなく、所詮は人間の操る魔力。わざわざ上官の手を煩わせることもないと自己判断し、独自で調査、監視を続けておりました。……まさか魔族が人界に浸透するなどという異様な事態になるとは予測していませんでしたから」

上がる憤慨の声に、ファーレンと呼ばれた金髪の眼鏡の青年が深く頭を下げた。

「……まぁ。ファーレンの監視のおかげで『死球』が魔族の手に渡らずに済んだんだ。今回はよしとしようではないか」

ファーレンの目前――最前列の席に腰を下ろす老人の厳かな声がざわめきの中鎮座する。

と、水面に波紋が広がるように、老人達の騒ぎが静まっていった。

立ち上がっていた入口付近の老人も着席し、室内が完全に静寂に満たされた事を確認すると、

「――ありがとうございます、オーライオス警視監。始末書は後ほど報告書と一緒に提出させていただきます」

ファーレンが体ごとそちらを振り返って、もう一度深く頭を下げる。
そのままの体勢で数秒静止。顔を上げ、最前列の老人――オーライオスが僅かに頷くのを見届けると、
「……では、改めて事態を整理します」
室内に向き直ってから、再び資料を目にしたファーレンは淡々と読み上げた。
「時期は不明ですが、太古より言い伝わる三神の一つ、『魔族の巨石』が目覚めました。
皆さんも知っての通り、魔界に在るとされる『魔族の巨石』は、失命した存在の魔力の結晶である『石』に、もう一度生命を与える力を持ちます。
つまり『魔族の巨石』とは、かつて我々が滅ぼしてきた大魔族を復活させる事を可能とする、非常に厄介な代物です。
先日、蜘蛛型の魔族を透心した所、既に数十体の魔族が人界に降り魔石収集に動いている事が判明しました。
魔族が同盟を破り他界に侵入している以上、天界(われわれ)がこれを黙認する訳にはいきません。
既に魔族側に先手を打たれている以上、天界に必要なのは防衛策。我々ＷＳＰで魔族の目論見を阻止することが先決だと思われます。
そこでみなさんには魔族に手を出されぬよう、管轄下の魔石収集を急いでいただきたい。
万一、現場で魔族と接触した場合、ただちに魔族を魔界へ送還するように、との命をお上よりいただいています。
具体的な対策が練られていない今、出来る限り魔族との戦闘は避けるように、との事です。

なお――」

そこまで言い終えると、ファーレンは僅かに顔を上げ、眼鏡をクイっと上に押し上げる。

「――先の事件に関わったこの四名の人間については、引き続き私が監視、調査します」

再びざわめきが生じる室内。

老人達の様子をただ静かに映す、暗がりに光る眼鏡の奥の表情はわからない。無言のまま抗議、反論を受け流すファーレンに、先程場内を鎮めた最前席の老人――オーライオスが静かに太声を上げた。

「……それも、お上の命令か」

ファーレンはオーライオスと目を合わせると、何も答えずに、ただにこりと笑みを返すのであった。

数分後。

重役達は解散し、会議室はがらんどうになっていた。

無機質な照明の点った明るい室内に一人、ファーレンは腰掛け、資料――自らが拵えた報告書に目を通している。

と、流し読みしていた金の瞳の動きが止まった。

「……確かに。ご老体が騒ぎ立てるのも尤もな事なのですが。

一番不可解な存在は……やはり彼女なんですよねぇ」

長い足を組み、背に折りたたんでいた白翼をゆっくりと動かして室内に風を生む。

深い金の不思議な色彩を持つ瞳は、会議では話題に上がらなかった――もとい、上げなかった、蒼髪の少女の顔を映していた。

1

「……あれ？」

突如、ダイニングの辺りから不審に響く鈴の音が漏れた。

大きな窓にかけられた薄布のカーテンが風で軽やかに流れ、時折、夕焼けの弱光が室内に差し込む。

リビング内のソファにゆったりと腰掛け、思い思いに休日の午後を楽しんでいたリタルとトラン。それから、トランの頭に両腕を置き持たれかかる様な体勢で浮いているクレープが一斉にそちらを窺う。

「……何。またなんかやったの？　グレープ」

用途の解らない超小型機械を弄っていた手を休め、横目でダイニングの方向を凝視するリタル。黄緑色の髪を二つに分けて上で束ね、エメラルドに輝く大きな瞳をした彼女は今年で十一歳。相も変わらず、愛らしい容姿に似付かわぬ数々の工具類が、まるで主を護る兵隊の様に彼女の周りを取り囲んでいる。

傍らに展開された重厚な工具箱はさながら要塞か。

『つか、ダイニングなんかに一人で何してんのよあのコ。

石化製品は使えないはずデショ？

石ならナンでもカンでも例外なく、お構い無しに暴走させちゃうんだから』

一方、我関せずといった表情を浮かべているのはクレープだ。

長い艶やかな金の髪を頭の右上で一つに束ねたこの少女は、グレ

ープと瓜二つの容姿をしている。
ただし、彼女には実体が無かった。その肢体は半透明で背後が透けて見えるのだ。
ようやくトランから離れると、クレープは宙で優雅に半回転。仰向けの体勢で細い白脚を組んだ。
おかげで薄い腹が全開になっていたりするのだが、当の本人は勿論、周りの人間も見慣れてしまったのか、あまり気にしていないようだ。

「いや、そうでもないみたいだぜ？」

トランは読んでいた夕刊から視線を外し、そんなクレープを振り返った。
職業柄、普段は堅苦しい格好をしている為か、休日は草臥れたTシャツにジーンズ……といったラフな格好をしている事が多い。故にその童顔が益々際立ってしまっている。今年二十一歳なのだが、十七歳のグレープ達と同じ歳に見えなくもない。

『ナニ？』
「リタルがさ、今朝」
「造ってやったのよ。このあたしがね。
家事が大好きなあの子に。一人でも家事が出来るようになる代物を」

リタルは胸を反り返らせつつ、小さな手で器用にドライバーをくるくると廻した。
ちなみに、手にしているドライバーは彼女が特注したもので、頑丈でなめにくい造りの物だ。鮮やかな緑色をした持ち手には、なんと彼女のイニシャルが入っている。
購入後しばらくの間、リタルは事ある毎にドライバーを握っては

ニヤニヤと小さな顔面に笑みを張り付かせて周りを気味悪がらせていた。彼女は自他共に認める立派な工具オタクである。

『だからナニを』
「『魔力遮断布』」
『マリョクシャダンフ？』

トンチンカンな表情を浮かべたクレープの鸚鵡返しに、それでも満足そうにうんうん頷くリタル。

「そう。グレープの身体に直接石化製品が触れないよう、魔力の通りがめちゃくちゃ悪い布で手袋を作ったの」
『……つか、元々魔力の通りが悪い素材があった訳デショ？　それで手袋作ったってだけ？　それって、「造った」って言わなくない？』

呆れた口調で喋りながら、くるっと横に半回転すると、うつ伏せの体勢で頬杖を付く。
そんなクレープのジト目に、リタルは瞼を閉じると小さな人差し指を立て「ちっちっち」と振ってみせた。

「シャーラーップ。そのまま普通に手袋にしてたんじゃあの天然破壊魔の攻撃を防ぐ事は出来ないわ。
ここはちょいちょいっと改造してね……まず手始めに、バリアーの石類を溶解させて……」
「――まぁ、過程は俺等が聞いたってわからんから。すっ飛ばさせてもらって結果だけ言うとさ。
グレープちゃん、今朝初めて普通の掃除機使って、無事に掃除出来たんだよ」

リタルの高説を遮ってのトランの言葉に、目が点になるクレープ。
『……うっそ。マジ？』
「マジ。俺が見てた」
口元を押さえて素っとん狂な声をあげるクレープに、新聞を畳んで脇に置き苦笑するトラン。
驚きをよそに、あぁこの顔が好きだな……と視界を脳裏に焼きつけつつ、クレープは続ける。
『掃除機って……本当にフツーの？　なんの細工もしてないただの掃除機？　こないだリタルが造った、対グレープ用強化バージョンの最新型掃除機でさえ連戦に耐え切れずにあえなく破壊魔の手によって葬りさられちゃったっつうのに？』
うんうんと頷くリタルとトラン。
『……ホントに、ただの一度も暴走しなかったの？
いきなり吸収率がアップして空気を吸い込みながら独りでに走り出して止まらなかったりだとか。
タンクの中身を暴発させて大量のホコリを部屋中に撒き散らしたとか……』
「なかったよ」
『冗談じゃなくて？』
「ああ。その後ご機嫌で洗濯機まで使ってた」
『……ご、きげん……！？』
もはや、絶句してしまったクレープ。見開いた赤い瞳が今にも零れ落ちてしまいそうだ。
その様子を横目に、ご満悦に鼻を鳴らす少女。

「〜んっふっふ。ようやくゴ理解イタダケタかしら？
気分高揚時に出でる破壊魔最恐の能力『ゴキゲングレープチャン』を封じたこの天才の天才たる所業！　優秀な頭脳と超絶器用な手先が生み出した世にも可愛い発明品ちゃんの素晴らしさを！」
『……まさかあのコが……「天然破壊魔」なんて気楽な単語じゃ括れないあの暴走産出悪魔が。石化製品……もとい、石を使いこなす……。
こんな日が来るなんて……』

愕然とトランの足元に両手を着き、項垂れるクレープ。

「そこまで言うか」

トランがジト目でその背を見下ろす。

『……明日は大雪。いや、嵐。天変地異……いや、きっとそんな生易しいもんじゃないわ……いきなり世界が闇に包まれたり……』
「〜そこ。縁起でも無い事ぬかすな」

ドライバーの先をクレープに向け、ぴしゃりとリタルが言い放った……その時。
それを合図としたかの様に、唐突に、ソレは起こった。
ズン……と、地響きのような鈍い音が室内に響いたかと思えば次の瞬間、部屋中の石化製品が著しく静止した。
先ほどまで煌々と点灯していたシャンデリアはぷつんと内の光を消失させ、まるで生気を失ってしまったかのよう。意味もなくつけていたテレビもぶぉんと切れ、クレープが煩いと嘆いていた空調の音もまた、すぅっと消失した。
それぞれが一秒のズレもなく同時に音を立て、直後、それらは一

斉に眠りについてしまったのだ。

残されたのは、すっかり日の落ちた、薄暗い室内。
……に、呆然と三人。
開きっぱなしの窓の外、カァカァ……とカラスののどかな鳴き声が通り過ぎる――

――三人は、そこでようやく我に返ると、一斉に顔を見合わせ、そして叫ぶのだった。

『～グレープ！？』

2

「〜本当に闇に包まれただなんて……一体何事よ」

暗い廊下をブツブツと呟きながら歩を進めるリタルを先頭に、三人はダイニングの先にあるキッチンを目指していた。

やがてキッチンに足を踏み入れた三人は、コンロの前ですっかり困り果てていたグレープの姿を発見する。

「グレープ！　あんた、今度は一体何、を……」

不機嫌満開だったリタルの表情が、言葉と共に、みるみる困惑の色に染まってゆく。

そこに立っていたのは、紛れも無くグレープ・コンセプト、その人であった。くっきりとした目鼻立ち。抱けば折れてしまいそうな程か弱い細背に華奢な手足。肩まで伸びた蒼糸を後ろで一つに纏めている。その姿はいつもの彼女のままで、特に何の変化も見られない。

が。

彼女が両手に装着している薄いグリーンのグローブの方に問題があった。

「……グローブ……光ってる」

『どゆコト』

マジマジと、グレープの手元に注目する女二人。

「コンロに火を点けようと思ったらいきなり、こんなになっちゃいまして……」

光る両手をパタパタと振りつつ、火が点かないんですーと弱々しい声を上げるグレープ。

「……いや、火なんてもうこの際どうでもいいんだけどね、グレープちゃん」

苦笑しつつ、とりあえず落ち着かせようとその背に手を置くと、

「……熱い？」

眉を顰めてトランが呟いた。

「ほへ？」

間の抜けた声を上げたグレープの前髪を、トランは空いた方の手で掻き上げる。そのまま、露になった白い額に掌を当て続けて、数秒……。

「……熱があるよ」

僅かに汗の滲んでいた額から手を離すと、トランは神妙な面持ちでグレープの顔を覗き込んだ。

真っ直ぐな黒瞳に、困惑した少女の顔が映っている。

「何。風邪でもひいたのグレープ」

「……？　いえ、別にこれといって異常は感じないのですが……」

キョトンと見開いたルビーアイは、トラン、次いでリタルに戸惑

いの視線を向けた。
と、玄関から扉の開閉音が響く。
「〜おい、リタル、グレープ。おまえらまた何かやらかしたのか？
街中真っ暗だぜ？」
問いかけながらも、彼の端整な顔立ちは確信に満ちていた。
長い銀髪、真っ直ぐに通った鼻筋。切れ長の青い瞳を持つ長身の男――リチウムが後頭部を掻きつつ廊下をズカズカと歩いてくる。
「〜なんだって？」
「街中！？」
即座に反応を示したのは、リタルだった。その場をトランに任せ、小さな身体が駆け出す。半透明のしなやかな肢体の脇を流れる、黄緑色の毛束……
『……待ちなさいよチビガキ！』
クレープも飛んでその後に続いた。
「あ、おい……！？」
廊下に居たリチウムの目前を通り過ぎ、十畳程の広さのあるリビングを駆け抜け、二人はベランダに出る。
一寸後。
「……」
『……。マジ？』

リタルの背後で、クレープの声が漏れた。
無言で街を映すエメラルドグリーンの双眼が大きく見開かれている。

一フロアにつき三部屋。立地条件が良い割りには空き部屋の多い十一階建てのオンボロマンションの最上階。所持している三部屋の境を総て取り外してできた、やけに細長くて……だが、見晴らしだけは自慢できるベランダ。そこから見下ろす街並みの――その異様さと言ったらどうだろう。
外灯は一つ残らず消え落ち。
どの家の窓だって、例外なく真っ黒。
総てが、闇に敷かれていたのだ。

『……』

唖然とした表情のまま、その場に立ち尽くすリタルとクレープ。
夜でも明るい街の様子は今や一転していた。
まるで生気を失ったかの様。
闇のベールに包まれた大小の建物がただ静かにそこに存在している。

「～グレープちゃん！？」

突如、何か大きな物が落下したような音と、トランの叫び声が耳を劈いた。

いち早くキッチンに駆けつけたリチウムの視線の先には、床に膝を付けたトランの腕の中、ぐったりと横たわったグレープの赤い顔があった。

3

甘い香りが鼻腔を擽る室内は、パステルカラーとぬいぐるみ、様々な形のクッションに支配されていた。ここは2号室のグレープの私室である。

夜が降り、六畳間は暗々としている。

包んでいた遮断布を取り除き、蝋燭の灯りの下で体温計を直視したリタルは顔を顰めて呻いた。

「……四十度越えてる」

紅潮した頬。顔や首筋に張り付いた髪。

ベットで苦しそうに息つくグレープの様子を心配気に見下ろすトラン。

闇に目が慣れたのか、少し離れた位置でも苦悶の表情が見て取れる。

「さっきまであんなに元気だったのに」

「このあいだの疲れが出たのかな……」

トランの言う「このあいだ」とは、蜘蛛の姿をした魔族に襲われた――一週間前の事だ。

あの時、蜘蛛の魔族の毒に犯されたグレープは、しかし麻痺が解けるとその後、何事もなかったかのように一人元気に動き回っていた。

「それにしちゃ高温過ぎるでしょう。四十度だなんて……それこそ流行り病なのか……」

体温計をサイドテーブルに置くと、ベットの脇でグレープの様子を見つめるリタル。
熱い頬に手を添えると、思っていたよりも湿っていた。リタルは持ってきていたタオルでグレープの顔を優しく押さえる。
汗を十分に吸ったタオルを洗面器の水に浸そうと視点をずらしかけたところで、ふと、未だグレープの両手で淡く光るグローブが視界に入った。

「コンロが暴発しなかった事を考えると壊れた訳じゃなさそうだけど。なんで光ってるのかは未だに謎でも、追及できる状況じゃなし……さすがに外しとかなきゃね……」

呟き、グレープの手に触れるリタル。
ややあって、

「……あれ？」

素っ頓狂な声を上げた小さな背を、その背後に居たトランが訝しげに見た。

「どうした？」
「うん……手袋がね……引っ付いて……」
「外れないのか？」

様子を見ようと腰を屈めたトランを、リタルが呆然と振り返った。

「……皮膚の一部みたいになっちゃってる」
「……は？」

黒眼を丸く見開いたトラン。

座り込んでいたリタルをやんわりとどかし、自分も手袋を外しにかかるが、柔らかい素材の布地はリタルの言葉通り、何かで接着された様にべったりと……完全に皮膚に吸い付いてしまっている。
無理に外せばそれこそ、皮膚が剥がれそうだ。

「……なんでだろう。やっぱ壊れちゃってるのかな……コレ」

トランの背後で、軽く曲げて作った拳で口元を押さえながら、呟くような声を発するリタル。

「……もしかして。この熱も、手袋のせい……？」
「～馬鹿言わないで！」

トランの呟きにリタルが激しく反応する。

「あたしの発明品ちゃんズに危険なものは何一つ無いわ！」
「発明品ちゃんズって……おまえ」

前々から思っていた事だが、才女のネーミングセンスはどこかおかしい。
ジト目のトランからグレープの手首を奪還すると、リタルは光る手袋をもう一度しげしげと眺めた。

「それよりも……さっきから思ってたんだけど、コレ。
何かに反応して発光してるみたいじゃない……？」

「干渉？　……外部からか？」

1号室――先程までリタル達が寛いでいたリビングにも例外なく闇が降りていた。
ソファにどかりと腰掛けたリチウムが眉を顰めると、テーブルを挟み向かい合う状態で宙に座っていたクレープは軽く頷く。

『そ。
ついさっき、2号室にグレープの身体を移動させる時に、あのコの中に入ったデショ？　その時に気づいたんだケド。
何だかオカシナノがグレープの身体に纏わり付いてるの』
「オカシナノ、ねぇ」

クレープの口調を真似たリチウムが腕を組んで唸る。

「グレープの変調も、街の事態もそのせいだっつうのか？」
『……街のザマはグレープのせいよ』

窓の外の深闇へと視線を移すと、溜息交じりに言葉を吐く。
ふと視線だけをそちらに向けると、さらに眉根を寄せて自分を見ているリチウムに気づいて、クレープは抑揚の無い声で付け加えた。

『外部の干渉はグレープ個人に向けられたものだけど。……グレープの破壊魔っぷりはアンタだって知ってんデショ。街中の石化製品が一斉に止まってしまったのは、リタルの造ったあのグローブがグレープの影響で広大な範囲に作用し続けてるせいとしか思えない。
今現在も、ね』
「……この異常事態が、いつもの――グレープの引き起こした石化製品の魔力の暴走だっつうのか？」

言葉を吐き、気だるげに後頭部を掻くリチウム。

「……確かに、グレープが無意識に石の魔力を暴走、暴発させたケースは、この三ヶ月間で嫌という程目にしてきたが……」
『リタルの話によると、グレープがはめていたあのグローブ。魔力遮断布って言って、あらゆる魔力を通しまセンっつー石化製品らしいの。ソレが干渉波の影響でパワーアップしてしまった破壊神グレープの手で見事に暴発して、現在街中の魔力が遮断されてしまっている……というコノ有様。納得できない？』
「つってもさ。石化製品の暴走が街中に影響するケースってのは初めてじゃねぇか。……本当にグレープがやってんのか？　にわかに信じがたいんだが」
「……」

リチウムの問いに、しかしクレープは答えない。
暗がりの中、中央に鎮座するテーブルの上に立った数本の蝋燭。それらの仄かな光がゆらゆらと彼らの困惑の表情を照らしている。

『……どれくらいの範囲、停石してンの？』

室内を沈黙が支配してから数十秒後。
細い脚を組み替えたクレープが静かに口を開く。

「さぁな。屋上から見た限りじゃ辺り一面真っ暗だったぜ」
『……ま。あの干渉波をなんとかするしかないわね。このままじゃグレープの変調も収まらないし。恐らく魔力の暴発も止まらない。即ち、生活にも支障来たすわよ』
「……早速今日の飯だな」

銀髪を掻き上げ、神妙な顔付きでリチウムが呟くと、

『さっきグレープが拵えてた生肉ハンバーグならキッチンにあるケ

ド』

クイっと形の良い顎をダイニングの方へ向けるクレープ。

「マジに食ったら褒めてくれンのか？」

『まさか。軽蔑するわよ、思いっきり』

「だろうな」

無駄な筋肉の無い長い両腕をソファの背にかけ、深くもたれかかるリチウム。

「……しっかし……グレープ個人に干渉、か。……またファーレンの仕業か……」

自分と容姿がそっくりな天使が、常日頃からグレープを気にかけていた事を思い出し、リチウムは独り言のように呟いた。

『裏で糸を引いてるのはそうかもしんないケド。干渉波自体は奴の魔力じゃない。もっと禍々しい感じよ』

淡々としたメゾソプラノに黙り込んでしまったリチウム。

と、玄関の扉の開閉音と共に、二つの灯りが現れた。

廊下を真っ直ぐに、こちらに向かってやってくる。

「リチウム！　やっぱグレープなんか変よ！　……いや、正確に言うとあたしの可愛いグローブが変！　どっか他所（よそ）に反応してる！」

「何かに反応してずっと作用し続けてるらしい。グレープちゃんの身体に大きな不可がかかって、発熱してるようなんだ」

バタバタと、リタルとトランがリビングに顔を出した。

真っ暗がりの中、リチウムの青い瞳が二人を捉える。

「……情報古ぃって」

「はぁ？」

『ソリャ、街中を停石に追い込む程の魔力を暴走させ続けてるんだもの。コレで身体に不可でもなきゃあのコ、破壊魔の上に無敵よ』

平静を保ったまま言い放つクレープに、トランが振り返った。

「街中の停石……グレープちゃんがやってるって言うのか！？」

「……みてぇだな。まぁ、グレープがひっくり返ったのもグローブの暴走も、クレープの話じゃ外部からの干渉波ってやつが原因らしいが」

「……やっぱり。外からなんか悪さしてる奴が居るのか……」

眉間に皺を寄せ、軽く握った片手で口元を抑えるリタル。

彼女の癖だが、こうすると小さな顔面の半分が隠れて表情が読み取りにくくなってしまう。

『……タイミングが悪かったっつうか。アンタの親切心って悉く恨めに出るわね……』

「うっさい」

クレープの横槍を視点を落としたままぴしゃりと跳ね除け、リタルは口元を押さえたまま独り言のように呟いた。

「にしても妙ね……グレープ個人に干渉？　なんだってグレープ如きにそこまでする意味がある訳……？　しかもこんなタイミングよく」

「如きっておまえ」

「そら、『如き』だろうよ。相手はこっちの陣地のごっつい守備を突き破る程の魔力を堂々と送ってきてやがるんだぜ？　そんなことが出来るのはさ……」
『実行犯は、そこのちびっ子が手を加えた強化バリアーの魔力すら破る程の魔力を持つ者……』
「誰がちびっ子だ！」
『……オソラク、魔族でしょうね』
「……なんだって？」

訝しげに問うトラン。
立ち尽くした彼に一瞥くれて、リチウムが口を開く。

「魔族が人間――しかも個人を相手にしてくれてんだ。『如き』で合ってると思うが」
「つか！　なんで魔族なんかにグレープちゃんが狙われるんだよ？
……ついこないだ大蜘蛛の件があったばかりなのに……」
『それかもね』
「……え？」

線の細い美しい顔だち。
トランの黒瞳を、グレープと同じ赤の光が射抜く。

『トランちゃん、覚えてる？　あの大蜘蛛、後で仲間と落ち合うようなコト言ってなかった？』
「言ってたわね。しっかり」

ソファに腰を下ろしたリタルが深々とため息をついた。

「落ち合う約束をした後、仲間とやらはどこぞでずっと大蜘蛛を待ってた。

それなのに、大蜘蛛はいつまでたっても場に現れない。
だとすれば、探しに来るのは……常識、なのかしら？　魔族にとって。
……まぁそれよりかは、大蜘蛛が倒されたと知って『死球』を狙いに第二波を送り込んできた、と考える方が自然かも。
それに……大蜘蛛の能力は確か、『魔力を吸い取る糸』だったかしら。
あの時『記憶を探る石』で覗いたあたしたちの記憶――情報を、魔力で練り上げた糸に記録する事が可能なら……、ううん。それでなくても、何らかの形で、得た情報を身内に伝える術が大蜘蛛にあったのだとしたら、魔族側にあたしたちの位置がバレてても全然不思議じゃない……」
「～だから……っ　どうしてグレープちゃんが狙われなきゃなんないんだよ！」

冷静な面々にトランが声を荒げた。思考を巡らせる事に集中していたリタルがビクッと小さな肩を震わせる。

「『死球』を狙ってるんなら、直接リチウムに仕掛ければいいだろ……っ」

見ると、トランは誰も視界に入れていなかった。
落とした視点。硬く握り締めた両の拳は僅かに震えている。
リタルの脳裏に、先程、グレープの様子を見つめていたトランの表情が過ぎった。

『……トランちゃん。グレープだけよ。禁術封石を持っていないの』

一呼吸おいて。
クレープは、彼女にしては柔らかく、落ち着いた声をトランの背

にかけた。

「……それがどうし……！」

「……これは推測だけど。石――魔力抵抗が無い分、狙いやすかったのかも。

……ほら。石を持つ人間には多少なりとも石の魔力が身体の中に流れてるでしょ？

グレープは石を持っていない。って事は、あの子の中に魔力は全く存在しない。

異魔力が流れていない分、干渉しやすかったのかもしれない」

リタルがゆっくりとした口調で補足すると、

「……くそっ」

悔しげな表情で、トランが荒々しく壁を叩いた。

『干渉してきたところに、運悪くグレープが身に着けていた魔力遮断布が暴発しちゃった、……と。

……つか、ひょっとして狙ってやったのかもね』

「十中八九そうだと思う。

大蜘蛛を倒してからこの一週間、あたし達はどこぞの魔族にずっと監視されてた……そう考える方が自然だし。あたしが遮断布造ってるとこも魔族サンはじーっと見てらっしゃったのかも。

完成した魔力遮断布がグレープの手に渡った瞬間、満を持して干渉。……有り得なくも無いわ。

って事は、この事態――停石は狙ってのこと。……まんまと利用されたって訳か……」

「……」

再び静まり返った室内。
深刻な面持ちのメンバーの中で一人、場ににつかわぬ不敵な笑みを浮かべていたリチウムは、顔を上げて周囲を見回した。
「……んで？
結局、俺様達はまたどこぞの魔族に喧嘩を吹っかけられてる。
……って事で、いいんだよな？」

4

「ンじゃ、現状確認ね」

リタルが地図を片手にリビングに戻ってきた。
ソファに座っていたリチウム、トラン、クレープが一斉に彼女を見る。

「リチウム。
グレープの暴発が影響を及ぼしている範囲――停石してる範囲って大体どれ位か、わかる？」

言いつつリタルは、成長途中で伸びきっていない細腕を懸命に伸ばして、中央のテーブルに大きな地図を広げた。
蝋燭に照らされたソレは、この街――グノーシスのものだった。
リタルお手製の地図なのだろう。地図の中心はこの十一階建ての古マンション――ホームだ。
リタルは蛍光ピンクのマーカーを取り出し、ホームを塗り潰した。
と、その作業中、彼女の視界上部からリチウムの手が伸びる。

「……屋上から見た所、見渡す限り全部だ。
ここと、この建物は、日も落ちてるっつうのに真っ暗だった」

言いつつ、該当する建物を指すリチウム。

「オーケー。
リチウム。あんた視力はいい方よね。あたしとさして変わらない位……」
「馬鹿言え。俺様はおまえ以上に視力いいぜ？　なんつったって俺

様は昔……！」
「……なら、リチウムの目線の高さも入れて……大体この辺まで。確実に停石している訳か……。思ってたよりも広範囲ね」
遮られ憮然とした表情のリチウムに介する事なく、蛍光マーカーでぐるりと、ホームを中点とした円を地図上に描き込むリタル。
「……街の西側だな」
トランの呟きにリタルは小さく頷いてみせる。
「ココが中心だし。これは一応の最低ライン。あたしが造ったグローブの魔力が暴走しているのなら、とりあえず、この円の内側に位置する箇所はホーム（ここ）と同様の状況――つまり、魔石は愚か石化製品も使えない状態にあると思ってもらっていい」
「……リタル。手袋の説明頼む。原理がわからんから現状の把握もままならん」
呼ばれて顔を上げたリタルは、向かいに腕組みして座ったリチウムの短い言葉にコクリと頷く。
その場に直立すると、一同の顔をぐるりと見回した。
「あのグローブは特殊なの。
魔力を通しにくい素材で編まれた布に、バリアの石と……、……それから、こないだグレープが暴走させて変化させちゃった『元ロックの石』を使ったのよ」
凛と響く声が室内に鎮座する。
リタルの言葉に、一人、眉を潜めるトラン。

「グレープちゃんが暴走させた？」
『トランちゃんが仕事の時にね』

間髪入れず、トランの横に腰掛けているクレープが口を開いた。
半透明な身体を持つ彼女は腰掛ける事は出来ない――というか、別に腰掛ける必要なんて無いのだが、最近では周囲の人間に姿勢を合わせるのが彼女のマイブームになっているらしい。
特に意味は無いようなのだが。

『グレープがロックの石を壊して、3号室に閉じ込められた事があったのよ』
「3号室って確か……リタルの作業場だよな？」

クレープに、次いでリチウムに視線を向けたトラン。
トランの視線に気付き、チラリとそちらを見遣ったリチウムは瞼を閉じると、

「ああ。そうだ。
しかし、結局俺様が死球でドアを破壊してメデタシメデタシ……で終わったはずだったんだけどな……リタル？」

再び開眼すると、青瞳は真っ直ぐにリタルを見る。

「その後の事については俺様、何の報告も受けてないぜ？
手袋造るのに『元ロックの石』を使ったってなら、暴走して性質変化した石が一体何に化けたのか。おまえ既に把握してんだろ」
『っつーか。あの石ってリチウムの「死球」で破壊したんデショ？
なら「元ロックの石」なんて代物はもう存在しないはずデショ。
「死球」ってのは、発動すれば触れたモノ総てを無にするデタラメな石なんだから』

「デタラメってな、おまえ」

ジト目でリチウムが睨むが、当の幽霊は「なによ」って顔。
深々とため息を吐いたリチウムは釈然としない表情のまま後頭部を掻く。

「っつうか。あの時は石そのものを破壊した訳じゃねぇ」
『うっそ。だってこの小娘が……』

言ってたじゃないの、とリタルを見るも、リタルは真顔のまま無言で見返すだけだ。

「あぁ。寸前でこいつに頼まれてな。
調べるから絶対にロックの石には傷をつけてくれるなと。そりゃあもう、鬼のような形相で……」

リチウムやクレープ。両の視線を受け、

「……造ってから説明しようと思ってたのよ。
……新たに生じた疑問もあるし」

それまで正面を向いていた顔が一瞬、軽く俯く。
リタルは、どこか深刻な面持ちで。ハッキリしない事柄が大嫌いな彼女にしては珍しく、歯切れの悪い答えを返した。
不審に思った一同が、窺おうと口を開いた時、

「――まぁ、それは置いておいて」

顔を上げ、腰に手を当てたリタルの表情はすでにいつもの強気なそれだった。

「グレープの手によって暴走しちゃったロックの石はね、完全に別のモノに変わっていたの。
ううん、言うなれば、進化したっていうか」
「進化？」
聞きなれぬ単語に眉を顰めるトラン。
リタルは深く頷いてみせる。
「そう。まさしく進化。
ロックの力が強くなったって訳じゃなくてね、魔力そのもののレベルが上がったというか。ランクアップしたというか。
より強力な、別の性質の魔石になってたの」
トランだけではない。
リタルの言葉に、一同、目を丸くする。
「そんな事って……」
トランが信じられないといった表情でリタルを見返した。
魔石が、進化した。
そんな話は、魔石関連に疎いトランは愚か、精通するリチウムでさえ聞いたことがない。
魔石というものは、魔力の結晶――魔力が固形化したものである。
何故、固形化したのかというと、本来の魔力の持ち主――魔力を生成、保管していた肉体が、滅びてしまったからだ。
魔力を体内で生成する種族は、天使と、魔族である。
魔力とは、彼ら天使や悪魔にとって人間で言う血液のようなものらしい。

一つとして全く同じ魔力は無いとも言われている。

人間と違って天使や魔族は、絶命するとその瞬間、肉体もこの世界から消滅する。

その際、魔力だけは消滅を間逃れる。

ただし、魔力は「魔力」という形のままこの世に存在する事が出来ない。循環――流動する事によって、魔力は「魔力」として存在する事が可能となるのだ。

生成・循環器である肉体を失くした魔力は、固形化し、「魔石」という形に変化してしまう。

魔石が出来るのはこういった仕組みなのだが――

リタルの話によると、「魔石」がランクアップしたらしい。

「魔石」というものは、天使や魔族の血液のようなものが固形化した代物だ。

つまり、彼女が今口にした事は、

「天使や魔族の「血液」がレベルがアップした」。

「天使や魔族そのものがランクアップした」と言っているのと同じ事なのである。

そんな事が、果たして起こり得るのか。

「にわかに信じがたいけど、本当よ。受け流して」

全員の思考を、凛とした声が遮断する。

「受け流せっつったって……」

困惑した表情のまま、トランが呟いた。

そんな事が起こりえる、可能なのだ、とすれば。

人間にとって、それこそ一大事ではないのか。

いや、他の二種族にとっても一大事だ。
魔族や天使がレベルアップする。
そんな事が出来るのならば彼らはどんな手段を使ってもその方法を手にしたいと願うだろう。
学生時代、歴史の時間で習った、三大種族間で取り交わされた条約。
同盟を結ぶことで、なんとか人間は他二種族との共存を果たした。
その均衡だって崩れてしまうのではないか――
「……んで？
結局ロックの石は、何に変わったんだ？」
息詰まるような沈黙をリチウムの声が取り払う。
「……どう説明すればいいかしら。
つまりね」
小さな人差し指を、胸の前で立てたリタル。
「元ロックの石は今や、石を中心として一定範囲内に存在するあらゆる魔力の流れを一時的に止める事が出来る代物になってしまったの」
『～魔力の流れを止める？』
その場に居た、リタル以外の全員の困惑の声が見事に重なる。
「……結局、それって一体……具体的にはどういう事なんだ？」
先程よりもさらに困惑の色を強めたトランの表情に、「つまりね」

と、リタルは体ごとトランに向き直った。

「魔石っていうのは、魔力の結晶――つまり、魔力の塊でしょ？

『人が魔石を使う』なんて簡単に言うけど、本来人間は魔力を持たない。塊である魔力を少しずつ人体に取り入れて……それこそ血液みたいに体中に流すからこそ、初めて塊の魔力を人が行使する事が出来るの。

勘違いしたまま魔石を使っている人が多いけど、魔石によって発動する力は石自体が放ってるんじゃない。実際に力を放つのは人間の方よ。石だけあっても魔力は発動しないもの。その原理は……微妙にニュアンス違うけど料理を想像してもらうとわかりやすいと思う。魔石は単なる『材料』なだけ。材料を拵える料理人が居なければ料理は完成しないでしょう？

もちろん禁術封石もそう。区別されて総称は違うけど、あれだって『ちょっと危ない「魔石」』ってだけだし」

言いつつ、自身の左手に装着していた緑色の禁術封石――『転位』を胸元に掲げ、もう片方の手で石をツンツンと突いてみせるリタル。

「魔石――魔力は本来、存在する為に流動し続けようとするもの。結晶化というのは石化と同じで何も活動できない状態だもの。生体さえあれば勝手に己を流動させようとする。

だからあたしたちが魔力を発動させていない時でも、所持している限り常に、所持者の体内に魔力を送り込み、流動させ続けている。

今みたいに喋ってる最中にも、魔石の所持者であるあたし達の体の中では常に一定量の魔力が循環を繰り返してるの。

リチウムには、『死球』の魔力が。

トランには、『炎帝』の魔力が。

そしてあたしには、『魔眼』と『転位』の魔力がね。

だから、その場で念じれば、一瞬で石の力は発動する。

反対に、日頃から石を身に付けていないと、石の力を即座に行使する事は出来ない。魔力が体内に行き渡るのに時間がかかるからね。
……その辺は、大まかながらも理解してる？」
トランは勿論、一同、リタルの視線を受け、コクリと頷く。
「よろしい。ンじゃ本題に入るけど」
満足気に見渡すと、リタルはさらに説明を加える。
「魔力は塊――魔石から流出し、人間の体内を流れている。体内を循環……流動させているからこそ、私たちは魔石を使える。
それって逆に言えばね。
魔力の流動を止めてしまえば、それだけで私たちは魔力――魔石を使えなくなるの。
だって、力を発動させたい場所……体外に、材料たる魔力が流れない――届かないんだから」
「あ」
誰とも無く漏らした短い叫びに、リタルは視線をそれぞれの顔へ巡らせる。
「『元ロックの石』は、一時的に魔力の流れを止める事が出来る。
つまり、使えば一時的に、範囲内に存在する魔石は使えなくなるの。
どんなものでも」
「それは石化製品においても言えるのか？」
「ええ。石化製品の仕組みはそれぞれ作動させる方法が違うから説明しにくいんだけど。
内部で魔力を流動させる事によって力を発動させる、その原理は

同じよ。
大体の石化製品は、人体がスイッチに触れると、機体内部にある魔力が機体の中を流動するように設定されている。
魔力は流動するからこそ、その力を作動させる事が出来る。
つまり、止まってしまったままだと、作動しない。
石化製品なんてただの粗大ゴミだし。魔石だってただの石ころになる」
「……成、程、な。
さんきゅーリタル。ようやく事態が飲み込めてきたぜ」

声に視線を投げれば。
自分の説明で事態をキチンと理解してくれた様子の……つまり、心底げんなりしてるクレープと、トランの表情と。
そして、何故か愉し気な笑みを浮かべているリチウムが視界に入る。

「ったくもぉぉ……。あんたはどうしてそう喜ぶのよ。
こんなとんでもない事態の、一体全体、どこいら辺がどう愉しいって言うんだか……」
「とんでもねーから楽しいんじゃねぇか」

ジト目に対し、ひょうひょうとした口調が返ってくると、「理解不能」とため息混じりの一言を吐くリタル。小さな頭も同時に、下へ下へと下がる……と。
テーブルに突っ伏すまで頭を下げた後、突如、彼女はぐいっと顔を上げた。
その表情は……ちょっと得意気だ。
新たな発明品を初披露する時なんかに、彼女はよくこういう表情を見せる。
向けられた視線に、怪訝そうな顔をする一同。

「ねぇ。こうして現状を把握してもらった訳だけど、
あんたたち。何か疑問が生じない？」

と、再び周囲に視線を巡らせる。
部屋に響く静かな問いに、目を丸くしたのはたったの一人。
予想していたのか。リタルは大して驚きも、不愉快さも見せず、
ただ、『目を丸くしていたたったの一人』の前に足を進める。

「さて、トラン。
魔石が使えないって事は勿論。どういう事だか、把握してるわよね？」

リタルのその目は明らかに「わかってないでしょうあんた」と物申している。
そんな視線を目前、それも僅か上の位置から、年端もいかぬ少女に寄こされ憮然とした表情になるトラン。

「当然だ。
要するに石化製品――テレビや照明は愚か、コンロやトイレ……そういう、生活必需品総てが使えないって事だろ。今が現にそうじゃないか」
「……つまり？」

リタルが冷ややかな視線で追い討ちをかける。
次いでの突っ込みが予想外だったのか、目を丸くするトランの表情に、やがて焦りの色が滲む。

「あ？　つまり？　……つまり、……えと」
『～ちょっとリタル。トランちゃんがあんまり可愛いからって虐め

ないでよ』

すかさず隣から放たれた援護射撃に、情けなさ爆発の表情で、隣の整った横顔を見下ろすトラン。

「……あのな、クレープ。庇ってくれるその気持ちは非常にありがたいんだけどさ」

その様子をどこか楽しげに見ていたリタルは、大袈裟に溜息をついてみせると、視線を自分に戻したトランを直視した。

「……まぁ、いいわ。やっぱり判っていないようだから試しに訊いてみるけど。トラン。

そこの非常識幽霊の半透明な身体がはっきりくっきり見えちゃうのは、一体全体誰のおかげだと思ってる？」

「……？　え、そりゃあ……」

問われて答えようと開いたトランの口の動きが、ピタっと止まる。

「ちなみにもう一つ訊くけど。

この蝋燭はどうやってつけたの」

「……」

各蝋燭は、総てトラン自身が付けたものである。

停石し照明が点かない為、トランが『炎帝』を発動させたのだ。

「……あれ？」

「ついでに言えば、冷蔵庫も点いてるわよ。だって。

腐っちゃうと困るもの」

「それじゃあ……！」

答えを待たずして、リタルは視線を再び一同に巡らせていた。
口元には、不敵な笑み。
「――ようやく全員が同じ土台に立ったところで。状況確認終了。
……作戦会議といくわよ」

1

「――状況は！？」

闇の中、シャツのボタンが今にも弾け飛びそうな程に太ったスーツ姿の男が、鋼鉄の盾を構えた数十人の武装集団の横列に、背後から大股で近づく。

歳は三十代後半。白髪交じりのダークグレーの短髪を後ろに流したダルマ――もとい、マルトリック・ゲイザーが鋭い眼光を周囲に投げた。

「変わりません！　対峙したまま、微動だにしません！」

「周辺住人の避難、完了しました！」

二人の若い男が声を張り上げる。それに頷いて、マルトリックは前方を睨んだ。

「あれが、魔族……か。また、奇妙なナリをしている……」

ふくよかな頬に流れる、一筋の冷たい汗。

「何が目的でこんな往来のド真ん中に浮いているのかはわからんが、奴が街西部の異変の一因だという仮説はほぼ間違っちゃいないようだな」

神妙な顔で、独り言のように呟く。

鋭い視線はなおも、闇の中、背後の外灯の薄明かりで浮かび上がった目標のシルエットに向けられたままだ。

「では、ゲイザー警部。アイツを追い払ってしまえば事態は……」
「〜いや」
難しい顔のまま言葉を遮るマルトリック。
僅かに躊躇した後、
「……ここ以外でも、報告されているだけで三箇所、魔族の姿が確認されている。
停石しているのは、目の前のアレも含めた魔族四体に囲われた区域だ。一匹どうにかした所で事態が好転するとは思えん」
「三箇所に、ですか……！？」
「四体も……！？」

マルトリックの言葉に、数十名の横列が一斉にどよめいた。
不安と、焦り。恐怖と、諦め。負の感情の入り混じった空気が爆発的に広がり、マルトリックの元へ押し寄せる。
マルトリックはざわめきの中から一つ一つの声を拾い、自身の部下の顔を一人一人思い浮かべた。
こうなる事は予想出来ていた。無理もない。相手は初めて目にする奇妙で未知な存在――魔族だ。しかも、この一匹だけではない。他にもこんな不気味な……出来れば一生お目にかかりたくない類の生き物が数体いるというのだから。
職業警察官。有事に備え日頃から鍛えている……と言っても、自分達の訓練はあくまで対人間用だ。この状況下で自分達は、一般市民とほとんど変わらない。怖気づくなという方が無理なのだろう。
しかし、それでも警察官の使命は一般市民を守る事にある。市民の盾となり、暗雲たちこめるこの状況を打開する為に動かなくてはならない。今、猶予がある内に現実を受け入れておかなければ、いざという時、狼狽え、怯え、絶望し、彼らは使い物にならなくなるだろう。果たせる命も果たせなくなる。たとえ僅かであっても、覚

悟を決める時間が必要だった。マルトリックは深く息を吸った。

「――余計な事を考えるな！！　己の使命に没頭しろ！！」

その一喝に、一帯の空気がビリビリと震えた。
数十名の思考を総て吹き飛ばす程の怒声。
瞬間、横列は再び静寂を取り戻す。

「……」

表面上は静かな彼らの葛藤の様子に視線を走らせた後、一度、深く目を閉じる。一寸後、開眼したマルトリック。その瞳は既に部下を憂う色を消し去っていた。再び前方を睨む。

「……しかし。魔族が人界――我々の前に姿を見せる日が来ようとは」

苦々しい顔のまま改めて、初めて目にする異種族を観察した。

魔族。
天使と同様に、人間が生きる場とは別の次元に生息している種族。
かつては、魔族も天使も人間も、同じ次元で共存していたという。
二種族が異なる次元に移り住んだのは、古に種族間で交わされた条約に基づいた行動によるものだ。
天使は天石の管理と、魔石収集を義務付けられた。
人間は天使の魔石収集に協力する事を義務付けられ、「禁術」と定められた魔石の使用を禁じられた。
魔族は、収集された魔石を総て返還する事を条件に、天使や人間の世界への出入りを禁じられた。

これが、世界の創造主である巨石を巡り太古より続いていた争いの果てに、それぞれの長達が取り交わした同盟。
世界に、永続的に共存する為結ばれた、平和条約。
学生の頃、歴史の時間に何度も聞かされた……大凡五千年前の話だ。
人界に散らばっている魔石を集める為に人間と協定を結んだ天使は、その後も己の次元――天界と、人間の住む次元――人界を行き来してきたが、魔族は条約の定める通り、己の次元――魔界に引っ込んでしまい、以後他界に姿を見せなくなってしまった。
魔族の存在と恐ろしさについては現在もなお、人界の至る所で語り継がれている。しかし、その姿は昔話や歴史、物語の中でしか見る事が出来なくなってしまった為、人間にとって魔族という存在は、空想の産物のような存在――いまや実在しているのかどうかすら怪しいと言われてしまう程、遠いものとなった。
時折世界のどこかで魔族が姿を見せた、だの、
魔族が隠れ住んでいる秘境がある、だの、
人間と結婚した魔族の話だの、
魔族の血を受け継いだ人間の話だのが、テレビで面白おかしく流れている位だ。
そんなこんなで、今や「空想の住人」と化している魔族が、こんなに近く――自分のすぐ目の前に、嘘のように実在していた。
困った事に、いざ目の辺りにしても魔族と対峙しているという実感がさっぱり湧いてこない。
しかし、こうして日常の象徴たる街並みが、たった数体の非常な存在によって雰囲気を一変させられているのは事実だ。
鮮やかな不自然に、理性がついていかずとも。
臭覚を刺激する血生臭い体臭と、淀んだ空気。
莫大な威圧感。
頭(りせい)よりも五感の方が素直に異変を感じ取っていて、これが現実である事を頭に必死に理解させようと、あらゆる感覚を総動員させて

事実を肯定付けようとしている。

「……おまけに、魔石――石化製品が一切、使えなくなる、か」

停石。

このような事態は、世界広しと言えど未だかつて聞いたことがない。

天使達は慌てふためき、現状を把握しようと、この辺り一帯を管轄としている上級天使ファーレンの持つ空部隊百人程が、先程まで上空を右往左往飛び回っていた。

ちなみにその頃、地元警察は全員、ファーレンの命で署内待機を強いられていた。

確かに、高速で動ける移動手段を失くし、電話も使えぬこの状況。あちらこちらへ闇雲に走り回っていては連絡の取りようも無い。

彼等がやれる事といったら、空部隊が戻ってくるまでの間、なんとか外回りや休暇をとっている仲間達を署へ呼び戻し体制を整えておく事だけで。実を言うとマルトリック自身、こんな日に久々の骨休み休暇をとってしまっていた、間の悪い人間の内の一人であった。

マルトリックの自宅へ自転車を転がしていた部下は、その道中、ショートカットする為に選んだ細い路で見事、お目当ての汗だくダルマと鉢合わせする。

停石状態となったその直後に、マルトリックは自宅を飛び出し、走って署に急行していたのだ。

普段、車通勤であったマルトリックは、「停石」の不便さを早速痛感していた。

決して歩けなくもない距離なのだが、日頃車内で何気なく目にしていた景色の流れの遅さが、日頃から短気な彼を苛付かせた。

加えて、混乱している人々の隙間を掻い潜る困難さ。

部下の自転車をかっぱらって署に着いた時、彼はヘトヘトだった。汗は滝のように流れ、乾ききった喉は潤いを求め、上手く息が出来ない。

それでも呼吸を整えながら、廊下を急いだ。

道中幾度も美味い茶を淹れる部下の顔を思い浮かべたのだが、目当ての姿どころか、人の気配が異様に少ない。

署内は既に蛻の殻だった。

残っていた上司から事の次第を告げられ、マルトリックは目を見開いた。

魔族が出たという。

しかも、一体だけではない。

彼が署に顔を出したその直後に、偵察から戻ってきた天使の報告によると、同じ形をしたモノが四体、停石という異常事態の起こっている街の西部を、取り囲むような位置で静止しているという。

署に残っていた僅かな人員はただちに報告にあったポイントへ移動を開始した。

マルトリックが唯一頭の上がらない上司、ニタバーニ・ゼネラック警視は第一ポイントへ。

同期入社の警部補二名は、既に第三・四ポイントへの移動を終え、周辺住民の避難を急がせているという。

マルトリックは再び部下の自転車に跨ると、自分の部下達が待機しているという第ニポイントへと急行した――

そこで、冒頭のシーンに繋がる。

状況から、この「停石」という非常事態は魔族が起こしたとみてほぼ間違いないだろう。

恐らく、報告にあった四体の魔族を追っ払うなり倒すなりすれば、この非常事態は解ける。

それは解っている。

しかし、自分達には攻撃手段がなかった。

所持している拳銃は歴とした石化製品だ。発砲できない拳銃なんて、ただのオモチャである。
いや。
その凶悪な魔力、凶暴な身体能力故に、古の大戦の時代から今日まで廃れる事なく語り継がれてきた魔族を相手に、拳銃――借り物の魔力である石化製品を唯一の武器とする人間の力が、果たしてどこまで通用するのだろうか。
大体、今拳銃を使える環境にあったとしても、上の命によりその場にただ足止めされるだけだろう。警察機関は完全なる縦社会。自分達のみで行動を取る事は決して許されない。

「我々に出来る事は、結局、ただ見ているだけか……」

高い検挙率を誇るベテラン刑事の、悔し気な呟き。
見上げたその、遥か上空では――

羽ばたきの音が幾重にも連なり、白い羽と共に降る。
白い衣を着た、二対の大きな翼を持つ人型種族が闇の空に集まっていた。
百人は居ようか。
その姿は一見「翼の生えた人間」だが、よくよく見てみると人間とは少し毛色が違う。
全体的に色素が薄く、彫りの深い顔が多い。
だが、彼ら一人一人が醸し出している存在感はどれも強大で、人間を軽く凌駕する力――威圧感があった。
天使である。
天使達が厳しい表情で見据えているのは、広い無人の道路に在る一つの黒い影だ。
影は微動だにせず、道路の真ん中に留まり続けている。その前方

は闇に包まれていたが、後方では外灯が煌々と光を灯していた。
影は、後方から差す弱い光を背に受けてそのシルエットを路に浮かび上がらせている。
それは――巨大な犬の頭だった。
成人の男が両手で輪を作った位の大きさがある。首から下は千切れていてそこに胴体は無い。毛は無く、むき出しのドス黒い皮膚中に暗い赤の筋が血管のように張り巡らされている。血のように赤い眼球は飛び出ていて、その瞳孔の色は濁った黄色だ。

「先程戻ってきた偵察部隊の報告によると……魔族の総数は五体。内四体は、停石した範囲を取り囲むように位置しています。
魔族の魔力はそれぞれ違います。
目の前のソレからは雷系の微弱な魔力を感知しました。
同様に、火、風、土系の弱い魔力を感知。
ただ……一体のみ、魔力の種類を判別できない魔族がいるのですが、この魔族は他の四体と外見が異なっています。しかも、他四体が持つ微弱なソレと比べると、能力不明の魔族の持つ魔力は桁違いです」

集団の間を掻い潜って飛んできた小麦色の短髪の細っこい男が、先頭に居た金の長髪の男――ファーレンに進言する。

「魔力が……流れているな」

立派な二対の純白を、悠然と動かす。
スッと通った鼻筋にかけられたメガネの奥から覗く切れ長の瞳の色は吸い込まれそうな程深い金。
透き通るような肌。長身のすらっとした体型。優美さを漂わせるその姿は、百人相当居る天使の中でも際立って美しい。
顔の造りが同じであるリチウムとの最大の違いは、髪や目などの

色の違いではなく、上品さの有無だといえるだろう。
ちなみに、クレープやリタルからクレンザー臭がすると顔を思いっきり顰められてしまう程の清掃オタクでもある。
ファーレンはこの地を管轄している上級天使であると同時に、警視長という肩書きを持つ。
上級天使は、割り当てられた管轄内の禁術封石を集める事を主な仕事とし、その力に応じて、相応の数の下級天使と管轄範囲を任され、地元警察を動かす権限を所持している。
つまり彼は、警察機関に所属している総ての人間を従える存在。トランの上司でもあるのだ。
腕を組んで宙に直立していたファーレンが僅かに浮かべた怪訝な表情に、

「はい。それぞれの魔族が発している微弱な魔力の流れはある一点に集中しています」

即座に反応した細い男が答えた。

「一点とは？」
「四体の魔族を囲んで出来る四角形の中心――この建物です」

細い男がファーレンに、ある写真を見せた。
写っているのは古い十一階建てのマンションだ。

「この建物の最上階――中央の部屋の一室に、魔力の流れが集中しています」

ファーレンの金の瞳が僅かに見開かれる。

「そうじゃないかとは思っていたんだが――」

「は？」

細い男の漏らした声に、しかしファーレンは答えず、再び眼下の魔族に視線を下ろす。

「……まぁ、我々の力はどうやってもあの魔族には届かん。魔族の作った結界外から仕掛けようと、放った魔力が結界内に入れば瞬く間に消失してしまう。

何よりお上から、魔族との戦闘は極力避けるよう言われているからな」

「では？」

「ここは黙って奴等を待とうじゃないか」

「奴等……とは？」

ファーレンは、そこで初めて細い男に一瞥くれると、ニヤっと笑んだ。

何かを企んでいるかのような、愉しんでいるような、そんな表情だった。

ファーレンのこういう顔を見るのは初めてで、細い男はより困惑した色を浮かべる。

時折吹き抜ける夜風に、後ろで一つに縛った艶やかな長髪を靡かせて。

腕を組んだ男は、気持ち良さそうに両の瞳を閉じた。

「もうすぐわかるよ」

風の音に吹き消されてしまうような小さな一言。

その遥か下方は、今まさに、ファーレンの言う「奴等」の存在に、人間達がざわめきだっている最中であった。

2

「――撤退しろとは？　どういう事ですか」

ダルマ型のシルエット。
マルトリック・ゲイザーの放つ、訝しげな視線の先にいるのはトランだ。

「ゼネラック警視の許可はとってます。
事は急を要します。
すぐに部隊を撤退させてください」

マルトリックの鋭い眼光を受け、それでも怯む事なく再度進言するトラン。
自分よりもやや低い位置にある険しい表情を、黒瞳が真っ直ぐに見る。

「質問の答えになってない。クイロ警部。撤退しろとは？
まさか。たったお一人でこの事態をなんとかするとでも言いはるつもりですか？」

初っ端こそ淡々と事務的な会話を繰り広げていた野太い声は今や怒声へと進化を遂げ、

「何か策があるとしても、それが上手くいく保証はありますか、保証は！　いつまでも学生気分で『すみませんできませんでした』じゃすまないんですよ！？」

唾を飛ばしながら、ものすごい剣幕でトランに詰め寄る。

叩き上げで伸し上がった……ノンキャリとしてはスピード出世の「警部」の地位は伊達ではない。
辛うじて言葉自体は丁寧なのだが、言葉の端々がまるで罵声のようにビリビリと響き、無関係なはずの周りの警官隊が震え上がる。

「保証はできません」

今にも噛み付きそうな相手の迫力に、真っ向から対峙するトラン。
それみたことか、と、憤怒の形相が剥き出しになり――すっかり鬼と成り果てたマルトリックが口を開くよりも先に、

「魔族は四体いたと思いますが。
その内、三体は始末しました。
この結果で、なんとか信じていただけないでしょうか」

静かに、そう告げたトラン。
事も無げに口にしたその言葉に、マルトリックの目が大きく見開かれる。

「〜まさか……！」

彼だけではない。身の丈サイズの頑丈な盾を持ち構えていた厳つい警官隊も一斉にどよめきだった。
上がる驚愕の声。周囲の反応にしかし、強い双黒の光は揺るがない。
沈黙したまま、ただマルトリックの了承を待つトランに、

「……石化製品が止まっている今、事実確認は出来ませんが、それは……確かな……」

驚きをそのままに、早口で言葉を続けるマルトリック。
先程の剣幕はすっかり鳴りを潜めている。
「はい。確かに消滅しました。これが――」
言って、トランは古びたコートのポケットから透明のビニール袋を取り出しマルトリックに差し出した。
手に取るまでも無い。透明なそれに入っていたのは、親指と人差し指とで丸を作った位の大きさの、赤と薄青、茶色に輝く三個の石――
「証拠になれば、と思い、持参しましたが」
――三つの魔石だ。
死した魔族の肉体は、この世から消滅してしまう。
が、彼らが持っていた魔力だけは消えずに結晶化してこの世に残る。
それを魔石という。
トランが持っていた魔石は、これ以上ないと言える程の証拠であった。
「〜……っ」
マルトリックは開きかけた口を……そのままに、息を呑む。
その直前まで、マルトリックの視線は「どうやって」とトランに問いかけていたが、
次の瞬間トランの背後に姿を現した人影に総ての気を根こそぎ持っていかれてしまったが為に、それを口にすることは叶わなかったのだ。

「〜だぁら。なんとかしてみせる、責任はコイツ一人で取るっつってんじゃねぇか。
いい加減聞き分けろよおっさん。いい歳こいて、ダダ捏ねてンじゃねぇぞ」

靴音と共に長身の影が闇の中からゆっくりとこちらに向かって歩いてくる。

「おまえは……っ」

やがて、魔族の後ろから差す光に照らされたその背格好は、実際に対面したことのないマルトリックでも一目で判る程知られた有名人であった。

流れる銀髪。
好戦的な青瞳。
非の打ち所のない程整った顔立ち。
すらりと伸びた手足。
マントを翻し歩く姿はどこか人間離れした雰囲気と、圧倒的な存在感を放っている。
そんな彼の脇には、黄緑色の長い髪を頭の上で二つに結い上げた子供。

「奴」については、これまで、いろいろな目撃証言や様々な噂を耳にしてきたが、
その総てに少しの相違も無かった事に、マルトリックはいささか驚き――おかしな話だが、妙に感心してしまった。
成程、これでは世間がおもしろおかしく騒ぎ立てるのも無理も無い。
まるで作り物のようなソレを、彼はこの時、初めて視界に入れた

のだ。

「リチウム・フォルツェンド、か……」

石化製品が使えなくなるという未だかつて無い非常事態に加え、魔族に続き、大盗賊までもが自分の前に姿を見せた。

全くなんて日だろうと、マルトリックは心の中で密かに舌打つ。

「リチウム」の名に、再び沸き起こる警官隊のざわめきを一喝してから、マルトリックは改めて、さも面倒臭いと言わんばかりに整った顔を歪ませているリチウムを……次いで、自分に向けられた真摯な眼差しを見た。

様子からして、この歳若くして自分と同じ階級を持つなんとも生意気な黒髪黒瞳の青年は、リチウムと通じているのであろう。

リチウムは、どういう訳か禁術封石だけを狙う大盗賊だ。

三体もの魔族を倒した、と言うのだから、ひょっとしたら目の前の青年も、持つことを禁止されている魔石――禁術封石を有しているのかもしれない。

……いや。十中八九、所持しているのだろう。

しかし、この眼差しはどうだ。

大盗賊が味方として姿を現すという、刑事にとっては最悪な状況下で、未だ自分に進言した時と変わらぬ、どこまでも真っ直ぐで力強い黒瞳で自分を射抜く。

そこには、自分等に対する後ろめたさなど微塵も感じられない。

「……クイロ警部」

「はい」

短い間。

だが、両者の間には恐ろしく重く濃厚な空気が流れた。

周囲の警官隊の何人かが、思わず息を呑む。
人も殺せそうな鋭い眼光で追いつめるその先にあるのは、やはり変わらぬ強靭の黒。

――この男の意思は、本物だ。
その光は意思と共に、少しも揺るがない。

「……先程、ご自身が口にした言葉を
決して忘れぬように」

突き刺さるような、強烈な視線。
トランが深く頷くのを見届けると、マルトリックは周囲に咆哮した。

「〜総員、退避だ！　署に戻るぞ！」

「トラン。返して、それ」

マルトリック・ゲイザー率いる警官隊が居なくなったのを見計らって近寄ってきたリタルが、トランを見上げて小さな手の平を伸ばす。

「あぁ、サンキュ。
おかげでなんとかゲイザー警部を説得できたよ」

リタルに、魔石の入ったビニール袋を渡すトラン。
そんな光景を横目に、リチウムが欠伸をする。

「何寝ぼけた事ぬかしてんだよ？　ダルマのおっさん退かしたのは、俺様の輝けるお言葉があったからだろ」
「しっかし、本当に居るもんねー。あんな、いかにもドラマに出てきそうな眉間に皺癖つけた、おっさん刑事っ」
感心したような表情でマルトリックが通っていった路を見遣るリタル。つられ、トランもそちらに視線を移す。
「ニタさんとは違って、一筋縄ではいかないのは予想出来てたけどね。……それにしちゃ、やけにあっさりひいてくれたけど」
「ま、今はいいけど、本当に恐いのは後々ね。いろいろと突っついてくるでしょう。……トラン。覚悟しといた方がいいんじゃない？」
言ってリタルが首を切る動作をしてみせると、トランが苦笑した。
ちなみに、先程見事にスルーされたリチウムは、二人の会話の間で「お～い」とか「こら～」とか小声でほざいていたりする。
「ま、なんとか頑張るよ……それよりも」
言葉を切って、正面に向き直るトラン。
「……また。判りやすい容姿してんわね。早めに対策練られて楽っちゃ楽だけど」
リタルも右手を腰に当て、挑戦的な視線を正面に投げた。
「残るザコは後一匹。
始めのは赤い目した炎系の魔力で、その次は茶色の目をした土系の魔力。
さっきのは薄い青の色をした目の風系の魔力を持った――全部、

おんなじ犬頭。
ンで今度のは……黄色の目、か。
これまでの流れからして今回も安直に考えると……雷系の魔力ってところかしら？」

いつの間にか彼女の右手で――指貫手袋の甲に取り付けられた石が黄緑色の光を放っている。
目を細め魔族を『観察』しつつ、ふふんと鼻で笑うリタル。
『魔眼』使用時のリタルの瞳は、あらゆるものを視覚で感知する事ができる。
人間の存在しない街（ゴーストタウン）。見慣れた光景が、人気がないというそれだけで全く別の顔を見せていた。
路の中央には犬頭魔族。それが放つ複合した魔力と。
はるか上空に、天使の気配。百人程。
肉眼では確認できぬ位置にいる為、リチウムとトランは気付いていないだろう。

そして。
別種の魔力によってコーティングされた雷の魔力が、現場からホームの辺りまで細く伸びている。

「――コイツの魔力もホームに流れてる」
「やっぱりか。ってことは、あの魔族を追っ払えば……」
「グレープは助かるって事だ。よーし。いけ！　子分ども！！」
いつのまにやってきたのか、二人の背後で踏ん反りがえって、ずびしぃっと魔族を指差すリチウムに、
『おまえがいけ！！』

怒れる二匹の怒りの咆哮が飛んだ。

3

ちなみに。
三体の魔族との決着は、それぞれ、やけにあっさりと――
というか、一瞬で付いた。
不意をついたモン勝ち、というか。先手必勝、というか。
そもそも魔族達にとって、リチウム等は有り得ない存在だったのだ。

「～いくわよ！！」

リタルが気合い一発、叫ぶと同時に左手を高々と上げる。
手の甲で輝きを放つエメラルドの石は『転位』の禁術封石だ。
文字通り、一度行った事のある場所ならどこへでも一瞬で転位する事が出来るという、一味が最も多用している魔石である。

これまで微動だにしなかった犬の頭はしかし、少女の掲げる碧光に大きく瞳を見開いた。
そう、それこそがまさに、彼ら魔族の「予想外」。
魔族が一体でも目標（グレープ）に魔力を流し続けている限り、ここら一帯は『魔石の発動が不可能な空間』だ。人間は勿論の事、魔族や天使にだってこの原理に当てはまらぬ者は存在しない。
……一例を除いて。
一例というのは無論、特定の属性――魔力を備えた自分達のことだ。
だというのに、その規定のど真ん中に位置しているはずの少女が、目の前で難なく魔石を発動させてみせた。

闇を裂く、エメラルドの光。
少女が持つ『転位』と『魔眼』の二つの石は主の意を叶える為に、シュオオオオ……と鳴き、その属性を示す光を煌々と放つ。
使いこなす彼女の属性がなんなのか――それこそが、不意打ちの種明かしだったのだが。気づいた魔族が瞬時に動くも……その反応はほんの一瞬だけ、だが、致命的に遅かった。

わざわざ声を張り上げ自身に注目させた後、魔石を使ってみせる。これには、攻撃とは別の意図があった。
相手に与えた刹那の脅威。生まれたほんの僅かな一瞬こそ、取り返しの付かない――魔族の致命傷となる。
次の瞬間、全身をおぞましい殺気が貫いた。自身が標的となった確かな証拠に、リタルが笑んだ。
確信した後、彼女はようやく集中を一部だけ解く。

「〜くらえ！！」

黄色眼の犬頭魔族がリタルへ攻撃するよりも一瞬早く、犬頭魔族の目前にトランが転位した。
発動するはずのない赤光が輝き、再び魔族の視界を思考ごと奪う。

トランが左手に嵌めている指輪の石の名は、『炎帝』。
炎属性の魔力を統べるとされている石だ。
トランが意思と共に左の拳を突き出すと、『炎帝』は瞬時に莫大な炎を生んだ。強烈な反動でトランの体が後退する。
どこまでも地を擦る革靴。手首を右手で支え、歯を食いしばり、踏ん張って衝撃をなんとか堪える。
彼が人の身で放った炎はもはや、爆発のそれに等しかった。
慌てた魔族が口腔から雷を帯びた一撃を放つが、爆熱はそれをあっさり飲み込んでさらに直進する。猛り狂う炎の勢いは衰えない。

総てを溶かす灼熱は、瞬く間に主の敵を襲った。
炎塊の接近と共に、皮膚の焼ける匂いを嗅ぎ、……それが、己の熱傷だとも気付かぬまま、瞬間。
魔族はなんの抵抗も許されずに、あっさりと炎に食われた。
纏う熱量だけで敵の生命を焼失させ、飲み込んでは敵の肉体を消滅させる。
地獄の業火。

「――！！」

赤に囲まれた中心――目が潰れてしまいそうな程暴力的な白光の中、塵が僅かに揺らぐ。
炎の中で、影が消失してゆくのが微かに見えた。
左手の拳を構えたまま、静まる炎を見つめる黒瞳。
やがて赤の隙間から、足元へ転がってきた黄色の欠片。トランはようやく構えを解くと、それに手を伸ばした。

「リタル」

背後に待機していた小さな少女に放り投げる。
黄色の欠片――魔石を片手でキャッチすると、少女は愛らしい容姿に似つかわしくないニヒルな笑みを浮かべた。

「ご苦労様」

答えた彼女の大きなエメラルドグリーンの瞳はしかし、トランを越えて、より奥を刺す。

「これでようやく」
「……本星のご登場ってか？」

リタルの後ろから悠然と歩いてきたリチウムが、腕組みしてトランの横に並ぶ。

――見抜いていたのか。

人間風情が――

響く低音。

やがて、トランの目の前――先程炎が燃え盛っていた辺りの空間が歪んだ。

4

グレープは小康状態を保っていた。
体に流れ込んでくる魔力の量が減少した為だ。
作戦通り、警察を宥めたリチウム達が魔族を倒している証拠だろう。
首尾は上々のようだ。

とはいえ、完全に抑えられた訳ではなく、未だにグレープの装着した石は暴走し、魔力の放出を続けている。
それによる代償――彼女の負担は大きかった。

『……さすがに、膨大な魔力を一気に消耗してるだけあって、石が小さくなってきてるわね』

蝋燭の仄かな明かりに照らされた横顔は冴えない。
苦しげに息つくグレープの様子をベットの傍らで見守っていたクレープが呟いた。

魔石は、魔力の結晶――魔力そのものであり、使えば勿論消費する。
しかし、人間が一度に放出できる魔力量は、天使や魔族のそれとは比べ物にならない程少ない。
よって、リチウムやリタル、トランが使う禁術封石の大きさにそれほど急激な変化はないのだが、グレープに至っては話が別だ。
魔石が暴走を続けて、三時間は経つ。
街に異変を齎している膨大な量の魔力は、今や、上空に巨大な渦を作り上げていた。
無意識とはいえ、それだけの量を放出し続けているのは、グレー

プだ。

『……あの小娘はともかくとして、あの男も勘がいいのよね』

呟きが溜息とともに、静寂に満ちた空間に波紋を生む。

リタルが、何かに気付くのは仕方が無い事だと思ってはいた。

まだ幼いとはいえ、あれだけ聡明な少女なのだ。

しかも、『魔眼』の所持者ときた。

この三ヶ月間、一緒に暮らしてきて――様々な事態に関与してきて、何も疑問に思わないはずがない。

単独で『元ロックの石』を調べていた事こそが、それを裏付けている。

彼女は気付き始めている。

加えて、リチウムも妙なところで勘が働く。

『……』

溜息をついた後、ふと、顔を上げたクレープの目に飛び込んできたのは、白いチェストの上に飾られた一枚の写真だった。

キャラクターもの（確か、最近グレープが好んで集めている『五郎』という名のクリオネを模ったキャラクターだ）の写真立ての中で、面倒臭げな表情のリチウムを中心に、リタル、トラン、グレープ、そしてなんと半透明の自分までもが笑顔を浮かべている。

リタルが細工を施した特殊なカメラだからこそ成し得た真似で、本来自分は写真に写る事は出来ない。

なにせ実体のないこの身。

本当なら自分は、人間の目に映る事もないのだ。

これは確か……トランが同居を始めて、その記念にと一枚撮ったものだった。

彼らと毎日をドタバタと生きて、丁度、三ヶ月。
平穏はなかった。
あらゆる意味で。
毎日なにかしら起こっていた。その度に、
怒ったり、笑ったり、泣いたり、喚いたり――
ここまで感情を剥き出しにさせた温度を、長い間生きてきた中で、
自分は知らない。
濃厚な日々。
錯覚させる空間。
たったの三ヶ月間が、やけに長く、色鮮やかで――
……やっぱり、あっという間だった。
手の平を、指の間をすり抜け、
零れ落ちてゆく――

――時間の問題なのかもしれない。
彼らが気付かずとも、
……気付かぬふりをしてくれても。
今回のように、周りが放っておいてはくれなくなる。

『……』

写真の中の一人一人を眺めていたクレープは、ある人物の顔に視線を止めた。
――トラン・クイロ。

『……トランちゃんは、ダイジョブそう』

フッと苦笑して、クレープがどこか憂いを帯びた表情を浮かべた。
黒い髪。黒い瞳の、真っ直ぐな青年。

あの男は、どう思うのだろう。

トランは、禁術封石に疎い。

宿敵リチウムにからかわれ、幼いリタルに呆れられても「ぐぅ」の音も出ない位に無知だ。

だが、彼は誰よりも純粋で、物事を真っ直ぐに受け止める。偏見を持たない。

加えて、頑固なまでに意思が強い。

極め付けがあの『炎帝』の所持者である事実。

その事だけでも、彼の人柄は察して知れる。

属性が同じなだけでは、あそこまで自在に魔力を発動させる事は出来ない。

石は、人を選ぶのだ。

……『死球』は、まぁ別としても。

『転位』と『魔眼』が、人間としての強さを強く望み、強く在る為にはどんな努力も惜しまない少女――賢く、器用（ある意味で不器用丸出しなのだが）な人間、リタルを選んだように、トランは『炎帝』に選ばれた。

使い込んでいく内に、石との相性は徐々に良くなっていくのだけども。

トランはきっと、最初から合っていたんだろう。

彼は石を多用しない。

……のわりに、あれだけ『炎帝』の魔力を使いこなせるまでに『炎帝』と馴染んでいる。それが証拠だ。

きっと先日の事件で、天界にトランたちの事は知れ渡っているだろう。

魔族達が、リチウムの存在に驚くのと同じように、

天界にとっての一番の驚異はトランの存在かもしれない。

でも、どれだけお空の上で騒がれようが、トランちゃんは結局ト

ランちゃんなんだろうな……。
思い浮かべては、「くっくっく」と愉快に笑みを漏らす。

どこまでも単純で、柔軟な思考。
真っ直ぐな眼差し。
意思の強い男。
いささか頭の回転の鈍い所にも好感が持てる。
それが、いままでクレープが見てきたトランという人間だった。

ふと、浮かべていた笑みが消える。
……総てを知った時。
彼は何を考え、どう接してくるのだろう。

きっと、自分は
あの真っ直ぐな眼差しが　一番恐い。
だが、

『トランちゃんは、きっと、ダイジョブそう』

……それ以上に、信じたい。
少しずつ褪せてゆく時間を振り返る事を止め。

『……ねぇ、
アンタは、どうするつもり？』

クレープは、呟くとグレープに向き直った。

覗き込んで、半透明の手をグレープの頬に重ねてみる。
同じ輪郭。
同じ瞳。

同じ肢体。
ここまで一緒なのに、髪の色だけが違う。

出会ったのは、半年前。
だがクレープは、昔からこの少女の存在を知っている。

――お世辞にも、彼女（グレープ）が歩いてきた道は幸せとは言えなかった。
何もかもが褪せる無機質な日々。
彼女は、昔から他人に遠慮して、どこまでも笑わないコだった――
と、

――薄っすらと、
閉ざされていた瞳が開かれてゆく。

「……クレープ、さ……？」

僅かに驚き見開かれた瞳に、かかる鈴の音。
クレープの姿を捉えると、グレープは自分の頬に重ねられていた
半透明の手に、触れ……ようとして、その手を重ねた。
その仕種を、
心配そうに自分を見上げる同じルビーの瞳を、
未だ、苦悶に歪む顔を、
クレープは、至極冷静に見下ろしていた。

『……アンタは嫌がりそうだけど。
アンタが動かない限り、もうみんなを護れない』

グレープは驚く。
半年間いつも一緒に居て。
どんな時でも明るく、楽し気に振舞う、自分と同じ顔をした少女。

そんな、見ているだけで元気になれる少女の浮かべる、無の表情に――

『けど、アンタが思い出したら。
きっともう、一緒には居られなくなる』

――向けられた瞳の奥の冷たい光に、グレープは戸惑いの表情を見せた。

「……？」
『それでもその時が来れば、事態は好転するのかな。
それとも……』

柔らかなウェーブを描く金の長い髪が、サラリと揺れる。
窓の外に視線を投げたクレープ。
整った横顔。
いつになく厳しい表情は皮肉なことに、より美しさを際立てている。

「……クレープさん……？」

闇の中。
自分と同じ色の瞳は、どこか、遠くを見ていた。

『……一体どうなる事やら。
アタシにもわかんない。
予想もつかない。
知っているのは……アイツだけなのカモ。
……悔しいけどね』

5

「……」

未だ地で燻る小さな火の上に、首の引きちぎられた黒い獣の胴体が音も無く降り立つ。
それは大型犬並みの大きさで、スマートな肉体に不気味な赤の筋が血管のように張り巡らされている。

「四つの頭の持ち主、か」

そのまんまだな、と呟くトランに隙は無い。
その間、僅か二、三メートル。
首無し黒獣の真正面に位置している彼は腰を低く落とし、いつでも動けるよう備えている。

「ようやくお出ましね。
高みの見物は楽しかったかしら？」

トラン、リチウムのさらに後方から響く、場違いに感じる程甲高い声。
魔族と十分な距離を保って、細腰に両手を当てたリタルが、大きな目を細くして首無し黒獣を睨んでいる。

「まぁ、それなりに愉しませてもらったよ。
我も長く生きてきたが、今日程、脅威で満ちた日はなかった」

首無し黒獣が、濁った声を発する。
一体体内のどの箇所を震わせて音を発しているのだろうか。

体の構造、性質、何もかもが違う人間には、到底把握しえない。
「我等と人間の……しかも子供ときた。
これだけ器用な存在が居るというものも実に予想外だ」

ピクっと。
不愉快そうに、薄い眉を顰めるリタル。
構わず、首の無い胴体は言葉を続ける。

「我も、これまでただ頭を破壊させていた訳ではない。
この場は今や、魔力が使えぬ無の空間。
おまえ達人間が一体どんな仕掛けで魔力を――我々の力を行使しているのかと思ってね。少し、眺めていたのだよ。
そうしたら」

首無し黒獣は、一旦言葉をきると、
その姿を、歪ませた。

『！』

対峙していた二人の男の前で、その黒い姿が消失する。

「どこへ……！」
「～リタル！！」

瞬時に反応しそちらへ駆けるリチウム。
バリトンに反応したリタルが動こうとするが、それよりも早く、
目の前に黒い影が現れた。

「きゃ……！」

短い叫びと、ドサッという、何かが地に倒れる音。
振り返ったトランが目にしたものは、黒い塊に押し倒され仰向けに倒れたリタルの姿だった。

「リタル！！」

叫んで、トランもダッシュをかける。
すでに射程距離内に入ったリチウムが手を翳す。

「〜死球（デスボール）！」

左手の甲――白い皮のグローブに装着していた漆黒の禁術封石が反応を示し、リチウムの翳した手の平から闇が生まれる。
黒い光球は瞬く間に膨張し、駆けているリチウムよりも早く目前の敵に到達する――
はずだった。

「……」

黒獣は振り返る事もなく。

「……！」

発動しかけた死球は、その姿を掻き消された。

「……な……っ」

目を見開いたリチウム。
次いで炎帝を発動させようと拳を構えていたトランの動きが止ま

る。

「く……っ」

唇を噛むリタル。

身体に食い込む爪先。見かけよりも大分強靭な力で自分を押さえつける敵を睨むが、

「集中力を殺げば、制御もままならぬ、か……」

首無し黒獣は悠然とした態度で少女の僅かな抵抗を見下ろした。

「〜くそ……っ」

急行するリチウムが、小さく舌打ちした。

敵にとって今、一番厄介な存在はリタルだ。

手の内が知られた今、彼女が狙われるのは当然の成り行きだった。

そして、敵が『転位』を使える可能性だって決してゼロではなかった。

敵の能力が判明していない今、リタルの傍を、離れてはいけなかったのだ。

なんで、そこまで読めなかったのか。

――一瞬リチウムの脳裏を、蒼い髪と赤い瞳の少女の苦悶の表情がよぎる。

……焦りで思考が麻痺していたとでもいうのか。

己の至らなさを責め抜き、足に鞭打って懸命に動かす。

――間に合うか。

赤黒い血管のようなものが幾筋も走った黒獣の足はグロテスクで、剥き出しの……見るからに不潔そうな太い釣鐘型の爪がリタルの薄い肉に食い込んでくる。

「所詮。人間の血の成す事」

言葉と共に黒獣が片方の前足を上げる。胴体を支える三本の足の爪がさらに、ずぶり、と小さな体に食い込んだ。

「……ぅ……！」

全身へと流れる痛覚にたまらずリタルは顔を顰める。
僅かに呻き、逸らしたその首目掛けて、黒獣は掲げた腕を振り下ろした。

「おまえと我は同類のようだが、力量……出力は比べるまでもなかったな」

足の爪の一本一本が、瞬時に変化し何倍という大きさの鎌となる。
鋭利な刃が風を裂く、僅かな音が迫る――その刹那。

「……同類、ですって？」

少女の小さな呟きを黒獣は耳にしていた。
己を貫くエメラルドの奥には、はっきりと、怒りの色が見られる。

「～人をあんたみたいな……っ」

既にリタルは、唯一黒獣の束縛から逃れた左腕を自身の細い太腿

に伸ばしていた。
即座にスカートの下に装着していたホルダーから銀色に光る細身の銃を取り出すや否や、
「あんたみたいなグロテスク魔族と同じにすんな……っ！」
僅かに身を捻り、叫ぶと同時に、発砲。
乾いた銃声と共に、黒獣の脇腹辺りを焼ける異物が貫通する。
「……！」
なおも執拗に連射するリタルの銃弾が、自身の首上――僅か数十センチの所まで迫っていた黒獣の足の付け根で幾度も爆ぜた。
足の一本が、薙ぎ払われる。
堪らず黒い獣が跳躍し、ついに小さな体から離れた。
「リタル！」
リタルが力無く銃身を下ろし一息つくと、そこへようやくトランとリチウムが走り寄ってきた。
トランがリタルを助け起こす。
彼女を庇うようにして前に立ったリチウム。
「無事か」
リチウムが背中で問うと、
「……もちろんよ」
トランの手から離れ、体勢を立て直すリタル。

血と泥で汚れた衣服。
白いポンチョを着ていたので出血はより際立ち、鮮明に映る。
が、怯んだ様子もなく、リタルは、銃を手にはっきりと答えた。
「〜今発砲したのは――我等の魔力か。……そんな小道具を持っていようとは」

驚きを露に声に出す首無し黒獣。
黒獣は十分な距離を保ち、自分達と対峙していた。
「……正確には、あんたのじゃないんでしょう？
あの、四つの頭総てに付いてたカラフルな目ン玉は」

会話に応じながらもリタルの目は注意深く黒獣を観察していた。
銃弾は確かに、脇腹を貫通した。
失くした足は、リタル達の数十メートル先に落ち、未だ激しくビクンビクンと脈打っている。
――痛覚をコントロールできるのか？
見た限りでは、どちらの傷も致命的なダメージを与えるまでには至らなかったようだ。
黒獣の変わらぬ様子に、リタルは内心舌打ちする。
「融合なんて一体どこでしてきたのかしらないけれど、さっきの弾は他の魔力……あんたよりも弱い別種の魔力だったわ」

吐き捨てるようにリタルが声を上げる。
そう。
今リタルが手にしている銀色の細身の銃。
込められている弾丸は、魔力の欠片――魔石である。
先程、トランが彼女に返却した三つの魔石も総てこの中だ。

「ついでに一つ教えといてあげる。
この銃はね。魔力だけじゃなく、魔石そのものを発砲する事も出来るの。　固形のままだし、固形物発射時は魔力を使わない仕組みで動いてるから、この『魔力の流れを止める』空間内でも使用可能。
ちなみに、どんな固形物だってセット可能な優秀な銃よ。
だから。今みたいにあたしのふいを付いて直接攻撃したって無駄。あたしが空間をコントロールできなくたって、この銃が使えなくなる事は無い。
ちなみに今ので解ったと思うけど、当たれば結構痛いわよ。なんてったって魔力の塊なんだから」
「おまえに攻撃手段は無いと思っていたが……」
「そうね。決して同類ではないけど。あんたとあたしは同じ属性のようだわ。それはすぐに解った。
だって。この状況下において、魔力放出、しかも他者に魔力を送り続けるだなんて真似、同じ属性じゃなきゃ不可能だもの。
……とことん嫌だけど」

顔を限界まで顰め、吐き捨てるリタル。

「リタルの属性って？　『転位』か？」

先程の魔族の瞬間移動――「転位」を思い出し、眉を顰めてトランが訊くと、

「違うわ。『転位』は属性じゃない。
ちなみに『転位』も『魔眼』も同じ属性よ。トラン。
……っていうか。あんた。ここにくる前、作戦会議の段階で簡単にだけど説明したはずよね？　あたしの属性」

ジロリと、リタルが睨む。
ばつが悪そうにトランが苦笑した。
「……すまん。実はよく理解できてなかった」
トランの言葉を受け、大きく……これ見よがしに溜息を吐くリタル。
肩を揺らして「くっくっく」と笑いを堪えるリチウムの姿が視界に入り、トランは赤面しつつも憮然とした表情になる。
「んなこったろうとは思ったけど」
自身の額に手を置き、頭を軽く二、三振ると、リタルはそのまま数秒静止していたが、
「あたしの属性は、『空間』よ」
感情の切り替えが早いのが特技。
リタルは口を開いた。
「……それはさっきも」
「多分知らないだろうから付け加えとくけど、魔石の色は属性を示しているの。
『転位』も『魔眼』も緑系の色してるでしょ。これらは、空間を支配する……言うなれば空間操作の魔石。一定空間になんだかの変化を施したり操ったり……その他もろもろね。
他にもいろんな属性の魔石があると思うわ。
例えば……他の属性の色をした『転位』の魔石も、『魔眼』とかも」
「ひとつじゃないのか？」

「実際にお目にかかった事はないから、想像の域を出ないけどね。
ま、かくいうあたしも、今回の停石状態に陥るまでは意識してなかったけど。自分の属性なんて」
「なんせ今まで手に入れた魔石は、魔眼でざっと見しただけでロクに調べもせずに手当たり次第試してた位だし」などと呟きつつ、ペロっと舌を出すリタル。
「なら、この状態――停石した空間でも俺たちが魔石を使える事や、さっきのリチウムの死球が消えた理由ってのも……」
「だから、それを随分前から言って聞かせてるんじゃないの。
このあたしが、操ってるの。
グレープが暴走させてるおかげで今大気に腐るほど満ちている『魔力の流れを止める石』の魔力を。
遠隔操作、みたいなのって言えば、わかってもらえる？」
「遠隔操作……そうか」

トランは、いつかの少年が『炎帝』を発動させてしまった日の事を思い出す。
その時『炎帝』は、持ち主である少年よりも少し離れた場所に居たトランの意思を汲み、その能力を発動させたのだ。

「『魔力の流れを止める石』も空間操作の属性の魔石だから、あたしの属性。
固形――結晶じゃなくても、これほど濃密な気体なら、横から掠め取るみたいに関与する事は可能みたい」
総ての石と相性が悪いと思われるグレープの放出魔力を、属性が同じであるリタルが操作出来るというのも納得がいく。
「……けど、さすがに疲労が激しい。
暴走してるだけあって、辺り一帯魔力がしっちゃかめっちゃかに

暴流してるし。完璧には抑えられない。
一定空間しか暴走魔力を止める事はできなきゃ、さっきみたいに不意打ちされたんじゃ遠隔操作の集中力も切れる……あぁ、もう、グレープ。後でシバく」
「〜リタル。グレープちゃんは無自覚な上、苦しんでる。不可抗力なんだから」
完全に据わってしまった目。覗（エメラルド）き込んだトランは落ち着け、と湯気の出ているリタルの頭に手を置いた。
溜息とともに、ふしゅるるる……と、湯気が散ってゆく。
「……まぁ、とりあえずそういうわけよ。とにかくあたしが、一区間は、グレープの暴走を抑える。
だから、あんたたちは早くあそこのグロテスク魔族をなんとかしなさい」
気を取り直し、改めてリタルが強い光の灯った碧眼で正面を睨んだ。
「グロテスク魔族の属性が空間操作だって判ったってだけで、どんな能力を持っているのかは未だ判明してないけど。そこは大した問題じゃないでしょう？　どんな能力を持ってたって、
今からぶち倒す事にかわりはないんだから」
リタルが言い放った強い言葉に、男二人の返事はなかった。
代わりに、言葉尻を合図にして、二人が疾走する。
その先には――頭部の無い黒い獣、一体。
瞬時に間合いを詰めると、先行したトランが集中を解き放った。
「――いっけぇえ！！」

膨大な熱量。
身の丈サイズの炎柱が飛び出す。
反動でトランの体が僅かに後退する。
その横をすり抜けて――

「～死球！」

膨張した闇が、盛る炎を追走する。
二つの巨大な塊は一直線に黒い獣を目指し、加速、加速、加速……さらに加速。
瞬く間に、黒い獣は膨れ上がった熱と、それすら消し去ろうと迫る闇に飲み込まれる。
……が、どうだろう。
結果に叫んだのは、リチウム達の方だった。

「……！」
「……なん、だと！？」
「うそ……」

三者三様の声が重なる。
三人の視線の先には、変わらぬ首なし黒獣の姿。
数秒前と、何も変化はない。
そう、術を発動する前と。
衝撃は届かなかった。というより、あれだけの魔力が、黒い獣に届くその瞬間、宙に吸引されたかのように縮小し、消え失せてしまったのだ。
先程のように、リタルが周りの空間に作用させている、その集中を解いた訳でもない。

「……！」

瞬時に灯る右手の淡い光――『魔眼』を発動させるリタル。

彼女の目に映る世界が、一変する。

『魔力の流れを止める石』の遠隔操作と平行して行う『魔眼』。

事が起こってから連発しているマルチジョブは小さな彼女の精神、肉体にも多大な不可を齎している。

……が、そんな事に構ってはいられない。

――うわぁ、すごいですすごいですっ

みてください、リタルさん！！――

一瞬、白くなりかけた脳裏に、今朝の光景が――

渡されたグローブを使って掃除しているグレープの細い背が見えた。

彼女はとても興奮していたようで、陶磁器のような肌――頬を、子供のように赤らめて、まるで、クリスマスにサンタさんがプレゼント持ってやってきた、ばりの喜びようで、石化製品を使う度にリタルを呼んでは無邪気にはしゃいでいた。

その度に。

両手を腰に、盛大な溜息をつきながら、それでも横目で彼女の嬉々とした様子を眺めて――

……そう。

しっちゃかめっちゃかに体内に……自分の属性でもない魔力（いぶつ）を数種、盛大に送り込まれていたグレープは、きっと。

死ぬより辛かったはずだから。

流れる大量の汗。

眉間に皺を寄せつつ、リタルはざっと周囲に視線を躍らせた。

が、先程放った『死球』と『炎帝』の魔力はどこにも検出されない。
――それどころか。
「グレープへ魔力を送るのを……止めてる……？」
いつから。……いや、そんなことよりも。
何故、今。
これでは説明がつかないではないか。

「……何しやがった？」

リチウムが問う。
なんとも嫌な予感が、頬に流れる汗と共に伝う。
リチウムの予感を肯定づけるかのように、黒い首無し獣は笑い声をあげた。

「試しに、もう一度放ってみたらどうだ？」

言うや否や、駆け、一気に間合いを詰めると黒獣はリチウムに飛び掛った。
リチウムの視界を覆う影。

「……っ」

翻る漆赤のマント。流れる銀髪。
数倍の大きさに巨大化した太く鋭い爪を寸ででかわすと、振り返りざまに廻し蹴りを放つリチウム。
が、そこに黒獣の姿はなかった。

「く……っ」

転位した黒獣は、トランの真後ろに現れる。

「～ボサッとしてんなトラン！！」

叫べば、そちらへ駆け出すリチウム。

反応したトランが飛び掛ってきた黒獣の爪を屈んでかわすと、

「～なめんな……っ！」

無理な体勢のまま黒獣へ向かって左手の甲を突き出した。

瞬時に灯る、赤い光。

黒獣の腹の下。至近距離で、『炎帝』が炸裂する！

が、

「……！」

『炎帝』の炎は、獣の胴体に吸引されるかのように急速に小さくなり、消失してしまう。

黒獣は何事もなかったかのように地に降り立つと、炎帝の威力で吹っ飛んでいたトランに再度飛び掛った。

地を転がり避けるトランに、なおも襲い掛かる太い鋭爪の先。

が、

「トラン！」

甲高い叫びと共に、トランの体が緑の光に包まれ、消える。

爪は、古びたコートの端を僅かに裂いたのみにとどまった。

トランは、リタルのすぐ隣にその姿を現す。

「〜うあ……！？」

が、リタルの横と言っても、寝転がった体勢のまま宙に現れたのだからたまらない。

体を包んでいた緑色の光が消え去ると同時に落下し、アスファルトの地にしたたかに体を打ち付けてしまった。

「なんとか無事でよかったわ……」

「〜無事じゃない……」

ふぅと額を拭うリタルに、痛みを堪えて起き上がるトランのジト目が突き刺さる。

「まぁ。細かいことは置いといて。

トラン。あんた、いますぐグレープの所に戻りなさい」

繰り広げられているリチウムと黒獣の肉弾戦から視線を逸さぬまま、リタルが左手を上げた。

再び主人の意に応えようと、緑の淡い光が反応を示す。

「は？　なんで……！？」

「悪いけど。説明してる時間は無い。訳はあっちで視て。

それと、これ……」

言ってリタルは、着込んでいた白いポンチョ……先程魔族に襲われた際ひどく汚れてしまっていたが……の中に右手を入れると、銀色の筒状の金属を取り出してトランに放った。

拳を二つ、くっ付けたくらいの長さがある。

「なんだよ、これ？」

「試作品二号ちゃんよ。それでいろいろ試してみて」

「試してって……何を」

「いい？　トラン」

言って、リタルは視線だけをトランに寄こした。

エメラルドグリーンの光が放つ強さ。

早急に、自分に何かを伝えようとしている。

察して押し黙るトラン。

「あんたの『炎帝』。多分……ただの禁術封石じゃないと思う。

過去、くすねてイロイロ調べてみたんだけど……」

「くすねてたんかい」

「子供の純粋な好奇心の成せる技よ。大目に見なさい。

とにかく、イロイロ調べてたんだけど、あんたの『炎帝』はあたしやリチウムの石とはどこかが違う。

なんていうか、質が違うというか、毛色が違うというか。上手くは言えないけど、とにかくなんか違うのよ。

あんたは考えるの苦手でしょうけどそれでも……改めて考えてみて。『炎帝』の属性。

……無論、火である事に違いはないんだけど。単に炎を放つだけが能じゃないかもしれない。

……状況を、打破出来るかも知れない」

「……」

リタルは、トランの真摯な表情を改めて見る。

そこには、あの見るからに頑固者のマルトリック・ゲイザーをも動かす、真っ直ぐな意志が宿っていた。

自分は今、相当の無茶を言っている。
認めよう、自分は魔族を侮りすぎていた。
目の前の魔族は、そう簡単には倒せない。
そして先程魔眼で確認した不可思議な現状と、移動する数種の魔力反応。
この分ではグレープの元は修羅場と化している事だろう。
しかし今の自分に、グレープたちをフォローする余裕は無い。
トランが行った所で、状況は変わらないだろう。
だが――今この胸に抱くのは絶望だけでは決してない。
この男程、無条件に信用の置ける人物はいないだろう。

「……ンじゃ。
頑張って護るのよ。
援護は出来ないけど、成功祈ってる」

リタルがそこまで告げると、掲げた緑の光は膨張した。
頷いたトランの真剣な表情が視界から消える。

「……本当に。しっかりすんのよトラン。
あんたが惚れてる女は、もしかしたら」

強い眼差しは、そこまで呟くと一瞬陰り。
リタルは、トランの居た場所から視線を落すと、そのまま俯く。
その姿――表情は、歳相応の子供のものだった。
どこか不安げな、頼りなさげな、何かに怯えているような。
普段の強さ、頼もしさは微塵にも感じられない。

が、次の瞬間。
顔を上げた彼女の表情は、いつもの勝気なソレだ。

うん、と頷けば、戦いの場へ、自分も駆け出す。

「リチウム！　援護するわ」

1

トランという対象を失った三本足の黒獣は、後方から迫ってきていた足蹴りを避けると、その新たな目標に速攻を仕掛けてきた。
腹部に体当たりを受けたリチウムは大きくよろめく。そのまま黒獣に圧し掛かられアスファルトの道路に仰向けに倒れてしまった。
衝撃に思わず瞑ってしまった青眼を瞬時に見開けば、視界一面に黒い塊――濃く薄く太く細く。毒々しい赤の線が血管のようにびっしりと張り巡らされた闇が広がっていた。生々しく異様なコントラスト。首の千切れた残虐な切断面が醸し出す濃厚な「死」の匂いにリチウムは顔を顰めた。その姿はいよいよ死刑執行人を思わせる。
頭上より鋭利な鎌首――太爪が今、リチウムの胸を抉ろうと目前に迫り――

「……っ」

リチウムは腰を曲げ両足を黒獣の腹下に滑り込ませた。後ろ足だけで立っていた黒獣の腹に両足を付け、全身をバネにして蹴り上げる。
が、大したダメージもなかったか、即座に体勢を整えるとすぐさま飛び掛ってきた黒獣をリチウムはさらに横に跳んで避ける。受身をとって転がった先は歩道。追ってくる黒獣に対し、立ち上がったリチウムは外灯に左手を付けた状態で向き直った。
その左手から漏れる、黒い霧。
『死球』を手の中で発動し、外灯を折る。
外灯――巨大な鉄の棒を両手で持ったリチウムは、全身を使ってフルスイング。頭上に迫った黒獣を横殴りに叩く。勢い任せに外灯から手を離すと程なくして派手な音と、軽い地響きを立てて少し離れた位置に鉄の棒が転がった。

人体に行えば肋骨がイカれる、どころでは済まない攻撃。それでも、宙で身をくねらせ、なんとか外灯の下敷きとなるのを逃れた黒獣。が、衝撃で外灯の先端が割れた際、飛び散ったガラスの破片を全身にモロに浴びたようで、起き上がった黒い身体――その至る所に、後方に建つ外灯の光を受けて反射するガラスの僅かな輝きと、出血が見られる。

俊敏な敵の動作が一時的に止まった。これを見逃すリチウムではない。

『死球』が効かない（というか、届かない）相手に有効な、リチウムの最大の武器は、その百八十八センチという長身にも関わらず超人並みに軽いフットワークだ。

全力疾走して勢いづけると、アパートの壁に足を掛け高く跳躍する。

落下する長い足は僅かによろけている黒い獣を完全に捕らえていた。

が、目標はすぐさま反応する。

転位し一瞬で場から消失した黒獣が、着地し無理な体勢のリチウムの目前――宙に現れた。

全身に黒い塊の血液を浴びる。

状況を把握する間も与えまいと、即座に繰り出される太い爪。

「〜しつっけぇ……っ」

ボヤき、抜群の反射神経で相手の凶器を交わすリチウム。

リチウムはそのまま身を翻すと、何も無い自身の背後へ廻し蹴りを放つ。

と、

「ぐ……！」

丁度足を放った所に転位してきた黒獣の腹部に直撃した。
黒い塊はアスファルトに転々と躰を打ちつけながら転がった。と、その先に並ぶ建物の一歩手前で、それはようやく止まる。

「頭が無いんじゃあ攻撃手段も限られる。行動がパターン化しちまって、折角の敏捷性も意味無ぇわな」

体勢を整えるリチウム。
頬や腕、脚……あちこちを伝う生暖かい感触。自覚すると同時に痛覚が、リチウムの全身に広がった。
一体いつやられたのか、全く見当がつかなかった。
舌打ちして、頬を流れる鮮血と汗を共にぐいっと拭う。
そこへ、聞こえてくる濁った声。

「成程。一理あるな……」

少し離れた位置まで飛ばされていた黒獣はしかし、何事もなかったかのように体を起こしリチウムに対峙した。

「……」

暴れる鼓動、上がる息を無理やり抑え、整えながら。
リチウムは眉を潜めた。
先程から、リチウムの体術は悉く黒獣を打っていた。
黒獣の動きは確かに速い。肉眼で捉えられない程だ。大型犬並みの胴体の動きはしかし、猫科の肉食獣が獲物を狙うように凶悪にしなやかで、俊敏だ。
加えて『転位』の能力は厄介だった。
最初の内は、何処から繰り出されるか判らぬ攻撃に対し、慎重に対峙していたリチウム。なかなか攻勢に移れずにいた。

が……奴には頭部が無いのだ。
犬型の黒獣にとって、恐らく最大の攻撃であろう、噛み砕く事が出来ないのである。
したがって、攻撃手段は「爪で裂く」か「体当たり」のどちらかに限定される。
しかも、黒獣の纏っている異質なオーラと微かな殺気を感じ取る事で、比較的、出現場所の予測は楽だった。
尤も、予想がつくからと言って迎撃出来るとは限らない。
例えば『魔眼』を使えるリタルなら、黒獣の動きを捉える事など訳ないだろう。が、視えていたって黒獣のスピードに身体がついていけなければ意味がないのだ。
これまで黒獣を相手に互角以上の戦いを繰り広げているリチウムは全く超人的な反射神経の持ち主だと言える。しかし、リチウムは特に戦い慣れしているという訳ではない。繰り出す一撃一撃の与えるダメージは致命傷には遠く及ばないものばかりだろう。
それでも、数えるのも馬鹿馬鹿しくなる程の数だけ、リチウムは黒獣の体を吹っ飛ばしていた。
実際、その濁った黒の躰はあちこちが負傷、出血し、僅かながらふらついているようにも見受けられる。
だが。
これだけ一方的にやられている中で、黒獣は微塵の動揺も見せない。
焦燥や狼狽もない。
疲労。緊張感すらない。
……というより、今この状況でもどこか余裕が見られる。
奴には痛覚が無いというのか。
それとも……
そう、考えを巡らせていた時だった。
「……なに……？」

小さく呻いたのはリチウムの方だった。
変化があまりにも唐突に起こった為だ。

「……」

――身体が、動かない。
首、腕、脚、指の一本まで。まるで自分の物では無いかのように、芯まで完璧に凍り付いてしまった。
総ての神経を絶たれてしまったかのよう。僅かな振動さえ起こすことが出来ない。
一瞬で身体の動かし方を忘れてしまったのではないかと疑わせるほどに、肉体は微動だにしなかった。
辛うじて動くのは、顔――目や瞼、口だけだ。

「忠告に従い、主旨を変えよう」

黒獣の濁った音が随分近くで響いた。
目前に迫るその太い爪は今度こそ、左上から右下へ。
リチウムの胸を一閃した。

「……っ」

血の飛沫と、声の無い短い叫び。
しかし抉られた傷は、内臓に到達する程深いものではなかった。
生きている事を不思議に感じる暇もなく、さらに左頬を一閃。

「く……っ」

動かない首。衝撃を総て受け入れるしかなかった。

苦痛に歪む青い瞳が相手を睨みつける。

「嬲り殺す事にしよう」

冷酷な声に「なるほど」と納得すると同時に、さらなる疑問がリチウムを襲う。

が、すぐさま次の一閃が走った。

腹、腕、脚。

抉る度に短い叫びと出血が飛び散り、黒い獣を濡らす。

執拗に鋭利な爪が通い、衣服――特に白いシャツはボロボロになってしまった。どす黒い赤に染められた生地はずたずたに切り裂かれ、もはや肩口に引っ掛けている状態だった。

整った顔を歪ませ荒い息をつく男は今やサンドバックよりも上等な的だ。しなやかに筋肉を纏った総身で、衝撃を逃がさず総てを受け止め忠実に苦悶の声を漏らす。

……いや。

微かに生じた違和感に、黒い獣が飛びのいた。

「……ちっ」

息を乱したまま、己の血に染まった男が小さく舌打ちする。

いつの間にか。リチウムの身体を覆うように薄い闇のベールが存在していた。

気づかず黒い獣が身体を嬲っていたらその手は瞬時に消失していただろう。

「『死球』……まだ使うか」

リチウムの左手で煌々と輝く闇を目にし、黒獣は僅かに驚異の入り混じった声で呟く。

どの傷も致命傷ではない。が、そのどれもがかすり傷とは異なる。抉った際に飛び散った、また身体を伝って歩道に落ちる夥しい出血量がそれを物語っていた。

全身を刻まれ、それでもまだ強力な魔石を操る集中力があろうとは。

そこで――黒獣は、自身を貫く鋭い青の眼光にようやく気づいた。

――この位ではこの人間は死なない。

諦めない。

自分が、この人間をどこまで甘く見ていたか――その愚かさを痛感させるには十分な光だった。

リチウムの目の前の空気が僅かにぶれる。

と、自らを覆うようにして作った死球のベールの一部に穴が開いた。

左腕の付け根辺りだ。

薄い……だが、如何なるものも阻止する最強の盾が取り外されたそこへ、黒獣の太い爪が伸びる。

死球を腕毎切り落とす気か……！

咄嗟に判断し死球のベールを練り直すも、一度剥がされたその部分には何度やったってベールは張れない。

逃れようと滅茶苦茶にもがくが、それはやはり無駄な足掻きだった。

「……くそ！」

黒い塊が、確実に放つ一撃。
喪失による凄まじい痛みが走る寸前――

「～リチウム！！　援護するわ」

甲高い声が緊迫した状況を裂いた。
全身を緑色の輝きが包む。
同時に、身動きの取れるようになったリチウムがその場に崩れるようにしゃがみ込んだ。
頭上を刈る音。
自分の真上に位置する黒獣の腹部に左掌を付け、リチウムが瞬時に意識を集中した。
ゼロ距離からの『死球』発動。

「……っ」

黒獣の胴体が呆気なく二分割した。
ぐしゃっと水分を含む潰音。瞬時に、血と胃液の混ざり合ったむせ返るような異臭が辺りに充満する。
尻尾の付いた方の足は、リチウムの前方に力なく落ち、その場に血溜りを生む。
一寸遅れて、後方でびちびちと、小さな何かが雨のように地に落ちる。
何もついていない方の一本足は、着地……というよりもそれは落下に等しい……した後、臓物と血を撒き散らしながらなおもリチウムの背目掛けて飛びかかった。

「だから……っ」

もはやスピードの伴わない単調な攻撃を避けるのは容易だった。

「しつっけぇんだよ！！」

リチウムは最後に残る一本脚を左手で掴むと、再び『死球』を発動させる。

僅かな闇が胴体から脚を取り外した。

再び、水気を含んだ何かが潰れたような音をさせて――今度こそ黒い塊と化した胴体が地に沈んだ。

「〜く……っ」

悔しげな声に、しかし、死の気配は微塵もない。

舌打ちして一歩、さらに一歩と、鮮明な痛みを無視して歩み寄るリチウム。

辺りに立ち込める悪臭とブーツの底で潰れる四散した内臓の感触が、より気分を不快にさせる。

顔を顰めたままよたよたと近づき、もはや動けぬそれを潰すべく、リチウムが片足を振り上げた。

「リチウム待って」

冷静な声。

振り返ると、すぐそこまでリタルが来ていた。

「疲れてるとこ悪いけど、そいつ、出来る限り特大の死球でとどめをさして」

「……おまえな。リクエストする前に満身創痍の俺様を労わって……」

ボヤこうとその目を見るも、碧眼に灯った色は真剣だ。

「訳は後で話すわ。死なない内に早くして」
あくまで声は冷静だったが。
注意深く聞けば、そこには僅かな焦りの色があった。
「……リタル？」
彼女は思い出していた。
数日前に戦った、やけにお喋り好きな相手の言葉を。
――自在に行き来できる者が居るとすれば、おまえの持つ転位の力と同等の能力を持つ者だけだろう――
そう。
人界そのものに喧嘩を吹っかけてきた訳では無論ない。
リチウムの『死球』を狙ってやってきたのなら、ここまで時間をかけて仕留めようする道理もなかったはず。つまり、
……これは、大掛かりな陽動作戦だったのだ。
「一か八かよ。
やってみたことないから、できるかどうかもわからない。
でも失敗すれば――
グレープを助ける術がなくなる」

2

クレープは焦っていた。
上は相変わらず薄桃色の寝巻きのままだったが、下は邪魔臭いという理由で脱いで捨て置いた。
本当なら身軽な着衣に着替えたい所ではあったが、脅威はすぐそこまで迫っていた。時間が無い。
薄い、すべらかな生地のシャツからすらりと伸びた美しい脚線。陶器のような白肌は汗ばんでいて、細い首筋に纏わり付く金糸が艶かしい。
上がる息に肩が大きく上下する。
彼女は自室のある１１０２号室を後にして共有廊下に出た。エレベータは使えないので、深闇に支配された階段室へ向かう。重たい扉をなんとか開いて、剥き出しのコンクリートの段を壁伝いに上がる。
取り付けてある飾り気の無い照明も機能を失っていた。成因であるグローブの、緑色を帯びた淡い発光だけが頼りだ。
暗がりを手探りで歩を進める。
しかし、裸足で踏みしめる地のなんと冷たい事か。

気配を察知し無理やり借りた……というか、奪いとったグレープの身体は、お世辞にも快適とは言えなかった。
居心地が悪すぎる。
頭から足まで……髪の毛一本一本から手足の爪の先端、細部に至るまで満遍なく絡み付いた魔力の鬱陶しさはさながら、全身がだるく、火照っている。動けば動くほど頭が逆上せたようにボォッとして思考力を徐々に削ぎ落してゆく。
息が切れ足元がふら付き、移動もままならない。
このままでは――

（クレープさん……！）

「黙ってて……っ」

――歯軋りして、

クレープはなんとか屋上への階段を上がりきった。

暗黒の隙間から、薄明かりと冷気が差し込んでいる。

冷たいノブをしっかりと握りしめ、汗ばむ身体全体で重たいドアをなんとか開ける。と、錆付いた音と共に、一気に視界が開け――高く浮かんだ月のみが照らす薄暗闇の舞台にクレープは立った。

１フロアに２ＬＤＫが三部屋ある。高い天井と堅牢な造り、見晴らしの良さがとりえの十一階建ての古マンションの屋上は、想像よりも随分な広さだった。

ひんやりとした夜風に乗って幾つかの生臭い気配がする。

既に闇に慣れていた目を凝らせば、目前に四体の何かが居るのは判った。

闇に溶け込んでその姿までは見えない。だが、目にするまでもなくそれが何であるか、彼女には容易に想像がついた。

舌打ちするクレープ。

下へ向かえば、周囲の住民を巻き込んでしまう。この近辺は背の低い建物が並んだ昔から成る住宅街だ。ごちゃごちゃした街並みに突出しているこのマンションならば上でドンパチやった方が賢明だろう。そんな理由で足を運んだ屋上だった。

近くに来ているであろう招かねざる訪問者達を、ここで待ち構えるつもりだったのだが……。

しっかり読まれていたか――

「そろそろ頃合かと思ってな……」

四体のうち、誰のものともつかない声が闇の中木霊する。

……いや、ここはただっ広い屋上だ。木霊などでは断じてない。

微妙な遅れはあったが、四体総てが等感覚で同じ言葉を吐いているのだ。

「陽動は叶ったが、その存在はもはや邪魔でしかない」

「健気に守ろうとしている様は聊か感動的ではあるが」

「それももう終わりだ」

「盾は間も無く消失する。おまえを護る者はもう居ない」

今度は順に、闇から流れる声。

柔らかな波を描く金の髪が夜風に攫われ後ろに靡くと、露になった細面は不機嫌だった。

「……盾？　コイツのこと言ってんの？」

未だに光るグローブを掲げて問う。

グローブから漏れる光は今や、まるで消える寸前の蝋燭の炎。次に風が強く吹き付ければ消失してしまいそうな程儚い輝きだった。

「コイツの暴走はアンタ達が仕組んだ事じゃないの？」

「無論、考慮していた」

「その存在目掛けて多種の力を送った」

「ただ、思いも寄らなかっただけだ」

「その存在はもはや純魔族ではない。おまえの手に寄って創られたものだと言う事に」

クレープはここでようやく合点がいく。

事は、『死球』を狙ってのものだと考えていた。

こちら側の戦力は、大蜘蛛の記憶でもう熟知しているのであろう。『死球』と『炎帝』。この二つの禁術封石の発動そのものを不可能とする為『魔力の流れを止める石』を暴走させるべく、あらゆる魔石を暴走させる性質を持つグレープ目掛けてしっちゃかめっちゃかに魔力を送り込んだ。

そうやってこちらの戦力を欠いておき、危なげなく当初の目的である『死球』を入手するつもりではないか――リタルはそう予想していたし、自分もそうだと考えて疑わなかった。

だが事実は違うのだ。

魔族が『魔力の流れを止める石』を暴走させたのには、確かにこちらの戦力の無力化を図っての事もあったようだが、さらにもう一つ。『暴走を企てたその存在』に目を向けさせるためでもあった。

そう考えてみれば、四角形の暴走範囲――魔族がやけに判り易い位置に立ち魔力を送っていた事も、その姿を人間や天使にただ曝していたのにも合点がいく。

果たしてリチウム達は『実に判り易い脅威』を迎え撃った。魔族的には「思惑通りに事が進んだ」と言ったところだろう。丁寧な誘導は彼らの足止めをする為に他ならないからだ。

後は、魔族の思惑通り一人になった無防備な自分を――そうやって首尾よく、本来の目的を成す予定だったのだろう。

だが、とある事実を見落としていた為にそれは叶わなかった。

『魔力の流れを止める石』は、純粋な「元魔族」ではない。グレープが進化させた……もはやそれは「元魔族」――「魔石」とは異なる存在だ。

先程の魔族の淡々とした発言を思い出してみる。『魔力の流れを止める石』が純粋な魔石でなかったから事を上手く運べなかった、

……そんな口ぶりだった。恐らく魔族は、魔石の力を打ち消すなんらかの手段を持っていたのだろう。が、その手段を持ってしてでも事を成せなかった。『魔力の流れを止める石』が「魔石」でなかったからだ。

加えて、『魔力の流れを止める石』の力は、彼ら魔族の持つ力よりも上だったらしい。

おかげで魔族の能力……本来の目的を達成する為に必要不可欠な力は、無効。仕掛けてもその力は打ち消されてしまい、結果、ここまでこれだけ無防備な自分に対し魔族はなんの手出しも出来なかった。手を拱いて見ていただけだった――そんなところだろうか。

もしも逆であったなら……このグローブに仕込まれた『魔力の流れを止める石』よりも魔族の力が上であったなら、既に自分はココにはいなかっただろう。

もう一つ気づいたことがある。

事態に気づいた魔族たちはグレープへの魔力の供給をすぐに絶ったはずだ。

なにせ、誘導作戦が成功した今、魔力の供給を続けていてもはやなんの意味も無い。それどころかそのおかげで当初の目的が達成出来ない事態に陥ってしまったのだから、その行動はむしろマイナスに作用しているのだ。

だが、外部の魔力の供給を絶たれた今、この状況でも『魔力の流れを止める石』は未だに発光、発動を続けている。

これは一体どういう訳か。

そう。『魔力の流れを止める石』は、ただ送り込まれた多種の魔力に反応して暴走していた訳ではない。

ソレは、荒ぶる魔力で不器用に。敏感にも脅威を感じ取っては、ただ主を護っていただけだったのだ。

グレープを。

「……へぇ、そう。だから今頃になってノコノコ現れたって訳ね」
相手をあざ笑うように浮かべた、クレープの冷ややかな微笑。それは彼女をまるで別人のように仕立て上げていた。口調こそ普段の彼女のそれだったが、細く開いたルビーの瞳からはどこか威厳のようなものまで感じる。
上の存在が下々の存在を見るような目つき。だがその色はどこまでも気高く、上品だ。普段の、リチウム達の前に居る明朗な彼女を知る者には想像もつかない類の雰囲気を醸し出していた。
そんな彼女の様子の変化にさして関心を示す事もなく、

「盾は間も無く消える」
「消えたらその時こそ」
「我が主の命により」
「貰い受ける」

口々に呟くと、一斉にクレープに飛びかかる四体の黒い影。
目前に迫ったそれ等の姿は……黒い獣だった。
黒くしなやかな犬型の肢体に張り巡らされたドス赤い幾千本もの筋。どれも頭部は無い。首には引き千切られたような痕があった。

「〜やれるもんならやってゴランナサイっての」

静かに吐き捨てると、クレープはその場で軽く跳躍する。
優雅に靡く金色と軽い素材で出来たシャツ。
細足は何かに包まれるように宙に浮いた。
……なんとかいけそうだ。

黒獣達の太爪が、彼女が先程まで居た位置を大きく抉る。
獰猛なそれらはしかし、薄桃色の生地を引き裂いただけで着地に

至った。当然その結果に納得せず、黒獣達はすぐ様獲物の後を追う。
地を這うような低空飛行でクレープは屋上を進んでいた。
無残に切り裂かれた上着。肩口や横腹、所々で白い肌が見え隠れする。

「ごめんグレープ、後で弁償するわ」
（そんなのはいいんです、でもクレープさん……）

集中の妨げになるとでも思ったのか（実際そうだが）、途中で口ごもるグレープ。
皆まで聞かずとも彼女の言いたい事はよくわかる。
今にも消え去ろうとしている『魔力の流れを止める石』は未だ彼女の手で僅かに発光、辺りを支配していた。
確かにこのまま頑張ってもらわなくてはこちらとしても非常に困るのではあるが、おかげで今クレープの浮遊はいつもの半分以下のスピードしか出せずにいた。
加えて体調不良が纏わりつく。
四体の犬型の魔族相手にこれは厳し過ぎた。
空を目指せばすぐさま横槍が入り、屋上を飛び出そうとすれば即座に行く手を遮られてしまう。
もはや、振り切るには到底叶わない速度で闇の中、目にも止まらぬ猛攻を延々とかわし続ける事以外に生き残る道は残されてなかった。
避けきっても、体力は確実に削がれていく。
それは、持久力と運とが物を言うなんとも分が悪い戦いだった。
いや、こちら側に反撃の手段がないこの場は戦いとも呼べない。
もっと一方的な暴力……狩猟である。差し詰めこの身は森の中の鳥獣の類か。
酸素が足りない。呼吸器が痛い。

痛い。痛い。
痛い。……血や内臓が、今にも口から飛び出してきそうだ。

白肌に刻まれてゆく無数の傷。
この身を切り刻もうと目まぐるしく繰り出される八本の爪。激しい動作に目が廻る。
ぐらぐらと。重心が上手く取れずに、さらにぐらぐらと。避けているというよりはもはや自身の重みや反動で振り回されているといった感覚。ダンスでも踊らされているかのようだ。

制御の難しさに堪らずクレープは屋上に降り立った。浮遊時よりも、さらに執拗に襲い狂う獣と痛みの中、なおも回避を続ける。
縛れる足。鮮明な痛覚とは裏腹に意識が朦朧としてくる。気を抜くと今にも倒れてしまいそうだ。
諦めその場に膝を付く――絶望しか示さない選択肢が今はとても魅力的に感じられた。
動くのを止めたい。足を止めてしまいたい。重力に身を委ね、倒れて寝転がりたい。
誘惑に駆られそうになると、クレープは気丈にも頭を左右に振ってはそれらを追い出す。
……ああ、吐きそう。

（……さん！　クレープさん、代わって下さい！　このままじゃクレープさんが……っ）

内でグレープが必死に自分を呼んでいる。
一体いつから叫び続けていたのか。鈴音はいやに遠くの方から聞こえてきて……ようやくそれは己に届いた。
……大体声が遠すぎるのだ。聞いてもらいたければもう少し近くで呼びかけるべきだ。

「……どんくさいアンタが回避なんて、できるわけがない……デショっ」

辛うじて、クレープは声を絞り出した。

自分と瓜二つの彼女は……相も変わらず何も解っていない。

それこそ、相手の思うツボなのだ。

なんせこの魔族たちは、痛めつけて自分を追い出そうとしているのだから。

足が言う事を聞かず、派手に転倒する。全身を駆け巡る激しい痛みに舌打ちした直後、なんとなく横に転がってみる。起き上がってはふと歩こうとしていた方向とは別の方向に歩いてみる。動く度に全身を支配する痛覚を完全に無視する……無視しきれずにガクっとバランスを崩す。

こんな調子でここまで致命傷を避け続けてこられたのが自分でも不思議でならなかった。

だが、この際、まぐれでも奇跡でもなんでもいい。

（クレープさん……！！）

……まだだ。

このコは、渡さない。

……渡してなるものか。

（〜クレープさん！　上！！）

ぼやけた意識を切り裂くグレープの絶叫。咄嗟に顔を上げたクレープの視界を四つの黒い塊が覆った。

南の空に浮かんでいたはずの月が、黒く塗り潰されて見えない。

「……ふざけ……っ」

横に跳ぼうと重心をかけた脚の傷が響いて、クレープは大きくバランスを崩しその場に倒れた。

横たわった華奢な肢体を容赦なく襲う太い爪。

「ダっサ……」

己を罵りつつ、黒い塊を映した赤い目は――未だに諦めてはいなかった。

まだ、オワリになんてしない

「〜クレープ！！」

錆付いた重音を、どこか遠くで聞いた。

飛び込んできた声は、重厚な空を切り裂く鮮やかな閃光のように意識を奪い、惹き付けた。

今にも魔族が己の身を――そんな状況さえ完全に飛んだ。

身を起こしその姿を視界に入れようとしたが、瞬時に温かさに襲われ――それは叶わなかった。

きつく抱き竦められ、宙に浮く。

懐かしい匂い。しっかりと包まれるその心地よさに、あれだけ死守していた意識が簡単に落ちそうになった。

永遠のような一瞬。

が、すぐに着地の無情な衝撃が全身を襲う。

「――大丈夫か！？」

その身は汗濁だった。
力強い二本の腕。
肩が上下に激しく動く。
自分を貫く、厳しい黒の瞳。

「トラン、ちゃん……」

――両手を地に着き、下に敷いた傷だらけの少女を見る。
乱れた金髪。汚れた頬。荒い息に、ほっそりとした頼りなさげな肩が激しく上下している。
いつも強い光を灯しているルビーが痛々しい程その輝きを半減させて……そんな双眼が弱々しく自分を見上げていた。
すべらかな薄生地は無残に切り裂かれ、肌を覆う面積の方が少ない程だった。曝された白磁には大小深浅様々な傷が刻まれ、覆うように鮮血が噴き出している。
満身創痍の少女の姿に舌打ちして、トランは即座に動いた。
すぐ側まで来ていた黒獣を睨みつける。

「くそ……っ」

部屋から持ってきていた金属バットを握り締める。
ついこのあいだ、学園で球技大会があると話していたグレープやリタルに野球を教える為に自分が買ってきたものだ。カーボン製のそれは少年軟式用の名の示す通りに軽量で、少し短い。
リタルが居ない今攻撃手段は……少し心許無いがこの寸足らずに頼るしかない。唯一の武具だった。
部屋にグレープたちの姿が無い事を知ったトランには十分に武器

を吟味するゆとりもなかった。隅に立てかけてあった、室内の雰囲気にはてんで似つかわしくないそれを手に取ると共有廊下に飛び出して、微かに響く騒音を頼りに全速力で屋上へと駆け上がった。

ボディの赤色とデザインが気に入って購入するに至った寸足らずには、いつのまにやら……十中八九リタルの犯行だろうが、全身を銀の塗料で塗ったくられてしまっていた。

変わり果てたその細身には……これまた一体誰が書いたのやら、やたら迫力のある「闘魂！」の筆文字。

未だ未使用のそれを目的外に持ち出してしまった事を少し後悔しつつも、トランはグリップをこれでもかと握り締め……何故か頭にこびり付いてしまった「闘魂」の二文字に気合を入れられつつ……。

最初に飛び込んできた一体を豪快に打ち払った。

地を転々と転がる一体を尻目に次の方向にバットを振りかぶり黒い塊を地に打ちつけると足で蹴り飛ばす。振り向き様にさらに一閃。さらに一太刀。

ふらふらとその場に立ち上がったクレープの腕を半ば強引に引き自分の後ろにやると、彼女を狙って飛び掛ってきた黒獣を殴り捨てた。

握り慣れた感触のそれは思いの外この局面に適していた。確かに少々寸足らずではあるがなにせ扱いやすい。

攻防を続けながら、トランはクレープを庇いつつ後方へ下がり、やがて、角に辿り着いた。

「〜どうしてこっちに……戻って来たの！？」

責めるような問いが背後から聞こえた。未だにふらふらしているようだったがどうやら話せるまでには回復したらしい。

しかしその様子を確認する事を自分は許されてはいない。

「……リタルがっ」

息をつく間も無くただそれだけを返すと、

「……あンの小娘……っ」

クレープが舌打ちした。

「……っていうか！　こっちのが危険じゃないかっ　助けに来るのは当然……だろ！」

なおも執拗に迫る魔族を打ち払いながらトランが怒鳴り返す。

「しっかし……なんだって女の子一人に寄って集ってこんなたくさん……！　『死球』は向こうだっての、気づいてないのか……！？」

クレープが押し黙った。

トランの背中を、荒い息遣いのまま見つめる。

トランが来ても……そりゃあ嬉しかったは嬉しかったのだが……意味がないのだ。

なんせこの屋上は『魔力が発動出来ない地』の中心だ。トランだけでは『炎帝』を発動させる事は出来ない。

もしもトランではなくリタルがこちらに来ていたら『転位』でリチウムと合流出来たのだが――来なかったということは、あっちはあっちでやる事があるのだろう。

……リタルがもし、気づいたとすれば。

いや、十中八九、敵の真意にも気づいたのだろう。だからトラン

をここへ寄こした。
だとすれば自分達はこのまま、黒獣の攻撃にただ耐え忍ぶだけだ。
だが……。

「トランちゃん。『炎帝』打ってみて」
「え、だって……」
「いいから」

訝しげな表情のままトランが『炎帝』を発動させるべく左掌を突き出す。
と、申し訳ない程度に火が出た。
コンロで言うと弱。バーナー程度のか弱い炎といったところか。

「……あれ？」

不思議がるトランを横目にクレープは自分の手元に視線を移す。
僅かに発光しているグローブ。
だが、先程直視した時よりも、弱い。

……リタルが気づいて。
あちらへ行く事が出来たとしても恐らく――

「間に合いそうにない、か……」

観念したように溜息をつくと、改めて自分を護る様にして立つ目前の背中を見た。

せめて。
トランだけでも、安全な場所に――

「トランちゃん！」

言うと彼が振り返るのを待たずにその背中に抱きついた。

「は？　～な……っ！？」

素っとん狂な声が上がる。

クレープがトランに抱きつくのは日常茶飯事だった。

だが普段の彼女のそれとは訳が違う。実体があるのだ。

細い華奢な腕、柔らかな感触がトランの胸を締める。

思いっきり狼狽するトランの意味不明な発言を無視して。

「……いくわよ」

決意と覚悟の含まれた静かな声と、次の瞬間にはトランの絶叫。

高く――速く。さらに高く。

二人は夜空に舞い上がった。

3

一体何の冗談か。
先程まで散々自分達に飛び掛ってきていた黒獣等が。
思わず手を離してしまった……想像以上に働いてくれた武具が。
屋上が。
街が。
みるみる遠ざかっていく。
これは夢なのかと、頭が処理しかけた。慌てて五感が首を振る。
これは紛れもなく現実だ。
自覚するや否や、急激に上がり続ける高度に身が竦んだ。勝手に奥から声が飛び出す。
そんなトランの様子などお構いなしに、上昇速度はさらに増してゆく。
黒獣が点になり。
屋上が小さく消えてゆき――
そして、眼下にただ、闇が広がった。

頭上に広がる重厚な魔力の大渦。
それは雨雲のように夜空を覆っていたが、目を凝らせば狭間で星光が薄っすら瞬くのが見て取れた。
上空を睨むように見据えたまま、クレープは急角度で上昇していく。
トランを抱えた彼女はありったけの力で天を目指していた。
一体どこにそんな力を隠していたのか、その速度は放たれた矢をも上回る、まさに神速だ。
火照った身体を容赦なく殴りつける豪風。自分達を阻むように引

っ切り無しに体当たりしてくる冷たい空気に、随分と長い時間、耐えていた気がする。
ふと、風が凪いだ。
静かな静かな真っ暗な空間を、二人、漂う。
仄かな月明かり。澄んだ冷気。夜の空気が穏やかに撫でる。
まるで異世界にでも辿り着いたかのような穏やかなアトモスフィア。
上昇時とはあまりに対照的な静けさに、その世界に存在しているのは自分達だけ……そんな錯覚すら覚えてしまう。

夜風が柔らかな金の糸を攫い、トランの頬を擽った。ほんのりと甘い香りが漂う。

「〜って、クレープ！？　何を……っ」

我に返ったトランが、反射的に下を見た。
先程まで居た箇所は勿論、街の様子も全く判らない。相当高い所に位置しているようだ。
それにしても、両足が宙に浮いている……この状況はひどく心元無い。

「アイツ等。飛べないみたいだし。このままリチウム達の所に合流する」

静かに、クレープが告げた。

「けど、おまえ……」

大丈夫なのか、と問うトラン。

背中越しに伝わる高熱。汗ばんだ身体。
見上げるも、彼女の形の良い顎が視界に入るだけで、その表情を見る事は叶わない。

息も途切れ途切れにクレープはただ頷き――
頷きながらも、今抱えているのがこの男だからこそ自分は耐えられるのだろうとも思った。
考えてみれば、実体でトランに密着するのはこれが初めてかもしれない。
思っていたよりも広い背中。厚い胸板。幽体時に幾度抱きしめても得られなかった感触を十二分に味わいながら、まるで身の丈以上のくまのぬいぐるみを与えてもらった年端もいかぬ少女のように大事に、しっかりと抱える。
これがトランではなく他の者だったら……、そう考えると自信が無い。
勿論頑張りはするも今頃は既に力尽きて二人とも上空から地に真っ逆様――成す術もなくこの身を宙に投げ出している所ではないだろうか。
だって、未だに心臓が痛くて堪らない。もうずっと血液と酸素を全身に送り出すべく激しく動き続けている。急かされるように呼吸が激しくなる。いい加減早く休ませろ、さもなければこのまま破裂してやるぞ……などという脅し文句すら聞こえる。
破裂するならしてみろ、と彼女は思った。そう悪態をつき続けていなければ……きっともうずっと前から動けない。

徐々に高度が下がっている事にトランは気づいた。
先程までは何もなかった視界――その脇に、ビルの屋上が薄っすらと見えるようになった。

大小様々な建物の凸凹並びが両脇に連なり、それはさらに奥まで、進行方向に続いている。どうやら自分達は大通りの上を飛んでいるようだ。
高度に比例してスピードも落ち、飛行ですらふらふらしている。
クレープが今相当苦しいだろう事は安易に想像がつくのに、それでも自分を抱く健気な細腕だけは変わらず力強いのだ。

「〜いい、いいから今すぐ降ろせクレープ！　リチウム達のトコに行きたいんなら俺が抱えてでも連れて行って……」

痛々しさにたまらずトランが告げた時だった。
衝撃が二人を襲う。

『〜な……っ』

クレープの身体が大きくぶれた。
バランスを崩し、そのまま真っ暗な地に落下……するのを辛うじて堪えるクレープ。

「どうした！？」
「なにか……ぶつかってきて……」

その言葉を遮るように、二度目の衝撃がきた。

「〜……っ」
「クレープ！」

視界脇に落下していく黒い影をトランは捕らえた。
が、闇に紛れる寸前でその姿は消失する。
素早く周囲に視線を巡らすと、並んだ建物の屋上を流れるように

跳躍する黒い影が三つ――いや、今、四つに増える。
黒獣は『転位』を繰り返し自分達の後を追ってきていた。
着かず。離れず。

「～しつっこい……っ」

クレープがかすれた声で悪態ついた。
その体を、なにか……生暖かいものが伝って、トランの頬に落ちる。
静かな衝撃。
拭えばぬるりと生々しい感触がした。僅かに広がる鉄の匂い。

「クレープおまえ……っ」
「トランちゃん黙って！　集中できないっ」

クレープは背中を大きく裂かれていた。
体内をさらに激しく打つ鼓動。傷口が脈打つように痛む。
再び、背後に転位した黒獣がその無防備な細背へ太爪を繰り出した。
気配を感じ、クレープが回避するも……間に合わない。

「……っ」

あがる、声無き悲鳴。

「クレープ！！」

衝撃が伝わりトランが絶叫した。
返事の代わりか、クレープは抱えた身体をぎゅっと抱きしめる。
柔らかな感触。その想いが、背中越しに伝わる。

「……くそ……っ」

なおも跳んでくる黒い影へ、トランが左手を突きつけた。が、望む感触は得られず、いつもの衝撃は生まれない。

先程と変わらぬ微弱な炎が力なく宙を焦がすだけで、脅威には到底届きそうにもない。

だが、トランは諦めなかった。

「……さっさとこい……！」

左手首を右手で、爪痕が残る程強く、掴む。

微弱な炎は、存在し続け――

……もっと。

もっと、もっと、もっと……っ

まだ足りない……っ

トランは必死に、全神経を掌に集中させ続けている。

「――トラン、ちゃん……っ」

無理だ。

恐らくは……本当に、後僅かなのだろう。だが、確かに今、自分の手にぴたりと吸い付いたグローブは発光している。

だから、幾ら頑張ったって、それ以上は――

（クレープさん……っ）

もう先程からずっと、内で自分の名を呼び続ける鈴音が聞こえている。

「……っ」

このままいけば、嬲り殺されるのは目に見えていた。

……いや。向こうにはこちらを殺すつもりは無いのかもしれない。

だが、トランは危ない。魔族の狙いはグレープであって、それ以外はどうでもいいはずだ。

元来魔族というものは破壊願望が強い。気性は荒く、その位は単純なる力比べ。魔界とは力量がものを言う世界なのである。

そんな魔族にとって、魔力をもたない人間という存在がどれだけちっぽけに映る事か。聞かずとも知れる。先日の大蜘蛛がいい例だ。彼らは、魔族＞人間という図式がそのまま常識であり、それを覆されるという事は即ち、自分は総ての魔族より劣る、そう証明されたと同じ事なのである。

その『ちっぽけな人間』に属するトランがここまで彼らの目的を邪魔したのだ。無事で済まされる訳がなかった。

どちらにせよ、このまま飛んでいても結末は見えている。

クレープは降下し、なんとかトランを地に下ろそうとする。

と、その視界脇に影が映る。

「しまった」と思った時にはもう遅かった。黒獣に思い切り横殴りに体当たりされ……その激しい攻撃に思わず目を瞑る。

「……っ」

歯を食いしばって幾度目かの衝撃を堪えようとしたクレープ。

だが……意図せずして、両腕が、その力を失くしてゆく。

「……！」

まだ地は遠い。
絶対に離すまい。僅かにずり落ちてゆくトランの身体を追い求めるように。
クレープの身体は、がくん、がくん、と二度、大きく下がる。

「クレー……」

決して離すまい。
……離すものか。
～この手を離す位なら――

「……、
ごめ……トラン、ちゃ、」

かすかな言葉尻も待たずして、
制御を失くした二人の身体は闇の中――重力の元に放り出された。

「……！！」

遥か地に向かってのフリーホール。
バタバタとすごい音をたててコートがうねる。
上昇時よりも凶暴な風が身体を殴り、ろくに目も開けられない。
呼吸が止まったのはいつだったか。
落下の間、諦めが悪いのか、それでも細い身体が己を守るように強く抱きしめるのを、トランが振り払うように乱暴に自分の下へ引き寄せた。
予想していた抵抗は……しかし、なかった。
熱い身体。か細い息。片手でクレープの背を、もう片方の手でク

レープの頭を抱え……力を入れてしまうと折れてしまいそうな程か弱い身体だったが……それでも離さぬ様しっかりと自身の胸に押し付けた。

「……く」

意識を喪失しかねん程の恐怖に身を委ねながらも、凍えるような豪風の先へ挑むように目を見開く。

月光は弱く、暗闇で距離感が掴めなかった。だが、確実に地が迫る感触。押し寄せる。

眼下は大通り――アスファルトだ。この速度で叩き付けられれば怪我ではすまないだろう。

成す術もない。

だが――

黒い瞳は決して諦めなかった。

諦めた先に迎えに来るのは、この闇よりもなお深い混沌だ。

そんな中に彼女を――彼女達を曝すなんて、考えられない。

――改めて考えてみて。炎帝の属性。

単に炎を放つだけが能じゃないかもしれない。

……状況を、打破出来るかも知れない――

いつかの少女の凛とした声が脳裏に蘇る。

……考えるのは苦手だ。

特に石に関して、自分は知らない事が多すぎる。

……いや。知らなくても良い、と。そう、思っていた。

『炎帝』を持っているのも、「彼女」との契約の為で、それは自分の意思ではない。

今自分がここに生きているのも、「彼女」との約束を果たす為で、それは自分の意思ではない。

どこかできっとそう思っていた。
……逃げていた。
状況を、打破出来るかも、だって……？
打破、してもらわなければ困る。
自分はこんな所では死ねない。
果たさねばならない約束がある。
いや、それ以上に……自分はまだ、彼女と一緒に居たい。
彼女は死なせない。
こんな所で失いたくない。
あの声を、あの瞳を……あの笑顔を。

――……思い出せ……――

そう、どこかで声を聞いた。
己の内から、確かに、声が響いた。
その低音は初めて聞くようでもあり、どこか懐かしさを帯びているようでもあり。
波紋のように、己の内に、意識の根底に、静かに広がる――

――そうだ。
自分（己）は、『彼女』を守るためにこそ、ここに存在しているのだ――

覚醒は永遠で刹那。
瞬間、見開いた双眼は赤く。
二人の身体が地に叩き付けられる、その寸前。
闇の街に。
月光よりも眩く、日の光よりも鋭利な
強い、赤光が瞬いた。

4

「なんだと……！？」

眩い光球の放つ赤い閃光に、付近のビルの屋上に転位した黒獣の一体が脅威の声を漏らす。

暗闇に突如鎮座した凶暴な光輝。闇に慣れた目では直視できない。それでも細目でなんとか凝視すれば、男の左手と胸とで発光しているのが辛うじて確認できた。

赤光は炎の色のようで、それは決して炎ではない。もっと柔らかい――包み込むような感じの赤だ。

赤い光は落ちゆく二人の身体を抱いて、ゆっくりと、ゆっくりと降下した。

瞳に赤を灯した男は少女の身体を抱えると体勢を立て直し、近づく地にそっと足をつける。

徐々に、少女の重みが男の腕にかかった。

やがて総ての重力が戻ると、身を包んでいた赤い光が音も無く弾け飛ぶ。

一度の瞬きの後、男の瞳は普段の黒色に戻っていた。

「……、なんだかよくわからんが……

……助かった、のか……？」

視界に広がる闇に包まれた街並み。

少女を抱え突っ立ったまま、狐に抓まれたような表情でトランが呟いた。

自分達が相当高い位置から落下した。そこまでは覚えている。

楽観的に見ても助かる可能性はゼロに等しかった。そう感じた事

も覚えている。
意識が途切れがちだったのか。トランの記憶は落下直後から今の今まで、とても曖昧だった。
気がつけば、この場に立っていた。まさにそんな感じだ。
あの状況下に置かれて、今。自分達がどうして無傷なのか。そもそも何故生きているのか。さっぱりだった。事と事が繋がらない。あの間隙に何が起これば今この状態になるのか。見当もつかない。
……誰かの声を聞いた気がするも――よく覚えていない。

「……なんだ？」

ふと気づけば、左手の中指に嵌めている指輪――『炎帝』が僅かに光っている。
しかし、己の体内の魔力の流れはやはり滞ってしまったままだ。
『炎帝』の灯している……どこか暖かな光。それが何を意味しているのかも、トランは解らなかった。
目を丸くしたまま辺りを見渡す。
そこは、大通りの真ん中――真っ暗なオフィス街だった。
照明等が機能していない為か、そもそも今日が休日だったからか。普段は帰宅路につくサラリーマンの姿でごった返してるこの場所も、現在は人の気配は全くない。
ちなみにトランもその大勢いるサラリーマンの一人だ。彼は毎日この路を通ってホームに帰っている。
ビルの間を容赦なく吹き付けてくる冷風だけは普段のままであった。刺すような冷たさ。だが、先程の全身を殴りつけるような暴力的なそれでは断じてない。
絶望的な状況の中……理由は判らないが……見知った場所に無事帰って来られた――その事実に、トランはようやく安堵する。
改めて感じる地の感触。安定感。
彼女の、心地よい重み。

胸を撫で下ろすと、同時に、膝が震えた。慌てて腕の中で弱い呼吸を繰り返している少女の体をそっと地に下ろす。
そこで初めて。トランは自分の抱いていた少女の変化に気づいた。
少女の髪が随分短くなって……というか、蒼色に変化している。
一体いつの間に、戻っていたんだろうか。

「グレープちゃん……」

未だ赤光を灯す指輪に照らされた、傷だらけの痛々しい肢体。衰弱の表情。
その頬にそっと触れる。
ぬるっとした感触。
見れば、彼女の頬に血糊がべっとりと付いていた。

「……なんだ、これ……」

――自分の右手が血で濡れている。

ギクっとする。
断じて己の血ではない。
細背を支え続けていた自身の右腕を見てみる。右手、手首、コートの手腕部の生地。その総てが、驚く程真っ赤に染まっていた。

「……グレープちゃん……？」

曖昧な記憶の断片が徐々に鮮明になってゆく。
宙で受けた幾多の攻撃。
直に伝わる衝撃と、クレープの声無き悲鳴。
自分の頬に滴り落ちた、血。
そう。

グレープは背中に裂傷を負っていた。
大きく裂かれた細背から夥しい量の出血が見られる。
後頭部をガンと殴られたような衝撃がトランを襲った。

「〜グレープちゃん……っ」

搾り出すように声を上げるも、反応はない。

「グレープちゃん、しっかりしろ……！　グレープ……」

身体を、生き物のように這い上がってくる寒気。
反して、ドッと汗が噴き出てくる。
押し寄せる恐怖を振り払うように、トランは虚空を仰いだ。

「〜クレープ！！　居るのか！？」

大声が無人のビル街に響く。
だが、返答は無い。

「……クレープ！！」

幾度呼びかけても……どれだけ待っても、彼女の声は返ってこなかった。
たとえ、近くに倒れていたとしても……『魔眼』の所持者、リタルが居ないこの状況ではその姿を見つける事も出来ない。

「……そんな」

愕然とする。
思考が霞み、頭が働かない。

いや、固まってしまっていた。
身体も、……心も。
――折角、助かったというのに。
これではなんの意味も無いではないか――
どれ位の間、そうしていたのだろう。
気がつけば、腕の中の少女の細身をこれでもかという程強く抱きしめていた。
少し、解放してやる。
温かさが、じんわりと寒空に溶けていった。
……そうだ。
まだ、こんなにも温かいじゃないか。

「……、
……病院」

呟く。
と、段々と、意識が覚醒してきた。
……そうだ、病院だ。
怪我人が出たら病院に運ぶ。どうしてこんな簡単な事を、一番大事な時に思いつかないんだろう。
そうだ。何をやっているんだ俺は。
こんな所でもたもたしている場合か。
頭の中で己を殴りつけながら、再び彼女を抱き上げようとして――思い止まり、急いで着ていたコートを脱ぐと彼女の体を包んだ。
と、何か硬い物が手の甲に触れる。
脱いだコートのポケットの中に何か入っているようだった。
「……光ってる？」

淡い赤の光に導かれるように中に手をやると、奥に入っていたそれを取り出してみる。
赤く光っていたのは――リタルから預かった銀の筒だった。

「……つか、これ……」

全身を赤に染めたそれは、トランが左手で持つと、瞬時に反応を示した。
筒の一方――上を向いていた穴から突如、炎が噴出したのである。

「！？　～うわわあああ！？」

前髪を焦がしそうになって慌てて仰け反ったトランは赤筒を取りこぼしそうになった。

「……？」

今度はしっかりと筒を握ってみて――まるで先程の金属バットを握っているかのような、やけに手に馴染むそれをマジマジと眺める。

「～な、なんだこりゃ……！？」
「それはこちらのセリフだ」

響く声に顔を上げれば……一体いつからそこにいたのだろう。周囲に満ちた常闇に幾つかの気配を感じ取ることが出来た。
四体の魔物が自分達を取り囲んでいる。

「この空間で『炎帝』を発動させるだと……？　協力者が居るのかと思い様子を見ていたが……空間干渉しているのはその媒体か」

四体の魔物はトランと炎を噴出し続けている筒状の何かを凝視する。

「いや、何がなんだか……」

訊かれたトランは再び黒眼をぱちくりとさせた。
先程から、理解できない事ばかりだ。
もしもリタルが居れば、説明の一つや十、嬉々として語り出すだろうに。
こんな状況下で自分に出来る事といえば、ただ――この訳の判らない状況をそのまま受け止める事しかない。
燃え盛る炎に再び視線を落とした。
未だ体内に魔力の流れを感じる事は出来ない。が、どういう訳か。空に居た時にはどれだけ望んでも得られなかった炎が今、目の前に存在している。
この炎は、自身が出している訳ではない。それでも。
この熱が――やけに懐かしく、頼もしい。

「……聞きたいのはこっちの方なんだが」

判明している事といえば、
赤く光るこれが、リタルが作った試作品二号だという事と、

「これは……」

形勢は逆転した、という事。

「……使えそうだぜリタル！！」

トランが叫んだ。
その意に応えるように、赤く染まった筒から出る炎の勢いが増す。
地に膝を付けグレープの背を支えたままの状態で、筒を頭上に振り上げる。瞬間。筒口から炎を纏った大きな竜が飛び出し、真っ直ぐに天を目指して上昇した。
その、圧倒的なまでの力。恐るべきスピード。
見せ付けられた黒獣達は一瞬怯んだ様子を見せたが、次の瞬間には一斉にトランに飛び掛ってきた。
トランは驚異的な忍耐力で黒獣達を限界まで己に引き付ける。意識を働きかけると――掲げた巨大な炎竜の身が突如、四方に裂けた。
四匹となった炎竜はそれぞれ目標目掛けて真っ直ぐに進む。その速度たるや。転位する間も与えない。四体の内回避の間に合わなかった二体があっさりと炎竜に飲み込まれ、地に転がる。
辺りを漂う異臭。生き物が焼ける匂い。
トランが掲げていた筒を下ろすと四匹の炎竜は一瞬で銀筒へ還る。後に残ったのは激しく燃え上がる二つの炎塊と、自身と炎塊とを真っ直ぐに繋ぐ、アスファルト上の太い焦痕だけだった。
再びバット状となった炎柱を見つめ、トランは改めて確信する。この炎は『炎帝』のそれだ。
ではこの筒は、リタルが持っていた銃のバーナー版……しかも大層強化されてある……みたいなものなのだろうか。
カラクリは解らないが恐らく、空から落下した時に自分達を助けたのも、この筒なのだろう。

「……頼んだぞ」

トランは改めて左手の筒を握り直すと、右腕でグレープの身体を抱き、立ち上がった。
そこへ、残る二体の黒獣が次々に飛び掛る。

「〜邪魔をするな……！！」

吼えるトランと、再び上がる炎竜。

夜空を真っ直ぐに昇る火柱。目を焼く程の赤は照明の消えたこの街を、ビルの内部を、まるで昼間のように明るく照らす。

巨大な火柱を巧みに操り、トランは迫っていた黒獣一体を横殴りに打ち払った。

ビルにたたきつけられた火達磨。魔族だったモノは壁に張り付いたまま激しく燃え続ける。横目で確認すると、トランは素早く辺りに視線を巡らせた。

――残りは一体。

転位した魔族は、トランの真後ろに迫っていた。

気配を鋭く察知したトランは、身体を捻ると振り向き様に一閃。

激しい火柱の軌跡。しかし黒獣は再び転位してこれを避けると、今度はトランが背後に振るった左腕――その手元に現れた。

目前。一瞬でトランの視界の大範囲を黒が支配する。

「な……っ」

トランがその姿を視界に入れた時、既に黒獣はトランの左肩に太爪を下ろしていた。

「……！！」

飛び散る鮮血。

咄嗟に背中から後ろへ倒れる事でなんとか左腕を失う事を避けたトラン。魔族の太爪は肩の表面を抉っただけに留まった。

が、まともな受身もとれず。グレープを庇いつつ、背中をアスファルトに強かに打ち付ける。

「〜ぐぅ……！！」

あがる苦悶の声。息が出来ない。

細身の筒は、弾みでトランの左手から零れ落ちると同時に炎と光を失くし、力なくアスファルトに転がった。

程なくして銀筒の転がる音が止み、訪れた静寂。――瞬間。はっとしてトランが目を見開いた。

上空から、黒い獣がスローモーションのようにやけにゆっくりと迫る。

その爪は今にも、己目掛けて振り下ろされようとしていた。

ほとんど反射的に、トランは負傷していた左手を黒獣に突き出していた。

……と。

体内に現存する、今まで微動だにしなかった魔力が――いや。それだけではない。その瞬間、嵌めている指輪の石――『炎帝』の膨大な魔力が爆発的に体内に流れ込んだ。

一瞬にして全身を巡ったそれらはやがて、左手に向かってものすごい勢いで体内を駆け抜ける。

身体全体が……いや、

左腕が、熱い。

疑問が生じるよりも早く、掌から暴力的な白――いや、赤い光が飛び出した。

「な……っ」

目を焼かれる瞬間、黒獣が僅かに声を上げる。だがその声すら轟音に飲み込まれてしまった。

トランの掌から生まれ出でた巨大な炎龍が、今、黒い獣の全身を――総ての闇を掻き消した。

驚きに見開いているトランの黒瞳。
その視界から、やがて赤光が消え去った。
――炎の放出が、止まったのだ。
同時にその場一帯の総ての光、音が消失する。
街に、再び闇が戻り……いや。路に添うように立っていた総ての外灯が二、三回瞬くと、間も無く光を宿した。
驚いて視点を巡らすと、遠方にも大小さまざまな光が見える。
街に光が……
平常が戻ったのだ。

「……、
……なん、で……」

未だ左手を突き出したまま、トランは呆然と困惑に満ちた呟きを漏らした。
今、体内を流動している魔力は、先程まで無かったものだ。
噴出した炎だって、魔力の流れが止まっているこの場では、自分だけでは成し得ない力……だったはずだ。
だというのに、いきなり、当たり前のようにそれは発動した。
そして魔力は、今も絶えず体内を巡り続けている。
街にも、光が戻った。
いきなり。予告も予兆も無しに。
……ひょっとしたら、リチウム達が何とかしてくれたのだろうか。
確信はなかったが、疲労した頭ではもう何も考えられなかった。
と、いうより、どうでもよかった。
魔力の流れが復活し、『炎帝』が使えるという状況がこの身を救った。……今はその事実だけでいい。
とにかく、これで総ての脅威は去った。
抉られジンジンと痛む左肩。腕を力無く下ろすと、冷たいアスファルトに仰向けに寝転んだまま深く息を吐いて、空を仰いだ。

いつの間にか、空は高く、澄み切っていた。
満天の星が瞬き、月が煌々と自分達を照らしている。
疲労し混乱しきっていた頭が徐々にクリアになってゆく。
右腕にかかる重み。

――まだ、終わってはいない。

温かい身体を自身に寄せると、トランは背に走る痛みをねじ伏せて半身を起こした。
異様に重たい肉体。
だが、休む間など自分にはない。
すぐにでも立ち上がって彼女を抱えて、病院に行かねばならない。
ここから一番近い病院はどこだっただろうか。
どの路をどう行けば一番近いのか。
掠む頭で、記憶から該当する情報を賢明に探す。
その作業に意識を総動員させながら、……それでも、どこからともなく押し寄せてくる不安に、堪らずトランはグレープを抱きしめた。

……大丈夫だ。
絶対に、大丈夫だ。
クレープも、……グレープちゃんも。
病院に連れて行きさえすれば、きっとすぐに良くなる。

「……大丈夫だ」

言い聞かせるように口にしてはみたが、説得力に欠ける掠れ声しか出なかった。

小さく、華奢で……しかし、柔らかい体。

視線を落せば、すぐそこに白い細面がある。
蒼い艶やかな髪。隙間から覗く、重く閉ざされてしまった瞳。
……そうだ。自分は、
自分は早く
笑顔が見たい。

早く
元気に動き回るが見たい。

今。
死ぬ程、その声が聞きたい。

早く。

――……早く。

残った力を振り絞り、立ち上がろうとして……ふと。
背後に、気配を感じた。

「……？」

誰かが、
――ナニかが、
自分達を見下ろしている。

「ようやく盾が消えたか――」

その声は、
やけに聞き覚えのある、
闇を含んだ濁音だった。

……まさか。
振り返ろうと身を捻った、その直後、激痛がその身を貫いた。
「……ぁ……っ」
背後から左脇腹を貫通したナニカが、びしゃっと、地に落ちた。
肺が収縮する。上手く呼吸が出来ない。
己の意思に反して、身体がゆっくりと地に沈んでゆく。
「〜……っ」
渾身の力を振り絞って身体を横に捻る。グレープを庇いながら、トランはアスファルトに横たわった。
じわじわと、広がる血溜り。
穴の開いた左脇腹が、焼けるように熱い。
霞んだ視界の脇に、宙に浮いた黒い物体が見えた。
成人の男が両手で輪を作った位の大きさがある。
首から下は千切れていてそこに胴体は無い。
毛は無く、ドス黒い皮膚中に暗い赤の筋が、血管のように幾重も張り巡らされている。
血のように赤い眼球は飛び出ていて、その瞳孔の色は……濁った青色だ。
紛れも無く、リチウム達と一緒に対峙した犬頭と同型の魔族だった。
……まだ、居たのか……っ
自らの油断に歯噛みしつつ、迫る犬頭を精一杯睨みつけるトラン。

が、犬頭は特に気にする様子もなく、ゆっくりとこちらに近づいてくる。

「……〜グレープ、ちゃん……っ」

血を吐きながらその名を呼ぶと、歯を食いしばってトランは動いた。

身体を動かせば痛みに支配され、もはや立ち上がる事すらままならない、だが――

それでも護るように、抱きしめた細背は、

「――目的を果たさせてもらう」

冷酷な声が降った、次の瞬間、

消失した。

力を入れていた両腕が、

彼女の血に染まった腕が――虚しく、宙を掠める。

「……！？」

確かにこの腕に抱いていたのに、目の前から忽然と消えてしまった。

――まるで。

夢であったかのように。

「……グレー……プ……」

心地よい重みの余韻。

未だかすかに漂う甘い香りと、

仄かな温かさを残したまま。

呆然と、血に塗れた自身の腕を見ているトラン。

既に戦意が消失している事を見て取るも、犬頭は油断無く宙を進む。

生臭い体臭――死の気配が徐々にトランへと迫る。

「散々梃子摺らせてくれたが……人間よ」

殺意の入り混じった冷徹な声を、それでもトランは、どこか遠くで聞いていた。

「――これで、終わりだ」

犬頭の口が大きく開くと同時に、生まれ出でた大きな球――水の塊が、今。

トランに向けて、放たれた。

5

頬、胸、腹、腕、脚。
ぽたぽたと、均整のとれた肢体を伝って落ちる血と汗は今や彼の足元に大きな水溜りを形成していた。
少し前まで彼はまるで袋叩きにでもあった浮浪者のような格好だった。幾度も無残に裂かれ酷い状態の衣類。辛うじて肩に引っ掛っていた上着は、お気に入りの漆赤のマントと共に脱ぎ捨てた。今の彼は上半身裸である。
細身ながらもバランス良く筋肉の付いた肉体には抉られて出来た深い傷が無数に刻まれており、夥しい量の出血は至る所から噴き出していた。
満身創痍のその姿は、思わず視界に入れる事を拒んでしまう程に痛々しい。
が、介する事無くリチウムは今、総ての意識を、前方へ突き出した左掌に集中させていた。嵌めている白皮のグローブの、手の甲の部分に付いている黒い魔石『死球』が、数分前からリチウムの意思に応じて発光を続けている。

「……」

元々しかめっ面をする事の多い彼だが、今は普段以上に眉根を寄せている。
未だ大きく上下する胸。滲む汗で身体に張り付く銀糸。平行して走る四本の深い傷。溢れ出た鮮血が体中を、左頬をなぞる。そんな状態でもリチウムの青い双眼の光は衰えてはいなかった。
しかし現在、その視界は隙間無く「黒」に覆われている。
前方に突き出されたリチウムの左手は今、大きな黒い球体を従えていた。

否、それは決して球体ではない。確かにそれは球の形をしていたが、厳密に言えば球の部分には「何も無い」のだ。
黒は「無」そのものであった。
故に形など無い。言うなれば、宙にぽっかりと開いた立体的な空洞――孔(あな)だ。宙に存在する様々な成分が、その黒の部分だけ存在しない。
「無」の放つ異質――いや、異質な感じは「無」が放っているものではない。「無」というモノに「有」である人体が本質的に抱く恐れ……拒否反応のようなものではないだろうか。
この黒い存在こそが、リチウムが普段から多用している魔力……『死球』だった。
リチウムは体中に走る痛みをねじ伏せた状態で「無」――『死球』を支配していた。拡散を抑えると同時に練り、さらに『死球』を成長させていく。
並みの集中力で成せる技ではない。
宙に漂う黒の範囲が大きくなるのに比例して、彼の眉根に刻まれた皺がより深くなっていく。

「〜こン……くらいで満足かぁ……？」

ようやくリチウムが一言を発したのは、『死球』の範囲が直径二ートルを越えた頃だった。

訊かれ、片足で黒い塊――総ての脚を失くし上胴のみとなった魔族を踏みつけていたリタルはそちらを振り返った。
魔族を踏みつけているのは、相手が転位して逃げ出さないよう彼女の属性『空間操作』に応じた魔力を用いて固定する為……といえば聞こえはいいが、固定はなにも、物体を踏みつけていなくても出来る。この行動は単純に彼女のストレス解消を担っているのだろう。
リタルは今、リチウムの真正面に位置していた。『死球』に阻ま

れリチウムの姿を見る事は出来ないが、聞こえてきたその声からリタルは彼の状態を察する。……限界が近そうだ。

「ええ、上出来よ。リチウム」

冷静な面持ちを崩さずにそう返すと、リタルは魔族を踏みつけたまま移動する。『魔眼』で魔族の心臓が未だ動いている事を確認しながら、リチウムから見て魔族の後方に廻り込むと、『死球』に向き直り、

「それじゃリチウム。コイツにぶっ放して。それ」

短く切った言葉を、淡々と口にした。

「……は？」

対し、巨大な『死球』を制御したまま、リチウムが間の抜けた声を上げる。

「時間が無いって言ったでしょ。早く」

「つか……、おまえ今、魔族の近くに居るんだろ？」

「真後ろ」

間髪入れずに答えるリタルに、リチウムは益々困惑した表情になる。

「何する気だ」

「説明してる時間無い」

リタルは先程から淡々と同じセリフを繰り返している。まさに取

り付く島も無い状態だ。
しかし、この数年間リタルを相棒として側に置き、共に行動してきたリチウムには、その淡々とした言動が彼女の焦りから来ているものだと即座に判断する。
彼女は、焦っている時程短い言葉を連発するのだ。
これまでの経験上、この状態は、まぁ……相当、焦っている。レベル8～9位だろうか。どうやら「今」は本当に僅かな時間しか残されていない、とても切羽詰った状況なのだろう。
「ふむ……」とリチウムは視線を泳がせた。
彼女がやりたがっている事が、なんとなくリチウムには読めていた。
もし想像通りであれば、失敗した時のリスクは高い。
この状況下でそれを成し遂げる為には、先程リタルが告げたようになるべく大きな『死球』を彼女に向けて（正確には魔族に向けて、だが）ぶっ放すしかないだろう。失敗すれば――もし、寸前で魔族が事切れるような事があれば当然、彼女の死は否めない。
だが、それを理解していても実行しなければならない――その必要性がある。恐らく、事態を好転させる術はこの方法以外、無いのだろう。
いや、もしかしたら探せばまだ他にも方法があるのかもしれない、が、今はそれを検討する時間も残されてはいないらしかった。
リチウムは改めて『死球』の向こうにある気配を見据えた。
「……失敗したらゲンコツ、な」
放った一言に、彼女は即答した。
「やったら倍返す」
リチウムの口角が僅かに上がる。

「ンじゃまぁ、いくか。俺様も早いトコ治療したい」
「……いつでもどうぞ」

軽い口調にリタルが身構えた。
彼女との距離は二メートル弱。しかしリチウムは、肌で彼女の集中力の高まりを感じ取る事が出来た。
この場は、辺りに漂う『魔力の流れを止める石』の魔力をリタルがせき止めている状態にある。故に『死球』の発動が可能な訳なのだが。
今、自分達を取り囲んでいる魔力の流れが、リタルの意思に応じて微妙に変化していた。
彼女の居る辺りだけ、より濃密になったと言うか。吸い寄せられている感じを受ける。
ピンと張り詰める緊張感は、数年に渡って夜な夜な二人で繰り広げてきたストーンハント時のそれにも似た空気だ。
頬を流れる一筋の汗。
慣れ親しんだ感覚を十二分に味わいながら。
リチウムは、リタルに向けて、濃密な闇をぶっ放した。
直径が二倍近くある「無」が、息着く間も無くリタルに迫る。

「……〜っ」

リタルは自身の背後に『魔力の流れを止める石』の魔力を収集していた。
そして、彼女の右手の甲で碧色に発光しているのは、『魔眼』だ。
迫る異様。
津波のように押し寄せる、濃厚な死の気配。
唇を引き結んで。
その脅威的な忍耐力で彼女は『死球』の接近を許容する。

その間、数秒。「無」が目前に迫った。
鼻の先の空間が飲み込まれて無と化し、さらに膨れ上がった「無」が、リタルの小さな肢体を呑む――寸前。
展開していた『魔眼』が、自分と「無」との僅かな間に生じた、空間の大きな歪みを感知する……！

「〜この……っ！！」

――果たして、巨大な「無」は異質な気配と共に、あっけなく、この世界から消失した。
目を見開いていたリチウムの視界には、先程と同じようにリタルと、彼女が踏みつけている黒い魔物が存在している。
変化した点といえば、リタルが必死の形相で両腕を前に突き出しているところと。
彼女の目前――空間の一部が、陽炎のようにゆらゆらと揺らいでいるところか。
自らが放った『死球』とほぼ同スピードでリタルの側に立ったリチウム。
間近の気配にようやく気づいたリタルは、汗濁の表情で彼を見上げて……ようやく。溜息を一つ漏らした。

「……とりあえず、ゲンコツは間逃れたようね」

6

自らに向けて『死球』を放ってもらい、辺りに漂う『魔力の流れを止める石』の魔力を利用して、リタルが成し遂げた事。
それは、魔族の使う、とある魔力を場に留めおく事だった。

黒獣はリタル同様、空間を操る属性を持つ。
その魔力を使って犬頭達はこれまで、魔力の流れが止まっている地帯に位置しながらも数種の魔力をグレープの下へ――正確には彼女が嵌めていたグローブへ送り込んだり、自分達に向けて放ったり。
犬胴体に至っては、何度も転位してみせ……挙句の果てには、発動させた状態の『死球』や『炎帝』を消し去ってみせたのだ。
一度発動した魔力が消失する、こんな現象は本来在り得ない事だ。
よってリタルは、『死球』、『炎帝』が消え去った時、この辺りの空間になんらかの異常が発生していたのではないかと推測した。
犬胴体は、『死球』や『炎帝』に直接手を加えて消失させた訳ではなく、その魔力をもって空間を弄る事で『死球』、『炎帝』を無力化させたのではないか――そう彼女は睨んだのだ。
それも、『死球』、『炎帝』が触れるか触れないかの瀬戸際。まさに一瞬の内に、空間操作の魔力を発動させ、二つの巨大な魔力の無力化を成し遂げたという事になる。

一体、犬胴体はどういう能力をもって、『死球』、『炎帝』を消失させてみせたのだろうか。

空間の変化を解析するには、『魔眼』が必要不可欠だった。
事が起こってからリタルはすぐに『魔眼』を発動させ、その魔力を展開させた。
間も無く、繰り広げられる攻防の際、トランが犬胴体に向けて『

炎帝』を放つ。その直後。リタルはその視野で、『炎帝』の進行方向上の空間に突如歪みが発生したのを捉えた。
歪みの面積は、『炎帝』の大きさに等しい。
『炎帝』は宙に生じた「空間の歪み」に一直線に飛び込み、その姿を消す。一瞬後には「空間の歪み」もきれいに消失してしまい、空間は何事もなかったかのように元に戻ってしまっていた。
そう。『炎帝』は決して消失した訳ではなかった。
そのように見せられていただけなのだ。
――能力（カラクリ）が判明した。
ただし、それは断じて、犬胴体……犬魔族が発動させた魔力などではなかった。
空間に歪みを施した魔力は、犬魔族からではなく、歪みの奥から迸っていた。歪みの向こうに居る未だ姿も見せぬ何物かが発動させていたのだ。

リタルの頭の中で、総てのパズルのピースが揃う。

今回の犬魔族の非常に判りやすい登場。判りやす過ぎる配置。無論、彼女は最初から違和感を感じていた。
恐らくリチウムもそうだろう。
だが、手がかりの一つもなければ推測ばかりが幾つも突っ立って拉致が明かない。リタルはあえて魔族の誘いに乗る形で犬魔族に接触する事を決断する。
一体魔族はどういうつもりなのか。
それが判明した直後、彼女はトランをグレープの元へ送り込んだのだ。

「……ま、陽動作戦っつーのはなんとなく判ってたけどな」

ボヤきつつ、リチウムはその場に胡坐をかいて座り込んだ。その

言葉に、彼の傍らに両膝を付けたリタルはコクっと頷く。
彼女は持ってきていたプラスチック素材の小さな容器のフタを取ると、露になった先端のスポンジ面を、彼の身体に刻まれた無数の傷口の一つに押し当て、擦りこんでゆく。
リチウムが絶叫した。
「～……っ！！　～おま……っ、～もうちょい、こう、ソフトに……っ」
「……イマイチ、何が狙いなのかが判んなかったのよね。……とは言え、まさか奴等の狙いがグレープ達だったなんて予想もしてなかったけど」
身悶えるリチウムの抗議に構わず、リタルは手際よく作業を進める。
「～ぬ……っ　……しっ　～しみ、～しみっ　……、」
「グレープのグローブ……『魔力の流れを止める石』の魔力が尽きる前に、カラクリが判明して良かったわ……本当。
あの魔力が無きゃ、魔族が作った『空間の歪み』を留め置く事なんて出来なかっただろうし。『こっち』に来る事も出来なかった。
……トランが時間を稼いでくれた事も大きいわね。
グレープ達を捕らえたら、魔族達、人界に長居する気はなかっただろうし。身の丈サイズの『死球』を完成させる前にさっさとこっちに引き上げてたかもしれないもの。
そうなってたらもう地団駄踏む位しかする事なかったわよ」
「～お～ま～え～なぁ……人の話をき……！　……ぬぉ……っ」
「てか。もし、あの時……『死球』をぶっ放す直前で胴体魔族が死んでたら、最悪あたし、リチウムに殺されてたのかもしんなかったのよねぇ……あー。危ないところだった」
「～だか、おま、しみ、しみるっつって……っ

～って、人聞きの悪い事をぬかすな……俺様だってそうならねぇように最善の努力をだなぁっ！！　～ぬ……っ」
「だって、そうじゃない。
大体、あんだけ間近であんなバカデカい『死球』見といて未だ生きてるだなんて。世界広しと言えどそんな生物、あたし位よ。
……勿論、『この世界』も含めての話ね」

そこまで言い終えると、リタルは目の前にあった広い背中を叩いた。
辺りに小気味良い音が響く。

「～ってぇ……」
「終わったわよ。これで少しはマシになるでしょ」

容器のフタを締めながら、リタルがその場に立ち上がった。
ちなみに、この容器。ぐるりと巻かれたビニールに『キズナオ～ル』と言う文字が印字されている。
掌サイズの容器の内部には、細かく砕かれた『治癒』の魔石と液体が入っており、容器のフタを取ると『治癒』の石が発動。魔力が流動し満ちる事で出来た治癒液が先端部分から滲み出て傷口の深部まで染み渡る……という、どこのご家庭にも必ず一つは置いてある最もポピュラーな傷薬である。
ちなみにこの『キズナオ～ル』。リタルが特許をとっており、今リタルが手にしている容器はその改良版の『キズナオ～ルＥＸ』だ。
彼女曰く、『キズナオ～ル』の数十倍効きが速く効果も高い。より多くの症状にもこれ一本で対応出来るのだと言う。
ぶつくさと呟きながら自分もその場に立ち上がろうとして、生じた痛みに僅かに顔を顰めたリチウムだが、それでも、塗布前、塗布後では痛覚の鋭さがまるで違う事をその身で実感し、目を丸くした。

「……自慢するだけの事はあるな」
「当〜然」
両腕両足を振り回して己の状態を確認しつつ、リチウムが感心したように呟けば、隣で満足そうにその様子を見ていたリタルがふふんと鼻を鳴らした。
「さて。リチウム。一応確認しとくけど。状況解ってんわよね？」
「当〜然？」
声を真似されてリタルはリチウムを軽く睨むが、しかし彼は既にあさっての方向を向いていた。
今二人が立っているのは、ゴツゴツした岩肌で構成された、殺風景な世界だった。
周りを切り立つ崖に覆われた広い空間。大気は乾燥し、大地は完全に干からび、ひび割れている。
風が無い。
空気の質が明らかに違う。希薄だ。
上空には薄暗い青が広がっていた。太陽も、雲も、月も無い。だが、今は昼の時間帯なのか、辺りは先程まで居た夜の街よりも明るい。（そもそもこの空間に、朝昼夜に該当するものが在るのかどうかすら謎だったが）
遠くに聳え立つ岩壁に、大穴（トンネル）や、地を走る太い焦痕が幾つか出来ている。あれは……恐らく『死球』、『炎帝』の軌跡だろう。
そう。魔族は『死球』、『炎帝』をただ、空間操作――『空間接続』させて、己の居る空間とは別の空間――この地に、送り込んでいただけなのだ。

「とりあえず、どうやらここが、奴等の本拠地らしいっつう事と……」

リチウムに遅れる事、数秒。気配を察知したリタルが鋭く視線を巡らせる。

漂う違和感。どこかねっとりとして、重たい。

否。

これは、強大な魔力だ。

「……アレが諸悪の根源だっつう事が解ってりゃ、合格点か？」

リチウムが細い顎をクイっと正面に向けると、

「まぁ、及第点ってとこかしらね」

同じ箇所を睨んでいたリタルが、軽く溜息をついて向き直る。

リチウムとリタルが見据える方向――遠くの崖の上に、巨大な影が一つ存在した。

「どうやらアレが、総ての犬を支配して偉そうにくっちゃべってた奴みたいだけど」

右手に輝く濃いエメラルドの光。

リタルの視界に映る大きな影の纏っている魔力は、しかし、空間を接続させていたソレではない。

「実はアレの後ろに、もう一匹居たりするのよね……『空間接続』の能力で散々邪魔してくれた、あたしと同属だって言うイケスカナイ奴が」

1

少女は、温かい白光に包まれていた。
一体、いつからこの場に居たのか、定かではない。
気がつけば、波間に漂うように、光の中に身を委ねていた。

瞼を閉じているはずなのだが、それでも発光は彼女の視界に広がっていた。
どこまでも暖かく、
なんだかそれは、とても懐かしい感じ。
何の不安も無く、ただ、心地よくある。

……と、
どこかで自分を呼ぶ声がする。
それは、決して一つではなかった。
色々な距離から、
上から下から、左右から。
様々な声だ。
中でも一際煩く響く男の声があった。

もう少しこのままどろんでいたい気もしたが、観念して少女は重く閉ざされていた瞼を開ける。

「……、」

――眩しい。
完全に開眼する事は叶わず、光を恐れるように一度、目を瞑る。
今度は恐る恐る、ゆっくりと開けてみた。

世界が開けた。
乳白色の世界だった。
濃霧が満ち、自身の身体―その掌でさえも、霞んで見にくい。
温かく、優しく。穏やかで、心地よい。
だが、それ以外、何も無い。
風も……空気も。
気がつけば、少女は呼吸さえしていなかったのだ。
少し慌てたが、しかし苦しさは無い。

「……どこ……？」

ゆっくりと身を起こす。
両腕を広げると、すぐに、ふわっとした感触の突き当たりに触れた。
世界は驚く程狭かった。
両腕両足、身体が伸ばせない。
手探りで探ると、どうやら球体をしているようだ。

「……、ここは……」

自分はどうしてこんな所に居るのだろう。
……。
……最初から、ここに居たんだったっけ？
頭が重たい。思考までもが霞んでしまっていて、黙考する事が出来ない。

あきらかに平常ではない自身の状態に、しかし、何の不安も抱かなかった。……いや、不安を抱く、その機能ですら麻痺しているような感じだ。
だからこそ、じんわりと生じた疑問を、考えてみたくなった。

落ち着いた状態で、無理やり頭をフル回転させて、
霞みがかった記憶を整理してみる。

最初から、ここに居た……？

違うと思う。だってここには……、
無いのだ、何も。

何一つさえ。

そこまで考えると、ふと、何かが記憶を過ぎった。
ここには無い。無かった。
緩やかな波を描く、金糸。

「……クレープ、さん……？」

無意識に、ある少女の名が喉の奥から出た。

その時だ。

白い靄の世界に、突如、少女の姿が現れた。

長い髪をした、赤い瞳の少女だ。
その姿は霧に狭間れ、はっきりと目にする事は出来ない。
二人の間には辛うじて表情が判別できる位の距離があった。

ここは、狭い球体の中なのに。なんて遠い。

「……、」

その少女は、口を動かしていた。
何かを、自分に伝えたがっている。

聞き取れなくって、球体の世界の端。柔らかな壁に両手をついた少女は、精一杯耳を澄ませる。

重なる視線。赤い光。

少しだけ、霧が晴れる。
と同時に、少女の声が微かに……

……いや、はっきりと、耳にする事が出来た。

クレープの声ではない。
その少女の紫色の髪は、足元まで真っ直ぐに伸びていた。
射抜くような双赤は自分に、たった一言を繰り返し発し続けていた。

――ついには。
直接、少女の脳裏を貫くアルト。

「――解放しろ」

2

「……っ」

飛び起きる。

グレープはしばらくはぁはぁと、荒い息を繰り返していた。

「……夢？」

蒼い毛束が肩を撫でる。

噴き出しては雫となって白い頬を伝う汗。

いつの間にか身体は白い滑らかな手触りの布に包まれていた。

と。

指先に触れる地の感触がやけにふわふわしている事に気づく。

辺りは濃い霧が立ち込め、特に下方に溜まっていた。自身の下半身ですら、濃い白に呑まれて見えない程だ。まるで雲の上にでも居るような妙な気分だ。

「……ここ、は……」

荒い息を落ち着かせ、辺りを見渡す。

乳白色の世界は相変わらず狭かった。

先程見た夢の世界と違うのは、霧がかった向こうに微かに外界が見てとれる所か。

球界の外は、殺風景な岩肌の世界。比較的霧の薄い天を仰げば、濁青が広がっている。

見知らぬ場所だという事しか判らなかった。

「目覚めたか」

驚く程すぐ側にソレはいた。球体の中に居るためか声を聞き姿を目にするまで気配は全く感じとれなかった。
それは、大きな鷹だった。
鋭い目と先の湾曲した鋭利な嘴。グレープの目線の高さに頭がある。
しかしよく見てみると、鷹の部分は頭部だけである事に気づく。肉体は人間のそれであった。霧世界(こちら)からでは上半身しか確認できないが、衣服を纏わぬ上体は筋肉質だ。褐色の皮膚が筋肉に基づいて隆起している。
その姿はまるで精巧に出来た鷹のマスクを人が被っているようだった。というか、実際グレープは一瞬それを疑った。マスクを取ってこちらを驚かせようと絶好のタイミングを計り、待ち構えているのではないだろうか。
……残念ながら、そうではないらしい。
球体の隣で腕を組み目線だけを寄こして、こちらの様子、状態を確認している。その眼差しが、どこまでも異質であった。褐色の眼球に鎮座する小さな漆黒は、対象の細部まで射抜き硬直させるまでに至る威圧を放つ。威厳を放つ強すぎる眼光は、決して人間のものではない。
しかし……不思議なことに、敵意は微塵にも感じられなかった。

「……この球体は、お上が創ったモノだ」
「……おかみ？」
「どれ程破壊されていようが完全に復元させるそうだ。元の状態に修復するまで」
「……破壊……？」

そこで、ようやくグレープの記憶が呼び起こされる。

犬の胴体に追い詰められたクレープ。
駆けつけてくれたトラン。
クレープは上空で背中を幾度も裂かれ、
二人は追い詰められ、
ついに宙より落下した――

「～クレープさんとトランさんは！？　無事なんですか！？」

球体の中、柔らかな感触の透明な壁に両手を付き半立ちになる。
先程までの怯えも忘れたか自分に向かって必死に声を張り上げるグレープの様子に、少し驚いたように瞳孔を収縮させた鷹人は、しかし何事もなかったかのように正面を向き直った。

「知らん。
我の役目は、魔界に送り込まれた目的の保護、連行だ。
その過程や、他の末端がやらかした事態の結末など、我の知り得るところではない」
「……そんな」

鷹人の感情を見せぬ淡々とした口調にグレープは愕然と俯いた。
クレープは、大丈夫だろうか。
思い返せば、確かに落下直後、彼女が肉体から出た感触はあった。
どんなダメージを受けようとそれは肉体を保有する自分がダメージを受けるだけであって、離脱したクレープ自身が傷を負っていた事はこれまでなかったのだが……。
……いや、なんのダメージも無かったなどと本当に言いきれるだろうか。
ダメージがあったとしても、それを見せないのが彼女なのだ。その身に傷を負う事は無くても痛覚は鮮明に残るのではないだろうか。
彼女は強い。だからこそ、生じる脆さがある。そのことを、グレ

ープは誰よりも理解している。

クレープが体内に居る時、グレープの意識は眠っているわけではない。クレープが居る時は同時にグレープも体内に存在して、身体の主導権だけクレープに譲っている状態である。

しかしいくら同じ身体の中に二つの精神があるからといって、勿論、互いの精神――互いの思考を明確に知り得る事は出来ない。

が、グレープはクレープの心に触れる事が出来た。

クレープの感情―優しさ、穏やかさ、楽しさ、痛み、悲しみ、苦しみ、怒り。彼女が抱く様々な感情。

クレープが体内に居る時は、同一の身体の中、心と心が密着した状態に在る。だからグレープは彼女の心に常に触れ、その触感を通して彼女の心を知る事が出来た。

時には温かく、時には冷たく。熱く、痛い。

しかし、それらを彼女が直接グレープに訴える事は無かった。

クレープが主導権を握っている状態で怪我をした時にはグレープ自身も痛みを感じる。同じように痛むのだろうに、クレープは「痛い」と口にする事はしなかった。恐らく、自分に心配をかけさせないためだろう。彼女はそういう人間だ。

だが、口にはしなくても、グレープは察する事が出来る。

グレープは時々クレープの心に、か細い印象を覚える。

あらゆる痛みを受け、耐え続け、故に震えている。そういう時の彼女の心はとても小さく感じる。

痛みを避ける事なく、漏らす事も無く。ただ総てをそのまま受け入れる。それが出来る彼女は強い人間だ。だからこそ、傷だらけの彼女は脆い。

だからグレープは、彼女を支えたいと願う。

そうやって互いの精神が、心が重なるように同調を果たす事で、クレープは『増幅』の能力を発揮する。

今回は……いつものように支えることすら出来なかったのだが。
たった一人で戦っていたクレープを支え、護ってくれたのがトランだった。
駆けつけた彼は彼女を普段の自分以上に支えてくれた。それはクレープの心に触れる事で酌み取る事が出来た。実際彼女は負傷しつつも普段以上の能力を発揮した。……だが……。
自分には落下直後から記憶が無いのだが……あれからどうなってしまったのだろう。
決して楽観視の出来ない状況であった事は確かだ。
しかしこの身体には、落下の際に負ったであろう傷は愚か、背中の裂傷でさえ、何一つ残っていない。おかげで幾度も背を裂かれた記憶、その痛みだけは鮮明に在るも、どうにも実感が湧かなかった。あの出来事が全部夢であったかのような。
ずっと身体の中に居て実際に動いていなかった為か、記憶が余計希薄に感じられる。その為だろうか。
こんなに不安を感じるのは。
自分の意識が無いところで、何か、取り返しのつかない事が起きたのではないだろうか。
……また。

「自身の心配はしないのか？」

ふいに横からかかった声に思考を裂かれる。
呆然と顔を上げると、鷹人は鋭い目を正面に向けたままだ。

「……これから……どうなるんですか」

きょとんとした表情で、それでも自分の言葉に促されるままに疑問のような声をあげる少女を、鷹人は少しだけ視界に入れた。

「修復が完了次第、お上より次の命を受けている。しかしその命は状況に応じて異なっている。……何事も無ければ、おまえをお上の元へ連行することになっている」
「……おかみって」
「我等の主だ」

首を傾げるグレープ。

「それは、『死球』では……」
「『死球』はかの主だ」
「……？」

グレープはますます困惑の表情を浮かべた。
彼らは、かつての主であった『死球』を――主を取り戻そうと狙っていたのではなかったのか。彼らにとって『かの主』こそ重要なのではなかったのか。少なくとも大蜘蛛はそうだった。彼は……今回は、違うのだろうか。
これまでの彼らの行動はオカミという者が命じていたのか？
大体、自分を治療するよう命じた、その理由も解らなかった。どうしてそうする必要がある？　人質……にしては、何か妙だ。
が、鷹人はそれ以上を語る様子はなかった。
仕方なく。ぺたんと、その場に座り込む。

解っている事を整理してみよう。
鷹人の話からするとここは……どうやら「魔界」らしい。
魔界とは、自分達の住んでいる空間とは異なる、魔族が住まうと言われている空間だ。魔界についての資料は少なく、存在自体が疑われ始めている空間。
自分は何故かそんな魔界へ連れてこられて、怪我の治療を受けている。

そしてこの鷹人――魔族は、自分を連行、保護しろというオカミという存在の命令で動いているらしい。自分を見る鋭い視線に殺気は全然感じられないから、それは真実なのだろう。

なんのためなのか、さっぱりわからない。

人質にするつもりかと思ったが、それはどうも違うようだ。人質をとって『死球』を奪う気ならわざわざ魔界になんて連れてこなくても彼らの目の前に突き出した方が手っ取り早いと思う。

オカミという者の元へ連れて行くのは傷が治ってから……と、鷹人は言っていた。しかし、どこをどう動かしたって身体は既にどこも痛まなかった。もう身体の重みも無ければ熱っぽさも引いている。見れば装着していた手袋の光はすでに消失していた。調子は快調だと言ってもよい。……いや、普段よりも軽い位だ。オカミという者がどういう魔族なのかは、おいおい判る。

相手は、この事態を目論んだ存在だ。

大蜘蛛の件はわからないが……少なくとも、数種の魔族を街に放ち混乱に陥れ、リチウム達を戦いの場に引きずり出し、クレープを傷つけ、トランまで巻き込んだ。

……みんなは、どうしているのだろう。

まだ戦っているのか。無事なのか。怪我なんてしていないだろうか。大丈夫だろうか。

自分ひとりだけがのうのうと、こんなところで回復してもらっている。

その理由も、隣の魔族がなんなのかも、みんなの状況も、判らない。

このまま魔界に居ては、知り得る事も……もう出来ないのかもしれない。

「……」

視界を閉ざす。

自分は、みんなのように魔石を使う事が出来ない。
だからといって、クレープのような特殊な能力を持っている訳でもない。
いつだって、自分は何も出来ない。それどころか、さらに事態を混乱に陥れるような真似ばかりしては周りに多大な迷惑ばかりかけてきた。
三ヶ月前――
いや、半年前。クレープが来る前、自分は独りだった。
進んで、一人になろうとしていた頃もある。だって、独りはとても楽だったのだ。誰にも迷惑や負担をかけない。楽しげな空気を、自分が入る事でぶち壊したりすることもない。
だから、一人増え、二人増え、
クレープ、リチウム、リタル、トラン。
三ヶ月前から、今のみんなで暮らすようになって。最初はとても戸惑った。
案の定、自分は迷惑や、負担をかけまくる。そのたびにグレープは謝り続けた。彼らの前から立ち去ろうとした。だが、彼らは「責任とれ」だの「逃げんな」だのブツブツと文句を言いながら、それでも決して離れようとはしなかったし、離れようとする自分を許しはしなかった。
溜息をつきながらも、仕方なくではありながらも、結局は「ほら」と伸ばされる手。
……そんなはずはない。
こんな自分、居ない方がいいのだ。
まぁ、焦らずともまた、すぐに別れが来る。
また、すぐに離れる。
また、すぐに――
……だって。
好きになっては、駄目なのだ。自分は。
そんなことになれば、きっと、恐ろしいことが待っている。

いつも漠然としたそんな不安に囚われていて。それがなんであるのかわからずに、ただ怯えていた。
……でも。いつからだろう。
それでも厭きずに伸ばされ続ける手を、躊躇いながらも、いつしか、握り返すようになったのは。
騒がしくも賑やかで、おもしろくて楽しい、いつまでもお祭りのような鮮やかな色を放つ。そんなみんなが騒ぐのを……見ている事が好きになった。
もっと見ていたいと思った。そんな小さな欲が、いつしか膨れ上がって不安を押さえ込むようになった。
それぞれの個性が強すぎて、一見、不協和音。だが、いつの間にか居心地の良いハーモニーとなっている。いつの間にか、全員が一緒に居ることが自然で当たり前のように感じる。
そんな中で、彼らはそれぞれの態度、それぞれの言葉、それぞれの反応を自分に示す。自分もここにいてもいいのだろうか。そう思わせてくれる、それはなんて心地よい。なんて温かな空気。穏やかな、夢。
いつからだろう。それは、自分にとってとても大切なものになっていた。
いつまでも尽きなければいい。放っておけばすぐにでも湧き出る不安に対抗するように、そう祈るようになった。
小さな小さな、かけがえの無いたった一つの世界。独りのままじゃ決して知り得なかった愉しさ。
両の掌で抱くように包み込んで。
このまま、このまま。
どうか、このままで。
決して壊したくなかった。だから、せめてじっとしていた。
少しでも自分が動くことで、
行動することで。発言することで、瞬きをすることで。息をすることで、何かを考え、何かを思い出して……そうした小さな衝撃が

積み重なってやがて、総てが崩れてしまう――それが、とても恐かった。みんなと笑い共にはしゃぎながらも心のどこかではずっとそんな恐怖が渦巻いていた。
だって。
何故なのだろう。やっぱり自分のやっている事は――ここにいることは、とても、いけないことのように思えてならなかったから。
嫌だったんだ。
愛した世界(もの)が、バラバラに砕けてしまう事。
底なしに、怖かった。
けれど同じ位に。
自分が、世界の中に存在していることが、堪らなく嬉しかった。
きっとそれだけでもう。十分だった。

……ふと、
煩いくらいだった、賑やかな騒ぎがぴたりと止んだ。

瞳を見開く。
赤い瞳は、もう誰も映さなかった。
今は、一人だ。
戻ったんだ。
もう、誰も居ない。
これは、どこかで恐れていた、……そしてどこかで予感していた事態だ。
自分はここから逃れる術を持たない。
持たない……はずだったのだ。
今までが奇跡だったのだ。
例えば、自分がこのままみんなの下に戻る事が無くても……その方が、良いのではないか。
自分ひとりが居なくても、彼らは決して困らない。
少しの寂寥と、どこか、安心感。

この安堵は、これ以上の禁忌を犯し、バラバラになってしまう――その不安から解放されたためなのだろうか。
けれど。
それは、なんて……

……と、唐突にどこからか爆発音が耳を劈いた。
近い。
球体の中で振動は感じなかったが、それでも景色は揺れ、音は十二分にその威力を告げた。

「……今のは……」
「始まったか」
「え……」
「おまえの仲間だ」

淡々とした鷹人の声に、赤いルビーが大きく見開く。

「ここに来た事は把握していたが……まぁ、そう長くは持つまい」

3

細身の銀の銃を構えたリタルが舌打ちした。
総ての魔力弾が寸前で見えない障壁に跳ね返されてあさっての方向で発動してしまう。

「魔族の分際であんた卑怯よ！　正々堂々自身の能力で戦いなさいっ」
「〜なろ……っ」

吹き飛ばされ無理な体勢で着地するリチウム。なおも地を擦り後方へと下がり続ける身体を両手両足を使って威力を殺ぐと再度、突っ込む。
その速度は、限界まで引き絞られついに放たれた弓の如く。流れる銀は残像を残し――その左手に従えているのは、『死球』だ。

「無駄だ……」

頭部は犬、身体は成人男性を黒く塗り潰した……という、まるでテーマパークのキャラクターの実写版（リアル）のような姿をした生々しい印象の魔族は、リチウムが飛んでくる方向へスッと手を翳した。
その動作のみで生じる見えない障壁。同時にリタルは、魔族に流れる崖上からの魔力を感知する。

「ぐ……っ」

障壁にまともに衝突したリチウム。しかし衝撃を堪え場に踏みとどまると、なおも左手を魔族へと伸ばした。
一押し、さらに一押し、無が障壁を消し去る。掌と共に徐々に減

り込んでいく『死球』が徐々に小さくなって――

「～ぐあ……っ」

「リチウム！」

届くことなく、無が消失。弾き飛ばされる。

転々と地に強かに身体を打ちつけ、聳え立つ崖の岩肌に背をたたきつけて、ようやく勢いが止まった。

「～ちきしょ……っ」

身体を岩壁に減り込ませて、それでもリチウムは飛び起きた。

ただ、ダメージは相当なものらしく、大きくよろけた身体を踏ん張った両足と前方に着いた片手でなんとか支える。

「リタル！」

血を吐き捨て搾り出すように叫べば、リタルが頷いた。

左手のエメラルドの輝き。

魔族が訝しげに思うよりも早く、

「～あんま調子に乗ってンじゃねぇぞ犬野郎！」

リタルの『転位』で瞬時に移動を果たし魔族の背後で叫んだリチウムが、自分の一・五倍はあるかと思われる魔族の大きな背に向けて『死球』を放とうとする。

掌が魔族の背に届く、寸前、

「甘い」

「～うお！？」

突如、変な声を上げたリチウムがその手を引っ込め、仰け反った。
自分と魔族との境の空間に歪みが生まれたからだ。あのまま突っ込んでいればどこか他の空間へ飛んでいた事だろう。

「そんな身なりの割りに反射神経は魔族並みか……つくづく奇怪な生体だ」

大きくバランスを崩したリチウムの脇腹に魔族の強烈な回し蹴りが飛んだ。放たれた脚は障壁の魔力を纏っている。身体に当たる寸前、蹴り以上の強烈な衝撃がリチウムを襲う。

「……〜っ」

触れることなく。その身に纏った魔力だけで、魔族はリチウムを一直線に壁へ吹き飛ばした。
即座にリチウムの間近へ転位したリタルが、恐ろしいスピードで飛んでくるリチウムと岩壁との間に掌サイズのクッションを投げた。
と、それは一瞬で巨大化を果たすと、リチウムの身体を衝撃毎受け止め、

「〜おぉ！？」

凄まじい弾力で百八十八センチを跳ね返す。
役目を終えたクッション……いや、マットは何故か忽然と消え去り、かくしてリチウムはリタルの真横に顔面から着地した。

「感謝してよね助けてやったんだから」
「……微妙」

蛙のような体勢で地に顔をめり込ませたリチウムが、赤くなった顔面を上げて狼人を凝視する。

まじまじと観察すれば頭部の長い鼻先や大きな牙、目つきの凶悪さからは犬というよりも狼を連想させた。

かつて倒してきた黒い犬魔族とは違い、頭部はふさふさとした灰褐色の毛に覆われている。が、人体を模した筋肉質な肉体は犬魔族同様に黒い皮膚で覆われ、血管のような毒々しい赤の筋が複雑に絡み合い表面を伝っていた。

「……てっきり人体が犬のマスク被ってるだけかと思ったが……まさか本気でオ犬サマだったとは。

間違いなく、あのえらそうな犬達のオヤダマだなありゃ」

地に伏せたまま、口内に侵入していた砂を吐き捨てるリチウム。

目を細めて今さらな悪態つくと、

「親玉って言うよりかは……オリジナルって言い方の方が合ってると思う」

「なんだそりゃ」

返す声にしかしリタルは答えない。

会話が聞こえているはずの魔族――狼人もなんの反応も示さなかった。悠然と、品定めをするように対峙する二人を眺めているだけだ。

気に食わなかったらしく、眉根を寄せるリチウム。

「しっかしまぁ……『死球』を放てば俺らの空間に飛ばされそうだし、零距離からは打たせてくんねぇし。こりゃちょっとシンドイかもなぁ……」

地に伏せている傷だらけの強靭な肉体にチラリと視線を落すリタル。

「珍しい。あんたが弱音吐くなんて」

「弱音？　冗談」

言うと口端をニィっと上げたリチウムはようやく身を起こした。

顔にかかっていた長い銀髪を掻き揚げる。

野性味溢れる青い瞳は陰ることなく未だ健在だった。

「それでこそ楽しみがいがあるってもんだ」

狼人はそれを見下ろすと満足げに微笑んだ。乱杭の黄牙が剥き出しになる。

「そういえばまだ歓迎していなかったな……人界ではこういうのか？　魔界へようこそ。憐れな存在たちよ」

「〜なぁにが、ようこそ、だスカシ犬。人間様歓迎すンなら人間様流の持て成し方を勉強してこなくちゃ駄目だろ？　しかも俺様を歓迎するってんだ。ちゃんとゴチソウ用意して待っててもらわねぇとな」

「郷に入っては郷に従え、とはおまえたちの言葉だろう？　魔界に来たからには魔界流の歓迎を受けてもらわねばなるまい」

「びっくり。なんでンな言葉知ってンのよ」

「これでも人界歴は長い。あの衰弱した蜘蛛爺と違ってな……と。まぁそれは置いておいて」

そこまで言い終えるや否や、狼人はリチウム達に向き直る。

その瞳の奥が光った気がしてリタルは眼を細めた。

「正直、おまえたちが魔界(ここ)まで来るとは思わかなった。かの主の担い手と、『魔眼』の娘よ」
「リチウム・フォルツェンドだ」

間髪入れずに訂正を求めるリチウムにリタルがジト目を向ける。

「あんたね……」
「我の目的も、能力のこともすでに把握しているのか？」
「ったりめぇだろうが。
てめぇの目的はグレープだろ。能力だってすでにコイツが解析済みだ。なぁ？」
「……っ」

同意を求めるも、リタルは無言だった。
……いや。どことなく、なんとも気持ちの悪い違和感を覚える。
第一、あの魔族は……自分を見ていないではないか。

「……リタル？」

不審に思い、リチウムが彼女を振り返る。
そして異常に気づいた。
彼女の柔らかそうな頬に流れる一筋の汗。
全身が、僅かに震えている。

「気づいていたのなら、我と対峙した時点で既におまえたちの敗北が決定している事も十分に承知していたはず。死ぬと解っていて乗り込んできたのか。愚かな」
「……ソレ用に魔界(こっち)に来る時に前もってリチウムに頼んで張ってもらった『死球結界』だったんだけどね……通じなかったか」

そう。
現在、リチウム達の周囲には、リタルから言われるがままにリチウムが張った『死球』でできた薄い膜が在った。
彼女曰く、「保険よ」だそうだ。
リチウムは、魔族からの攻撃を防御する為のものかと単純に考えていたのだが――他にも意図があったというのか。
リタルの顔色が青い。

「おい、……どうした」
「ごめん。リチウム。
……足、引っ張る」

4

以後リタルは微動だにしなかった。
いや、出来ないのかもしれない。

「くそ……っ」

リチウムは狼人とリタルの間に立った。
リタルの肢体が微妙に震えているのは恐らく狼人になんらかの攻撃を受けている為だと判断するも、それ以上の事がリチウムにはわからない。

「……リチウム。
あたしたちが向こうで倒した犬どもは全部、コイツに身体を乗っ取られた末路よ」

背にかけられた甲高い声に、妙な違和感を覚えた。自分の考えと彼女の言葉は、どこか齟齬する。

「……操っていた訳じゃないのか？」

狼人から視線を逸らすこと無く問うリチウム。リタルは満身創痍の大きな背中を見上げながら答えた。

「……ニュアンスは合ってはいるんだけど。正確には、もっと違う言い方があると思う。
他者の人格を無理に縛り付けてその肉体だけを遠隔操作する――まんまファーレンの能力だけど――には、常に魔力で相手の身体……頭なんかを覆っておく必要があると思うの。

けど、犬頭、犬胴体に纏わり着いている魔力なんか、『魔眼』を持ってしても視る事は出来なかった。『魔眼』で視る事の出来ない魔力なんか無い。よって、奴に他者を操作する事は事実上不可能よ。

あの犬頭、犬胴体達は個々で動いていたという事になる」

「ンならなおさら『オヤダマ』で合ってンじゃねぇか？　子分従えて俺等を陥れたんだろ？　てめぇは魔界(こっち)で黙って眺めていただけっつう」

「あいつら。数を減らしてまであたしたちの能力を見極めようとしてたでしょ？」

「……それがどうした？」

「頭数減らされるの、黙ってみてるかしら。普通。

ヤバイとなったら応援とか呼び寄せるんじゃない？　ほら、転位とか出来るんだし。途中で逃げても良かったのに。

誰かの手を借りる事や逃走なんてプライドが許さない……ってのが魔族というものなら、そもそも人間(あたしたち)に倒される事を良しとするかしら。

大蜘蛛を思い出すとどうもしっくりこないのよ。アレの考え方が魔族の基盤だと考えるなら、こいつらのやってきた行動――人間に倒されてやるってのは死ぬ事よりもよっぽど堪えられない事だと思うわ」

「……むぅ」

「あの犬魔族たちは、正気じゃなかったか、自殺願望でもあったのか。やけに素直に人間(あたしたち)達に倒されてくれたでしょう？

そして……思い出してよリチウム。奴等、痛覚が無かったじゃない」

「……確かに。外灯で打ちつけようが、手足寸断しようが、動じなかったな」

「傷を負っても反応したのはその一瞬だけで、後は他人事みたいだったでしょ。それで、ピンときたのよ。本当に他人事だったんじゃないかって」

「他人事？　……あいつら、あの狼野郎の分身だったってのか？
それこそコピーだったとか。それならどんだけ死のうが本体が無事なら問題ない」
「……どうかしらね。それにしちゃ、奴等の持っている魔力はバラバラだった。火、風、土、雷。でしょ？
なら、断じて奴等は同一じゃない。犬頭、胴体魔族の個々と奴とはそれぞれ全く別の存在。だけど……その意思だけは同じ。
あの狼人は、己の精神と同じ精神を魔力で創る事が出来る……簡単に言うなら精神をアメーバみたいに分裂させて通常1肉体につき一つの精神を、二つ三つと増やす事が出来るんじゃないかしら」
「アメーバだ？」
「そう。アメーバは分裂菌植物。単細胞生物が分裂して数を増やすっての、聞いた事あるでしょ？
で、本体のソレと全く変わらない精神を、なんらかの形で他の肉体に植えつけて、同時に元から在った精神を侵食し、その肉体を完全に支配する。
そうすると肉体、魔力は違えど、意思は同じってゆう、まんま『自分2号』やら『自分3号』やらを作れるでしょ？
だから分身じゃなくて……『分心』ってとこ」
「……なるほどな。
それだと確かに『操る』は違う。
考えは同じでも立派に『個人』な訳だ。
……しかしンな魔力持ってンなら、あの狼野郎はどうしてあの時俺様達に直接『分心』仕掛けなかったんだ？
そっちの方が手早く鎮圧出来ただろ？」
リチウムの問いにリタルはしばし思案する。
「……犬頭、犬胴体等の持つ本来の魔力は倒した時に結晶化した火、風、土、雷の魔力だった。最後に現れた犬胴体ですら倒して出てき

たのは水の魔石。断じて『空間操作』なんかじゃなかった。
けど不思議なことに、元来の魔力を発動させていたのは犬頭のみ。犬胴体の魔力は犬頭と比較すればとても弱くて、纏った『空間操作』の魔力で見えなくなっていた。一度も使おうとはしなかったし。
……推測だけど、頭と胴体。あれ、元は引っ付いていたんじゃない？　それを無理に引き千切って二つの戦力とした。
あたしたちが倒したのは、犬頭四つと、犬胴体一つ。
グレープたちの元にも、ほぼ同時刻に奴の『分心』体が複数行ってると思う。だから、あの子たちの所にはきっと、あたしたちが倒した『分心』体の対となる犬魔族が……だからええと。犬胴体が四つと、犬頭が一つ、現れたんじゃないかしら。
そう考えると、あたしたちに直接手を下さなかったのは単純に……」
「限界があるって訳か。『分心』で作れる『自分〜号』の数は」
「だと思う。
恐らく、目的であるグレープには『分心』を仕掛けてはいけない……なにか理由があったんじゃないかしら。もしくは、仕掛けたくても出来なかった、とか。
だからと言って、あの子の周りに居るあたしたち全員に『分心』仕掛けようとしても、あたしたちはともかくとして空飛ぶ非常識遊霊（クレープ）なんてのがいるからね。ハナから肉体の無いクレープに『分心』が通じるとはとても思えない。逃亡された時を考えてより多くの兵力を必要としたんでしょう。だから、奴は魔力をほぼ限界まで使用して――『分心』体を引き千切ってまで場に多数の兵を配置しておく事にした。
それに、『分心』なんて能力。普通に考えても仕掛ける対象によって行使する魔力量も違うと思うし。いざあたしたち一人一人に『分心』しかけて、足りませんでした、じゃ意味ないでしょう。
大体そんなことすれば天使にだって感づかれると思うし。人界に魔族が潜んでた、しかも人間に直接危害を加えている、これは条約

違反だーって天界との全面戦争に成りかねないじゃない。……まぁ今回のことだけでも天使が騒ぎ立てるとは思うけど。だから、下手に博打できなかったんじゃないかしら。
だけど今や『狼人〜号』の何体かはあたしたちが倒した。だからその分の魔力が奴に返ってきて……」
「『分心』されちまったわけな……おまえが。
それで身体が動かない、最悪俺様に攻撃するかもしれない、と」
「……ごめん」
「しかし、そこまで解ってたんなら、なんで最初から言わなかった」
「……言ったらあんた。あたしに『来るな』とか言うでしょう？」
「……どうだかな」
「ここに来る前にあたしに散々『足手まといだついて来んな』なんてぬかしてたのは何処のドイツよ」
「ここの俺様だ」
「〜知ってるわよ！
……普段は超が着く程面倒くさがりで動きたがらないくせにこういう時だけすぐ格好つけたがるんだから……〜ってか、あたしだってねぇ……っ」
リタルはそこで一度言葉を飲み込むと、しばしの間言葉を選んでいたようだったが、
「……あたしだって。助けたいのよ。……グレープを」
落ち着きを取り戻した声で、自分を護る背中に向けて、静かにそう告げた。
「別れはすんだか？」

狼人の声が、近くで聞こえた。
リチウムの大きな背中が視界を遮っていたが、辛うじて『魔眼』を行使し続けているリタルはその位置を捉えることが出来る。
……さて。奴はどうでるつもりか。

「後ろの人間の言っている事は、大方合っている。『分心』か。言い得て妙だな……」
「……どうするつもりだ？」
「判りやすいように、状況を教えてやろう。
我が魔力は、他人の精神に己の精神（魔力）を植え付け侵食し、身体能力の異なる複数の『我』を作り出す事が出来る。植えつけは対象の目を視、念じる事で実行できる。……そうだな、『分心』と呼ぼうか。
おまえの後ろの人間に、今、『分心』で我の精神を植えつけている。
ただし、完全に、ではない。微量犯した程度で留めている。今は身体の自由がきかないだけだ。しかし、我が念じれば侵食は再開し、数秒も経たぬ内にその精神は完全に消失する。後は生命が途絶えるまでその身体は『我』として活動することに……」

狼人の愉し気な口調が、思わず身震いするほど冷え切った青の眼光で遮られる。

「……回りくどい野郎だな。つまりはリタルは人質だって言いたいんだろ？
さっさと言え。要求はなんだ」

これまで一度たりとも聞いた事がない、ぞっとする程低いリチウムの声に、リタルは一瞬、耳を疑う。

「……『死球結界』とやらを解除してもらおう。今すぐ」
「……」

一瞬後。
リタルの耳が、リチウムの舌打ちと同時に微かな空気の振動(ふるえ)を拾う。
同時に、リチウムとリタル、二人の間に不可視の障壁を作っていた『死球』の魔力が途絶えた事を彼女は識った。
気を取り直した狼人が満足げに鼻を鳴らしてリチウムに歩み寄る。
「つくづく回りくどい事しやがんな……面倒臭ぇ」
「何？」
「……なんで俺様に直接仕掛けないっつってんだよ」

厳しい双つの青光が対峙する狼人を貫き続ける。
対して狼人はしばしの間の後、聊か間の抜けた声を返した。
「……その質問は、冗談と言うやつか？」
「……は？」

眉を吊り上げたリチウムの様子をしばらく眺めると。
「……これは驚いた。本気で理解していないのか」

至極意外そうな声をあげた。
「意味がわからん。何が言いたいんだてめぇは」

苛つきを露にするリチウムを狼人は改めて上から下まで眺める。

「……なるほど。耄碌していたとはいえ蜘蛛爺が気づかないわけだ」
狼人は何かを思案しているようだった。やがて、口を開く。
「事は単純だ。おまえに『分心』を仕掛けた所で徒労に終わるというだけの事」
『徒労……？』

リチウムと、リタルの声がハモる。
彼らの様子はやはり狼人にとって予想外のものだった。……いや、正直呆れた。
自覚が無いとは。
だとすれば、どうして共に行動していたのか。
……誘導する何者かがいるのか。

「……まぁ、結局。その者の行動は総て無駄だったと言う事か」
「……なにをごちゃごちゃ訳のわかんねェ事を……」
「……そうだな。
そろそろ、終わりにするか」

狼人は静かに言い放つとその屈強な腕を伸ばす。
目前に居るリチウムの首を掴んだ。

「……！」

リタルが息を呑む。
己の中に、自分とは違う意思が、確かに存在している。
身体が、勝手に動いてゆく――

「さて。リチウム、とか言ったな。

楽にしてやる前に最後の質問に答えてもらおう」
「……」
首を掴まれて、なおも目の前の狼人を睨みつけていたリチウムは、背後の気配をも感じとっていた。
震える銀の銃口が、リチウムの後頭部を狙っている。
「……く……っ」
構えた細腕がぶるぶると、激しく震動していた。
リタルの抵抗の証であろう。
「……」
改めて、リチウムは目の前の狼人を凝視する。
この距離だ。『死球』で消し飛ばす位訳無い。
だが、たとえ発動までの時間が数秒かからなかったとしてもそれでは遅過ぎる。奴は今、念じるだけでリタルを殺せるのだ。たとえ次の瞬間には消し飛ぼうとも、こちらに少しでも魔力の流れを感知すれば、奴は報復として迷う事なく実行するだろう。結果、リタルの精神は消失してしまう。
しかし、このままでは――
眼前で放たれる猛烈な殺気を涼しい表情で受け流して、狼人は口を開いた。
「――答えろ。
……おまえは一体何者だ」

5

鷹人の言葉に、大きなルビーさらに見開かれる。

「……なか、ま……？　……リチウムさんたち、が……？」

呆然と、掠れた声でグレープが呟いた。

なんでこんな所に……？

自分と同じように連れてこられたのだろうか。

もしくは『死球』を奪われて、それを取り返しに――

――違うだろう。思い出せ。

彼らが、どんな人間だったか。

「おまえを助けに来たんだろう」

代弁するような淡々とした低音を耳にした。

「……まぁ、無駄な足掻きだったな」

「無駄？」

「男はもうすぐ死ぬ」

「……！？」

「……一体おまえは何者だ」

長身の自分が見上げるまでの強靭な肉体。

狼人の質問に対し、首を鷲掴みされたまま厳しい目つきで睨んでいたリチウムは、静かに口を開いた。

答えはシンプルだった。

「リチウム・フォルツェンド様だ」

「……あんたね」

依然、リチウムの頭に銃口を向けたままのリタルがジト目を向ける。

身体の自由が奪われていなければ危くずっこけるところだった。

「言っとる意味がわかんねェんだからしゃーねぇだろ……」

「おまえが『死球』と呼んでいるソレは……ただの石ではない」

「そんくらい知ってら。禁術封石だろ」

「『禁術封石』か……　それは天使が定めた枠に過ぎない」

「……あん？」

見上げた狼人は、不可解な……まるで汚物でも見るような眼で『死球』を視ていた。

「ソレは決して操れる類のものではない。維持するだけでも相当な魔力が要る。万一、開き、中身を引きずり出し……現界においてソレを支配する事が可能な者が居るとすれば、それは我等のかの主のみ。

ソレの存在を識った我等は、ソレをかの主だとばかり思っていた。蜘蛛爺もそう思っていた。だが。それは勘違いである事に我等は気づいた。こうして間近で直視すれば解る。ソレはかの主ではない。ソレは……」

ここで、狼人は言葉を切った。長いようで短い沈黙の後、狼人は自分を見上げる青い双瞳を直視した。

「だが……ソレを所持している貴様は断じて、かの主ではない」
「……？　そんなもん俺様に言われても……」
「その髪。その目。その肉体。その在り方。ものの考え方。口調ですら。どれも違う。
貴様が、かの主のはずはない。我は認めない」
「……」
「それでも滲むのならば、それは、ある二つの結末を呼び寄せてしまうのだ」

眼から、奥底を覗くように。狼人はリチウムを凝視する。

「答えろ。
貴様はソレを、一体どこで手に入れた」
「……」
「……リチウム……？」

重厚な空気。
沈黙の中、戸惑うような声をリタルが漏らした。
目の前の大きな背中が動揺しているように見えたからだ。

「我がこの任務を引き受けたのは、主に命令された――それだけの理由ではない。
ただ、かつて、かの主を支えていた者として、事の詳細を得たかったのだ。
貴様は何者だ。
……先程の様子からして答えられないと言うのも無理はない。そうであれば、もう我は貴様に用が無い。
どちらであるにしろ、ソレが単独で存在している。故に我等の望む結末は訪れないのだろう。

実のところ、我にとって貴様は視るにも耐え難い存在だ。この場ですぐに始末する。
貴様の代わりなど、すぐに現れるのだろうからな……」

「……出して……ください」

鷹人は僅かな鈴声を耳にし、状況の監視を中断してそちらを振り返った。
少女は、奇跡の白濁球の中で、小さく蹲っていた。
その細い肩は、僅かに震えている。
泣いているようにも見えた。
だが……。
少女はやがて、両の拳を硬く握る。

「〜出してください」

次の瞬間、顔を上げた、俯き加減のその瞳は――強靭な意志を灯していた。

「ここから、出してください」
「……出たければ」
「……」
「我は止めはしない。出たければ自分で出て行くがいい」

鷹人の眼光が、グレープの奥を捕らえる。

「……え？」

鋭利な褐色の眼に、少女の戸惑いの表情が映る。

「我は止めない。出たければ自由に、自身の力で出るといい」
「……わたしの……力？」
「主は言っていた。今のおまえはそれが出来るはずだと」
「わたしには、力なんて」
「出来なければそれでもいい。このまま連行するだけだ」
「……、リチウムさんたちは」
「死ぬだろう。恐らくは後数分も無い」
「……どうすれば、いいんですか？　教えてください」
「我は方法など知らん」
「……そんな」
「主は言っていた。
おまえは知っているはずだ」
「……」

……何を、言っているんだろう。
わたしが、知っている……？
わたしの力で、ここを出る……？
この空間が何であるのかもわからないのに……？
ふわふわした感触。
白く霧がかった狭い世界。
解っているのは、今自分が居るこの白濁の世界はやけに心地良い……異様なまでに魅惑的なものであると同時に、元の状態に修復する——元の状態に戻すという特殊な空間だという事だけ。
それに。もしも、ここから出る事が出来て彼らの元へ駆けつけた所で、自分には何も出来ないだろう。
いや、さらに足を引っ張ってしまうかも。
——それでも。
グレープはぎりっと歯を食いしばった。

それでも自分は、なんとしてでも行かなければならない。
だって彼らは自分を助ける為にこんな所まで来たのだという。
危険なめにあっているという。その事実だけでもう居ても経っても
いられない。それに。
予感がするのだ。
それでも今を何とかしなければ、きっと自分は後悔する。
例え彼らが無事でも、もう永遠に会えない。そんな気がした。

「……っ」

外と内の境界に両手を着け、押してみた。……びくともしない。
境界を叩いてみた。……やけにふわふわしたそれは衝撃を吸収し
てまるで手ごたえがない。
さまざまな部分で試してみた。両側面、背後、天井、地。……同
じことだった。
何度も何度も試す。
何度も何度も、しまいには必死に。これは焦りからくるのだろう
か、全身から大量の汗をかきながら。
絶望的な程、手ごたえが無い。
それでも叩く。

鷹人の眼はその様子を瞬きもせずに、捉えていた。

地を叩いて叩いて、何の感触が無くても、それでも叩いて――そ
うしていつしか、
視界が歪んでいた。
何の力も無い。
助けてもらってばかりなのに、何の助けにもならない。
迷惑ばかりかけている。
――今、こんな時でさえ。

役立たず。

誰かが言った。

いなければいいのに。

誰かが言った。

おまえ、いらない。

おまえがいなければ、こんなことには――

「……〜っ」

地を叩き続ける手に雫が降る。

また自分は、何も出来ないのか。

一滴。

また自分は、何もしてやれないのか。

また、一滴。

そうしてまた自分は、壊すのか。

そうやって、零すのか。

雨のように、ぱらぱらと。

大事な、大事な

大事な存在を――

おまえがいなければ――

「……うぅ……っ」

悔しい。
自分だって、そう思う。
そう思っているのに、それを他人に言われてしまったら、なんだか、とても悔しい。
責められたところで、一体どうすればよかったのか。
どんなに自分が自身を責め抜いたところで、狂って壊れてはくれなかったのに。
望んだところで、消える事なんか、許されなかった私は。
言われなくても、本当に消えてしまえたらと、本気でそう思ってた。
願った。……それは、逃げだったのかもしれない。
だって。そうすれば、もう誰にも不快な思いをさせなくて済むのだろうから。
あんな顔をさせているのは、自分。
嫌な思いをさせているのは、自分。
――見たくなかった。だから……思った。

わたしがいなければ、
みんな　こまらなかった？
みんな、わらえるようになるの？
――あのひとも……？

「……っ」

一体何が悲しいのか、もうそれすらわからない。
でも、蹲って泣いているとすぐに横から自分の声が聞こえてきた。

そうしてまた、己が可哀想だと涙を流すのか。

……そうだ。
何故、泣く。
自分のために泣いているのか。
自分が可哀想だとでも、思っているのか――

ゼンブ　オマエノセイナノニ。

興醒めて、涙も止まる。
こんな自分。
己の為に涙を流している自分は、どうしようもなく滑稽で――
そうすることしか出来ない自分は、なんだかとても悔しくて――
なんだかとても、狡い。気がする。

けど、そう思う自身は、
そうとしか思えない自分を見る事は、
そうやって、自分を責め続ける姿は、
きっと、とても哀しい。

「……らない……っ」

――こんな、
こんな自分なら――

「いらない……っ」

叩く。

「いらないっ」

叩く。

「〜いらない……っ」

叩く。

「……っ」

――それでも。

こんな自分に、手を伸ばしてくれた人がいる。

「……〜っ」

こんな自分に、笑いかけてくれる人がいる。

「……〜さ……っ」

こんな自分を、見捨てないでくれる人がいる。

「……〜ムさん…っ」

どんなに迷惑をかけても。

どんなに役立たずでも、

どんなに、価値がなくても、

それでも、彼らは、こんな自分にも見せてくれた。
目が覚めるような、色鮮やかな世界。
強い強い、青の眼差し。

それは、消えたはずの記憶を思い起こさせるには十分過ぎた。

――まだ、とてもとても昔。
遠い記憶。
何も無かった空の頃の自分に、
それでも、彼は、こんな自分に、告げたのだ。

「　　」

世界が暗転する。

『……いいの？』

小さな自分が、蹲っている自分を見下ろしている。
そう声をかけられ、顔を上げた。

『いままでは　わたしがわたしを　とめていたの　だって　ここはあぶないから』
「……」
『そういわれたのも　おぼえていない？』

「……」
『こんどこそ　いいつけを　まもるんじゃなかったの？』
遠い昔の小さな自分の、曇りの無いただ真っ直ぐな視線がわたしを貫く。
鈴の鳴るような高く細い声で、わたしに問う。
『こんどこそ　あぶないよ　それでも　いいの？』
「……、……だって、」
……いつだっただろう。
告げられた事がある。

――これから、忙しくなる。

普段は見たことも無い、ひどく疲れた表情の男を見て、思った。
ならば自分は、助けたい。
なんの力が無くても。せめて、支えたい。
僅かでもいい。
全力で、支えになりたい。
あの時、確かにそう思った。
「……たい……っ」
わたしを抑えるわたしの声に、もう耳を傾けない。
だって、総てが消えてしまった今――現在（ここ）にも、この胸を震わせる衝動が確かに在る。

自分以上に護りたい存在がいる。
あの時のように。

私を呼ぶ声を、二度と、裏切らない為に。
もう二度と繰り返さない。後悔したくない。そのために。
自分にだって何か出来る。

可能性を――

「……信じたいの……っ」

声を上げた、その時。
その身を掻き消される寸前に、それでも小さな自分は笑ってくれた……気がした。

――瞬間。強い光が暗闇に差し込んだ。

迷いを消し、導くように自分を照らす、
青い、青い、
青い、光輝――

「～……リチウムさん……っ！」

光は再び降臨する。

それは、穏やかな癒しの色。

晴れた日の空。
海を思わせるクリアブルーの輝き。
総ての者を照らし満たす、温かなそれは、確かに
目覚めの光。

発光の中、艶やかな青い髪がさらりと揺れた。
伏し目がちのルビーが数回瞬いた。拍子に光を反射する雫が数滴零れる。
重力を感じさせない、見惚れる程に優雅な動作。
白濁の球体が消失し、青の光の中心。場違いな程清浄な空気を纏った白く輝く少女が、今、地に降り立つ。

鷹人は逸らすことなく視界に入れ続けていた。
留まっていた光はやがて、天に昇りゆく
白い光柱。
それは、過去、自分が見た光景に酷似していた。
奇跡のような、夢のような。
ほんの、半年前に――

「……この光は」
「……ひかり？」

狼人の正面。リチウムたちの背後。
全員の意識が、突如現じた崖上の青白い光に向けられる。
リチウムは、誰かに呼ばれた気がして、背を照らす温かな光に呟

いた。

「……グレープ……？」

6

総ての光が天に昇り、辺りは平常に戻る。

しっかりと地を踏みしめたはずの足。だが、膝がひどく震える。
それに驚くよりも先に大きくよろめいてグレープは派手に転倒した。

「……っ」

露出していた肌を乾いた地に擦る。
痛みに歯を食いしばってなんとか身を起こすと、震える腕と足でなんとか立ち上がる。不安定な体勢のまま辺りを見渡した。
ここは荒野。岩石だけの世界。肌に感じる空気は乾燥していて、どこか淀んでいる。
先程のような、心地よい世界では決してない。すぐそこに危険は在る。
だが――自らで選び、進んだ。
だって、確かにここに居る。
――気配がする。

「～リチウムさん……！！」

微かに響いた鈴の音に、リチウム達はすぐに反応した。

「～リチウム！　グレープの声！！」
「……やっぱ近くにいたか……！」

微かに響く彼らの声を頼りに、グレープはよろよろと歩き始めた。

「……？」

身体が、どこかおかしい。

痺れているように、何も感じない。

――いや、全身が異様に軽いのだ。

感覚が掴めない。

これは、本当に自分の身体か。

如何なる動きに対しても、謙虚なまでに自身を襲う小さな違和感に首を傾げながらもなんとかグレープは崖淵までやってきた。

遥か眼下に――魔族と対峙しているリチウムとリタルの姿が見える。が、その光景にグレープはギョッとなった。

これは何の冗談か。魔族に囚われたリチウムの背後で、リタルが銃を構えているではないか。

こんなのまるで悪夢だ。グレープの思考はそこで総て飛んだ。

「リチウムさん！　リタルさん！！」

叫ぶや否や。ぐらりと揺れる身体。崩れるように地に沈んだグレープの身体。

――落ちる…？

辛うじて倒れる前に両手を崖淵に着くと、再び身を乗り出して全身で叫ぶ。

「大丈夫、ですか……！？」

「無事か！　グレープ！」

「グレープ！！　あんた大丈夫なの？　怪我してない！？」

三者三様、互いの身を案じる声がほぼ同時に飛び交う。

グレープは苦笑した。あんなとんでもない状況でさえ彼らの声はいつもの彼らだった。緊迫した状況下で何故か気が緩んだ。

「はい……っ　はい、大丈夫ですっ」
「よっしゃ！　そこにいろグレープ！」

喉を締め付けられ、それでも渾身の力で叫んだリチウムは、眼前の敵に集中した。
向けられた強い眼光に、狼人は思わず怯む。

「俺様がなんとかしてやる！」
「……いやです……っ」

間髪入れずに降って来た鈴声にずっこけるリチウム。

「～な、何……っ？」
「いやなんです、私……もう、
……見ているだけでは、駄目なんですっ　私だって……何か……っ」
「……？」
「……何か、したいですっ」

それは、全身から搾り出したような、悲痛な叫びだった。

「……グレープ……？」

リタルの驚いたような声があがる。
大人しい彼女が他者の意見を遮ってまで自己主張するのは、三ヶ月間共に暮らしてきた中で初めての事だった。
呆けていた、その時――

リタルの頭の中で、すでに全身を支配していた何かが再び蠢く。

「……っ」

瞬時に全身を伝う悪寒。

リタルの抵抗も虚しく、そのか細い指が……今。引き金にかかった。

銃口の先は、狼人に首を掴まれ身動きの取れないリチウムの後頭がある。

気配に気づいていないのか、リチウムはグレープの言動に対し不敵に笑んでいた。狼人の口端が、僅かに上がる。

「上等だ！　……ンじゃ」

「はい」

「そこで祈ってろ！」

「……え……？」

訝しげな声を上げたグレープの耳に、

「〜リチウム避けて！！」

リタルの悲痛な声が劈いた。

一瞬後、乾いた銃声が轟く。

「……っ！」

少女達の視界の中心で、リチウムの全身が、大きくブレた。

「リチウム！」
「～リチウムさん！！」
確かな手ごたえに狼人は勝ち誇る。
が、その表情は一瞬にして凍りついた。
「なに……？」
狼人の視界の隅で、崖の上から転げ落ちる何かが見えた。
「～きゃあ……っ！！」
思わず身を乗り出したグレープがバランスを崩して崖から落ちたのだ。
自身の仕留めた男の最期に興味を失くしたか、それよりも重要な何かがあったか。狼人の眼には、既にリチウムは映っていなかった。
「～馬鹿な、奴は一体何を……！」
何事かを小さく呟いて、リチウムを拘束したまま別の腕を上げ……かける。
しかし、
「……この……っ」
たった今後頭部を撃たれ脱力した男が突如活力を取り戻したかと思えば、
「～犬野郎っ！！」

渾身の力で狼人の腹を蹴りつけ力任せに豪腕から逃れる。

リタルと、狼人は、目を丸くした。

呆然と、未だ動き続ける彼を視界に入れている。

思考が追いつかない。

……生きている……？

「……そうか貴様！　体内で発動させたか！」

そう。

魔力を発動させる時、全身を流れる魔力は体内から体外へ、その出口に向かって恐ろしい速さで流動する。狼人はこの流れを感知する自信があった。ましてや『死球』を発動させる程の強大な魔力量である。感知出来ないはずがなかった。

微量でも魔力の流動が感知されれば、リタルが消されてしまう。考えた末リチウムは、『死球』を体内で発動させたのだ。

それも、最小限の魔力量で。

魔力は通常時にも体内を流動している。彼はそれを利用した。

狼人がグレープに気をとられている隙に、リチウムは背後に意識を集中させていた。

自身に向かって放たれる魔弾は、着弾後対象内で魔力を発動させる代物だ。だから、勢いを利用して着弾と同時に弾を消し去ろうと考えた。

リタルの叫び声。一瞬遅れて、目にも留まらぬ速度で空気を裂き何かが接近する。その、魔力を秘めた極小の弾の気配を、リチウムは超人的な感覚で感知する。

瞬時に、予想される着弾地点――体内に在る魔力だけを認識。
意識を集中させ、到達した異物が体内に侵入する瞬間、体内で『死球』を平面展開。限りなく薄く張った『死球』の網にかかった異物の、それでも奥深く侵入しようとする力を利用して、リチウムは体内の脅威を完全に消滅させる事に成功した。

他人の頭部に触れその内部で『死球』を発動させその人物の持つ記憶をも消去するという度外れた真似をする自身に自信が無かった訳でもなかった。
が、それでも初の試み。様々な危険性を考慮……する余地なんてそう無かったが……して、この方法なら万一『死球』の操作に失敗したとしても自身以外への影響は少なくて済むだろう。そう彼は考えたのだ。
これが、着弾したにも関わらず、リチウムがぴんしゃんしているカラクリであった。

瞬時に悟った狼人がすぐさま脅迫材料の消去を実行に移すが、それは一瞬遅かった。
闇を従えたリチウムの左手が、未だ事態に着いていけていないのか呆けた表情のリタルの頭に伸ばされる。
瞬間。

「……～グレープっ　来なさい！！」

リチウムの手が触れ彼の生を実感したか、『死球』により脅威から解放されたリタルは瞬時に覚醒し、左手を掲げた。
生じるエメラルドの輝き。今まさに地面に叩きつけられようとしていた少女の華奢な身体が包まれ――
リタルの背後に、グレープが現れる。
途切れかけた意識が繋がり、重力が戻ると同時によろけるグレー

プの身体をリタルが支えた。
まさに、一瞬の出来事だった。
「……さて。形勢逆転ってか」
静かに響くバリトンの主を、狼人は忌々しげに睨みつけた。
「俺様的にも一か八かの賭けだったんだが……こうも上手くいくとは思わなかったぜ」
そして、狼人はその目をぎょっと見開く。
目の前の男が、闇を従えていた。
いや、その左手に在るのは――無だ。
黒よりもなお黒く。深い。そして。
それは一瞬で――
「……っ」
急激に膨らんだ。
視界を埋め尽くす程の巨大な虚無。
「……馬鹿なっ」
そして、狼人は視る。
リタルの背後――両手を胸の前で組んだグレープが全身に纏う、青白い光に。
「そうか、『増幅』の力……！！」
呟くや否や、鋭い眼光をリチウムの背後の少女達に向け――その

力を行使する。
それよりも早く、
「二度もくらうか！」
狼人の目前に転位したリタルが、構えた銃でその双眼を撃つ。
だが、狼人は抜群の反射神経でこれを避けると、リタルを捉えようと豪腕を彼女の片足へ伸ばした。これをリタルが、小さなクッションを投げつけて阻止する。
「……な！？」
小さなクッションは狼人の顔面に当たると、途端、巨大なマットに変化する。
「寝てなさい……っ」
狼人との境に現れた巨大マット目掛けて、着地後高く跳躍したリタルのドロップキックが炸裂した。
反動で小さな身体が跳ね飛ばされると同時に、同じ力が反対側にも掛かった。これには面していた狼人も成す術も無くマットと共に跳ね飛ばされる。
狼人より早くリチウムの横に着地したリタルは、無理な体勢のまま再び『転位』の石を掲げた。
「〜いくわよリチウム！」
輝くエメラルドは、狼人をマット毎、リチウムの目前に転位させる。

「……！？」

現状を瞬時に把握し慌てた狼人は、即座に自身の目の前の空間を歪ませ人界に通じる孔を開ける。

が、その孔はマットのみを目標と定めたか、マットを掻き消すや否や瞬時に収縮してしまう。

「ま、待て！　それではな……！？」

「てめぇの魔力じゃねぇもんなぁ……。そりゃあ、制御も難しいだろうよ……！」

狼狽した声に、冷たく告げる声が重なる。

「……！」

閉じゆく空間の孔。視界を塞いでいた巨大な障害が消えた向こうに、青い双瞳があった。

強い青は殺気と共に痛い程鮮やかな光を放ち。

――今、狼人の脳裏に、刻印のように焼き付く。

リチウムの右手が伸び完全に無防備な顔面を掴んだ。狼人の視界はそこで塞がれる。

後ろに引いた左手の中で、巨大な無が急速に収束する。

「～俺様の手下に手ェ出した事！　消え去る瞬間まで後悔しやがれ！！」

叫びと共に掌毎、小さな『死球』が狼人の腹に打ち込まれた。

崖の上から、冷静に見下ろす二つの褐色の瞳。

「……だから、忠告してやったのだ。

幾ら我の肉体を奪い魔力を行使しようと、貴様（オリジナル）では無理だと。

目標を追うばかりに魔族の在り方をも捨ててしまった貴様はもはや尊厳死も望めまい。

……認めてやろう。ククミスに取り憑かれた貴様は実に哀れな存在だった」

死が数秒前まで迫った、かつて自身を支配していたモノに冷たく告げると、鷹人は歪んだ空間の中に姿を消す。

リチウムが掌に従えた『死球』は、狼人の腹に押し付けられて一瞬、その体内に吸い込まれ消失したかのように見えた。

――直後。

狼人の体内で、無が、暴力的に膨張する。

「……！？」

押し付けられたそこに痛みなどなかった。

いや、痛みどころか。

何も失い。

何も無い。
無い。
ない、
ない。どうしよう。どんどん、競りあがって来――

「　　」

狼人は、その脳裏に青い二つの強烈な光を焼き付けたまま膨張した無に呑まれ――

今。完全に、消失した。

7

「――総ては貴女の思惑通りの結果に」

魔界の深淵。

そこは闇だった。地の感触すら無く、上下左右の感覚もない。対面した二人はハタから見ればまるで何も無い宙に浮かんでいるかのようだ。

鷹人は片足をついたまま一度も顔を上げる事なく、闇の玉座に座る己が主に告げる。

「……識っている。遠い過去から総てを見てきた」

闇の中に在るにも関わらず、互いの姿ははっきりと目にする事が出来る。

細く低いアルトを発した人物は、紫の法衣（ローブ）に身を包んでいた。

彼女は常にフードを深く被っている。故に鷹人は未だ己が主の顔を見たことがなかった。

それでも紫の生地の隙間から垣間見れる肌理細やかな白肌や、ほっそりとした顎のラインは今し方言葉を交わした鮮やかな青の髪の少女に酷似しているように思う。

「――確かに。現実（せかい）は僅かではあるがズレをみせている。

しかし……あの方の波動も、ついに現実に。

先刻、感知する事が出来た……」

小さく漏らした彼女の言葉にはどこか恍惚とした印象を受けた。

鷹人は初めて耳にする主の感情の変化に目を丸くし、少しだけ顔を上げた。

が、見上げた彼女はやはり冷徹な印象のまま、鷹人の視線に気づく事なく、鋭利な赤の瞳で中空を睨んでいた。

「……これは、もはや定められた未来（せかい）。

ダヴィ。おまえが何を企てどれ程足掻こうとももうすぐ――我が願いは成就する」

1

「いやはや。お見事です」

闇の深淵に外灯の弱光が差し込む。

照らされているのは道路に満ちてゆく夥しい量の血液。

突如場に現れるや否や、犬頭を一秒もかけずに消失させた張本人は、背後で響く乾いた喝采に無表情で振り返った。

「……この空間。その姿でお会いするのは初めてですね」

拍手を止め、慇懃無礼に頭を下げたファーレンに、胡散臭いとでも言いたげな目を向ける。

構わず、ファーレンは笑顔のまま、彼女に向かって歩き出した。

白肌の華奢な肢体。緩やかに波打つ金の髪は血生臭さい空気を含んだ風に攫われ、闇の中を流れる。細面に灯る刺すような双赤――今し方大型の犬の頭を事も無げに爆砕した人物とは到底思えない可憐な容貌の少女。

十分に距離を置いた位置で、水の跳ねる僅かな音を付属させた不吉な靴音が止んだ。

「おや。久しぶりに顔を合わせたというのに挨拶も無しですか。私も嫌われたものです」

「……一体どういう事？」

笑みを張り付かせた男に調子を合わせる気はないらしい。

険のこもった視線を興味深げに眺めるとファーレンは眼鏡をクイっと上げる。

「ですから、私は言ったはずです。そこの男は、放っておいても大丈夫だ、と」
「聞いてない」
「……っと。告げたのは貴女ではありませんでしたね。失礼」
悪びれない素振りで会釈するファーレン。
彼女には、彼がわざと自分にそう告げたかのように感じられた。
「……いつからンな態度デカくなったのよ。ファーレン」
大きな赤い瞳を、不愉快だと言わんばかりに細める。
「さて。私は昔から変わっていないはずですがね」
対し、金の瞳がウィンクすると、彼女は露骨に細面を歪ませた。
うんざりだとでも言いたげな様子だ。
「埒あかないから話戻すけど」
一拍置いて、鋭利な視線は再びファーレンを貫いた。
「アンタがあのコを護るのならまだ判る。
……なんで、あのコを見捨ててまで、この男を？
アンタ、アタシが出て行くのが後一歩遅れてたら、動いてたデショ」
突き刺さる赤は強制の意を含む。答えぬ事は許さないと厳しい眼光が物語る。しかしファーレンは「気づかれてましたか……」などと、涼しげな表情を崩さぬままソレを受け流してみせた。

「さて。貴女に答える義務がまだあったでしょうか」
「……そう言うと思ったし。
まぁ、いいわ。一応訊いてみただけだし。今回の事でなんとなく見当ついたから」

そう言うと、彼女はファーレンに向かって歩を進めた。

「察しの良い貴女のことです。
一旦場から退かれたのは、先を見通しての事でしょう」
「アンタの気配を感じたからよ。何をする気なのか拝んでやろうと思っただけ」
「……ほう？　私の動向を探る、ただそれだけの理由で貴女が、彼女とこの男を見捨てるような真似をしたとでも？
……先日皆さんの記憶を覗かせてもらった所、貴女は特にそこの男にご熱心の様子。にわかには信じ難いお話ですが……」
「――冗談（バカ）言わないで」

冷淡な物言い。徐々に距離を縮める彼女の不機嫌に歪む表情に、ファーレンが興味を示した。

「はて。貴女が普段彼等に見せている姿は総て演技だと。そうおっしゃる気ですか？」

女は答えない。
その場だけ重力が半減でもしているのか、多量の金糸は重さを感じさせぬ程軽やかに流れる。細い靴音が、やがてファーレンを横切り、

「地位が大事なんデショ。隠密行動も大概にしとかないと、尻尾掴まれるわよ」

すれ違い様に吐き捨てるように呟くと、女は倒れている男の作った血溜まりに膝を付ける。
威厳を放つ赤が消えた途端、儚げな印象を放つ細背。
それを見下ろし、口元に笑みを張り付かせたままファーレンは声をかけた。

「手当てしても無駄ですよ」

背後の不快な視線に女は顔を顰める。

「わかってるわよ」

力なく横たわる男の冷たい上半身をそっと抱き寄せて女は答えた。

「……けどね。『蘇生(フェニックス)』じゃ病気は治らないのよ。……風邪でもひいたらどうするの」

ようやく返ってきた返答にフッと笑みを浮かべ、ファーレンは背に畳んでいた白い羽を広げた。
深夜の空気。冷たく張り詰めた闇に、優雅に軌跡を描く純白。身体に纏う衣の上品な白が軽やかに揺れる。その姿は一見、どこまでも清浄だった。
一つに束ねられた――女のそれと比べると聊か薄い色素の長い金が流れる。
羽ばたき宙に浮くと、ファーレンは、
傷ついた男を抱えゆっくりと宙(そら)を進む血に塗れた女の細背に声をかけた。

「私も一つ、答えの期待出来ない問いを貴女に尋ねたいのですが。

貴女は、一体いつまでそうやって化かし合いを続けるつもりなのでしょう？」

女の動きが止まる。
僅かにファーレンを振り返った赤い瞳。
整った横顔は、しかし艶然と笑んだ。

「こっちがアンタに聞きたいわよ」

2

数日後。トランは全快した。

事件後一晩で既に傷口は完全に塞がっており、次の日には歩行する事も出来た。しかしそれでも体力が戻るのに幾日かを要した。

腹を貫かれた上、犬頭魔族を目の前にして意識を失った――そこまでの記憶を持つトランは己が身に再び訪れたこの平穏を不審に思ったのだが、倒れていたトランを見つけ保護したというクレープによると、自分が見つけた時、トランの前に魔族は居なかったと言う。

驚異的な速さで完治した怪我について訊き出そうとすると、彼女は、倒れていたトランの前に超有名な闇医者を引っ張ってきてすぐに治療してもらったのだと、物凄い剣幕で言い張った。

トランは鈍感ではあるが馬鹿ではない。それがでまかせであるという事は、耳にした瞬間に気づいた。

リタルが不在で半透明だった彼女が人を引っ張ってこれるはずがないのだ。

何かしら隠し事をしているのは一目瞭然ではあったが、あまりに断固に言い張り続け――しまいにはあの常に勝気な彼女が自分を避けてしまう、なんていう状態に陥ってしまった為、追及を止めて――数日経った今でも真相は有耶無耶のままであった。

確かに、この世界（フロース）には『どんな傷だって治す闇医者』なんてのが実在する。

世界にはたくさんの種類の禁術封石がゴロゴロしている。治癒に特化した魔力の石を自在に使いこなせる医師があの晩、都合よくグノーシスに滞在していたという話を完全否定する事は出来ない。いや、例え医師でなくとも、怪我を治す事の出来る人間はフロースには幾らでもいるはずだ。

だがしかし。

「怪我」ではなかったのだ。
トランは、あの時確かに自身に迫る「死」を感じた。
濃厚な気配、ではなく、「死」そのものを。
それは、リチウムの発動させる『死球』に近い。
自分はあの夜、確かにそれ触れ――それは完全にこの身を支配したのだ。
あの時のように。

「……」
「……トラン、さん？」

十一階建ての古マンションが誇るのは、その強度と広さ。それにこの最上階に至っては見晴らしの良さ。晴天時に立てば、街の西部が遠くまで見通せる。三部屋の仕切りを取り除いて出来た長いベランダの手すりに両腕をかけ、日の傾いた赤く燃える西の空をぼうっと眺めていたトランの背後から鈴の音がかかった。
僅かに振り返れば、夕陽に照らされ温かなオレンジ色に身を染めたグレープがリビングから空の洗濯籠を抱えこちらに歩み寄ってくるのが見れた。
自分を不思議そうに見上げる大きな瞳の色も、夕陽に負けず劣らず赤く、人を惹き付ける輝きを秘めている。

「どうか……なさいましたか？」
「ん？　……どうして？」
「なにやら元気がない様子で……！　あ、まだお体の傷が……っ」
途端に青ざめるグレープの様子に、笑いながらその頭に手を乗せる。

「もう大丈夫だよ」
頭に手をおかれたまま、グレープがほっとした表情を見せた。
「グレープちゃんは？　もう動いてても平気？」
「はい。『闇医者』さんのおかげですね」
もう全然ふらふらしないですよ、と笑顔を浮かべるグレープ。
どこかで聞いた単語に苦笑しながら、それでも、その楽し気に話す表情をトランは見つめる。
「いろいろあったね」
「……はい」
――グレープといえば、翌日目覚めた時にはもう自分の側にいた。ベットの傍らで目を真っ赤に腫らして自分の顔を覗き込んでいたのだ。
普段なら真っ先に自分に抱きついてくるであろうクレープも、グレープの背後に浮かんでいたのだが……不思議な事にグレープと比べると妙に落ち着ききっていた。
それでも、彼女も……勿論、他の連中も。笑顔でトランを迎えた。
目が覚めた後の自分には、驚きの連続が待っていた。
なんでも、大蜘蛛との戦いの際魔族に目を付けられてしまったグレープは、自分の目の前から消えてしまったあの時、なんと魔界に連れて行かれたのだと言う。
俄かに信じ難い話ではあるが、それをグレープが言うのだから信じるしかない。彼女の人柄は、突拍子も無い話をも偽りなどではないと自分に信じさせる妙な力がある。
そして、魔族の狙いが『死球』ではなくグレープにあったと言う

事を連中に聞かされ再びトランは目を丸くした。
恐らく、クレープの『増幅』の能力が目をひいたのだろう。大蜘蛛がかなり驚いていたところを見るとあれは相当珍しい能力なのだろうから。
……まぁ、彼女は石を用いる事なく発動させるから、希有な存在には違いない。
自分も初めて目の辺りにした時は相当驚いたものだ。

その後、魔族の目的にいち早く気づいたリタルが魔界へ渡る方法を閃き、リチウムと共に魔界へ乗り込み、一体の魔族を倒してグレープを助け出したという事らしい。
もう一体の『空間操作』の魔力を持つ魔族（グレープが言うには「鷹のお兄さん」で「悪い魔族では無い」らしい）が居たのだが、気づいたら魔族の気配は無くなっていたという。同属性であるリタルは大変悔しがっていた。顔を拝みたかったらしい。

突如街の異変が治まった――つまりいきなり停石が解除された件については……自分はてっきりリチウム達がなんとかしてくれたのだと思い込んでいたのだが、あれは『魔力の流れを止める石』が己の魔力を使い果たすと同時に消滅した結果、ごく自然に解除された、という事だった。
勘違いしたまま礼を言った直後、大袈裟に溜息をついたリタルが不必要なまでに丁寧に答えてくれた。

そう。リタルといえば。
今後彼女は、なんと望むだけで魔界へ飛べるようになったというからこれまたびっくりな話だ。
『転位』は一度足を踏み入れた場所であれば一瞬でその地点に飛ぶ事が出来るという。……確かに理屈はそうなのかもしれないが、空想のような魔界という別次元の空間に行き来が出来るようになっ

た、なんて得意げに話をされてもグレープの話ならともかく、これはまた俄かに信じがたい。
「本当に？」を連発したトランに「だったら今すぐ証明してみせようか」などと少女が不愉快丸出しで口にした申し出にはさすがに慌てて……丁重にお断りしたのだった。
こうして、大騒動は多くの謎を残したまま、しかし大した被害も無く、無事幕を下ろした……という訳だ――

グレープはどうやら洗濯物を取り込む為にベランダに出たらしかった。
つっかけを履くと、冷たい外気が室内に侵入するのを防ぐ為かベランダの戸をゆっくりと閉める。
奥の部屋――リチウムの個室の窓がある辺りから物干し竿にかかっていた真っ白なシーツを一枚一枚、手を伸ばして大事そうにその胸に抱く。
そんなグレープの姿を、トランは真剣な眼差しで見つめていた。

「グレープちゃん」

気がつけば、トランは手すりから離れ、彼女の背に声をかけていた。

呼ばれ、いつもの笑顔で向き直ったグレープに僅かに歩み寄ると、神妙な面持ちのまま、トランは深々と頭を下げる。

「トランさん！？　どうし……」

慌てたグレープが駆け寄ろうとした。
それを遮るように、頭を下げたままトランは声を絞り出した。

「ごめん」

グレープの足が止まる。

「……トラン、さん」

「俺。リタルにも君の事頼まれてたのに、結局何も出来なかった。……側に居たのに。

挙句、あんな大怪我まで負わせて……」

「……」

「本当に、ごめん」

訪れた沈黙は、しかし、優しく響く鈴の音に破られる。

「ずるいです」

声に戸惑い、顔を上げる。

グレープはいつもの柔らかい微笑みを浮かべ、

「トランさんは、ずるいです」

トランのすぐ側に立っていた。

「トランさんは護ってくれました。ずっとずっと、護ってくれました。……救ってくれました。何も出来なかったのは、私の方なんです。……わたしのせいで、トランさんに、あんな大怪我をさせてしまって……。

だから、先に謝るのは、ずるいんです」

「……それは」

たまらず首を振るトランを、しかし、グレープは自身の口元に人

差し指を持ってきて、柔らかく制する。
「きっと、わたしとトランさんはオアイコなんです。だからトランさんは謝る必要も、悔いる必要もないです」
「……」

本当は、きっと
ただ。悔しかったのだ。

彼女を護りきったのが、他の人間であったという事実が。
自分じゃなかったと言う現実が。
彼女を護りきる事が出来なかった、力の無い自身が。
ひどく、情けなかった。
そして同時に、その事実はトランにとって、とてもとても……重かった。

懺悔する自分をもとても小さいと感じる。
でも、そうしなければ、居ても経ってもいられなかった。
だって、この事件はまるで。あの地獄の、再現じゃないか。

どうして、護れなかった。
――どうして、また。繰り返した。

毎夜。己を責め抜いた。
あんなにまで、誓ったのに。
己を捨てた――あの赤い地獄で。

「……トランさん？」

ハッと我に返ったトランは青ざめた顔のまま、心配そうに覗き込

むグレープの顔を直視した。
「……えっと……ですね。～とにかくっ　今は二人とも元気なんですから」
両手を胸の前でぐっと握って、グレープは、彼女にしてみれば力強く自分の意見を口にした。
その仕種が、堪らない程いとおしい。
……本当に。なんで、護れなかったんだろう。
こんなに、こんなに、
「ダイジョーブですよ」
大事なのに。

切なくて、胸が苦しい。
一度は、失った。
こんなにも無力なのに、己に言い訳をしながら、それでもものうのうと生きている。こんな下らない自分の目の前に、何故か。失ったと絶望した愛おしさが、まだ、在る。
空っぽな自分の前に、何故だか。
手を伸ばせば容易に届く位置に。
欲っする存在が、未だ、ちゃんと、居てくれる――
この視界の中心で、微笑んでくれる。
ともすれば、それは普通の事なのだと誰もが勘違いしそうな程、ささやかな事。
けれど真実(ほんとう)は、夢のような　奇跡のような事。
それは、人にとって。一体どれほど尊い救いなんだろう。

――もう一度。
今すぐにでも、その細腕を引き寄せて。確かめたかった。
生きているという温もりを。
この、愛しさを。

硬く抱きしめて。もう、離さない。
離したくない。
それが何を意味するとか、抱えていた何もかもが総て吹っ飛び、一瞬で、もうどうでもよくなった。

「……トラン、さん？」
「……」

――その声が聞こえなかったら、本当に、そうしてしまいそうだった。
そう。
リチウムの部屋から聞こえてきたリタルの荒げる声の齎した衝撃は、グレープへと伸ばしかけたその腕を止めるには十分すぎた。

3

１１０３号室はリチウムとリタルの仕事部屋である。
扉には使用中と書かれたボードが下がっている。いつの頃からか、その乱雑な文字を見上げる小さな人影が共有廊下にあった。

「……ちょっといい？」

意を決して行われた数回のノックの後、

「んー」

中から短い返事が微かに聞こえると、少女はもう一度深く深呼吸してから、扉を開けた。
それからゆっくりと静かに扉を閉める。きちんと鍵（ロック）をかけて。奥へと進む足音でさえも殺して。

足の踏み場も無い程様々な機械が乱雑に置かれている見慣れたリビングルームを何とか抜け、リタルはリビングに面した個室の扉の前までやってきた。１号室ではリチウムの個室、２号室では自分の部屋にあたる６畳の洋室の扉はうっすらと開いている。そこは書庫だった。リビングと比べるとまだ整理されている方だ。壁に沿うようにして置かれた背の高い本棚には分厚い書がびっしりと並べられており、床にも様々な本や資料が所々に積み重ねられミニチュアのビル街を形成していた。
入口から見て正面の壁に置かれた二つのデスクの上に、二台のパソコンが並んでいる。一台は、いつの物かもわからない程年代モノのオンボロデスクトップ。もう一台は対照的にスマートでカラフルな配色の薄いディスプレイ。

古ぼけたパソコンが置いてある方の椅子に……調べ物でもしていたのか。分厚い本を片手に広げたリチウムが、背もたれに大きく凭れ掛かっていた。

「……なんだよ」

いつまで経っても破られない沈黙に、辞書じみた厚さの本から顔を上げる事無くリチウムが促すと、リタルは一瞬、躊躇する様子を見せた。

「……グレープとランは？　1号室にも2号室にも、居ないんだけど」

「さぁな。病み上がり同士、二人で買い物にでも言ってンじゃねぇか？」

答えて、リチウムはようやく首だけで背後を振り返り、視線をリタルへ合わせる。

リタルの顔は、いつものそれと微妙に違っていた。

纏っている空気が違うというか。

神妙な顔付きに、普段の勝気で自信たっぷりな彼女が隠れてしまっている。

「……どうした？」

意図せず先程よりも声のトーンが落ちる。

本を置いたリチウムが椅子を回して向き直った。再び躊躇うような素振りを僅かに見せたリタルは、やがて意を決したように顔を上げた。

「元ロックの石の事なんだけど」

「……」
「あの石が進化したのに気づいてから、これまであたしなりに色々調べていたの」
「ああ」

少しの沈黙の後。

「……そんな例は今まで、存在しなかった」

呟くように吐き捨てられた声を辛うじてリチウムは耳で拾う。

「どの文献も目を通した。ネットも調べた。心当たりは総て片っ端から見ていった。けど……無いの。そんな事例なんて」
「……」
「『増幅』の能力の事もね。同時に当たってみたんだけど、結果はやっぱり一緒だった。それに……」
「なんだ」
「……あたしたちは、今まで大きな勘違いをしていたのかもしれない」
「勘違いだ？」
「……」

項垂れた少女は、黙する。
預けていた背を背もたれから離し、リチウムが前傾姿勢をとった。
両腿に肘を付け、内側に腕を垂らす。

「……リタル、はっきり言え。何をどう勘違いしていたんだ？」
「……魔界に行った時。
『増幅』の能力をクレープではなくグレープだけで発動させた事があったでしょう？」

「あぁ……ありゃ確かに俺様もビビッた。クレープも、グレープと一緒に来てたのかとばかり……」
「それで、今までの不可思議な現象、総てが納得できたの」
「……あ？」

そこまで言うと、リタルは顔を上げる。
小さな顔に灯るエメラルドは真摯な光を灯したまま、リチウムの困惑の表情を真っ直ぐに見つめる。
意を決した表情で、リタルははっきりと告げた。

「あのコの破壊魔っぷり。あれはあのコの石との相性の悪さが原因で起こっている事なんかじゃない。
ただ単に、能力の制御が出来ていなかったから起こっていた現象よ」
「……なんだって？」
「あのコは、機械の魔石を『増幅』して、機械を暴走させていたの」
「……、……って、ちょと待ておい……。それだと、おまえ、最初会った時クレープが言ってた、自分は『増幅』の力を持ってるっつうのは全くの……」

半開きの窓から、夜の香りの漂う冷気が流れ込む。
口元に片手を持っていき眉を潜めたリチウム。構わずに、リタルは確信めいた声で発言した。

「――あのコ。人間じゃないと思う」
「……」
「かといって、天使でも、魔族でもない。どの種族とも外見の特徴が異なってるから」

言い放つリタルに、リチウムは厳しい視線を投げた。

決して意図したものではない。

「……じゃあ、なんなんだよ」

自然、声が荒らぐ。

押し黙り俯くリタルに、険を和らげる事無く問い続けるリチウム。

「おまえはなんだと判断したんだ」

「〜わからないわよ！！」

未だかつて向けられた事の無い厳しい青。追い詰められ声を荒げたリタルが顔を上げた。

リチウムを見つめる、その碧眼は潤んでいた。

「……わからない、けど……」

リタルの様子に、ようやくリチウムは自身の異様な焦りを自覚する。少女の言葉で先程まで読んでいたページを思い起こされた為だろう。

「……」

リタルは、慌てて両手で乱暴に顔を拭った。

決してリチウムの態度が自身を追い詰めた訳ではない。何より、目の前の男にそう思わせる事が嫌だったからだ。

自分は、自身の言葉にこそ、心が抉られたのだ。

幾度も。

でも――

何度も自問自答して、否定したくて懸命に調べて

笑うみんなを前に、遣る瀬無い気持ちのまま何日も費やした。

その結果が……これなのだ。

二人の間に生じた沈黙。
重く鎮座した長くて短い間。
問答を続けて、どれくらい経ったのだろう。
気がつけば、室内が随分暗い。
互いの顔も――

――やがて、
声を絞り出すように、少女は告げた。

「……あのコは、天使でも、魔族でも……人間でも、ない。
どの特徴にも該当しない。
唯一、性質が似ているものがあるとすれば……」

夜の帳が降りる。
戻ってきたはずの日常。なのに……室内に吹き込む、冷たい闇風。
僅かに震える声。
それでも、リタルは真っ直ぐにリチウムの瞳を見た。
強い口調で、はっきりと告げる。

「グレープ・コンセプト。あのコは……、しいていうなら……魔石に近い存在なんだと思う」

［終］

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0577d/

蒼天の鈴歌（ストッページ） [乾クエ2]

2010年12月4日14時08分発行